

1989

大正十三年一月二十九日第三種郵便物認可
大正十五年十月一日發行(每月一回一日發行)

永樂町人 編輯



十月號

【號二十九第】

前大阪朝日新聞記者SPR井上收著
朝日新聞社專務法學博士下川村海南氏序
朝鮮美術界の巨匠淺川伯教氏裝幀

半島に聴く

四六型ラフ紙六百頁
布製美裝箱入高雅
定價三圓半郵稅共
漫畫插畫等八葉入

主要目次

朝日と絶縁して

半島にきく——破綻の日より——家に歸りて——弱き娘へ贈る——疲れたる妻へ——朝日新聞在鮮同人へ贈る——尹心德嬢の死と私。

時評及思想傾向

一A對四——總督河津蓋の見立——湯淺倉平氏へ——政務總監と時局——秘書官物語——飢饉の争鬪より——放浪漂泊者へ——詩を作るより田へ。

短歌炎車洞雜唱

家に歸れる男の歌——金剛嶺頌——筑紫の歌——高京の節句——我子を歌へる——等二百餘種……血と涙と愛と感激の歌。

文藝時評

朝鮮藝術への黎明——厨川白村博士の追憶——童心藝術の黎明——現實表現と川柳價值——自己陶酔病患者——粗く春の譜——兒童劇への一考察——讀書禮讚——外敷篇

隨想と漫筆

警可を吐く話——常少女の歌の川田順氏——青葉する頃——尾東邦氏へ參る——筆まめの男より——外敷篇——露道の都にて——大高京の秋と老總督——厄日前後——露機を待ちつゝ——夏の大村より——慶北の教育界のぞき——問島より——陣屋へ——新緑の頃の元山咸興へ——總督の國境道中——漢江の解ける日——南國の海より——陸——緒士の芽ぐむ頃——湖南線にて——外敷十篇。

筆舌行脚

露道の都にて——大高京の秋と老總督——厄日前後——露機を待ちつゝ——夏の大村より——慶北の教育界のぞき——問島より——陣屋へ——新緑の頃の元山咸興へ——總督の國境道中——漢江の解ける日——南國の海より——陸——緒士の芽ぐむ頃——湖南線にて——外敷十篇。

新愁を載せて

供養の菓子等 以上

著者よ讀者へ

疊に私がこの著作の豫告をすると、遠近各方面の同情者より本屋を開業したその店開きを祝ふ旨のお言葉を澤山頂きました。本屋を始めたのでは、さら／＼と、自費出版をして、扶持に難れた償ひをしやうといふので、道のない私です、その内必ずや筆政壇上に誕生の日があらうと存じます。本書は朝日出版界のレコードといひ得るに十分な體裁内容と、編纂上の技巧を用ひ、六百餘頁に、諸先輩の漫畫業績を挿入しただけでも、高いものではなと思ひます、文學愛好の青年男女へも、教育の庭にも、家庭へも。倫理教育のテキストブックではありませんが、きつ／＼何かの贈物をなし得るものと思ひます。

京城黄金町二ノ二四八(電話本局五八二番)
振替京城五二六番

發行所 炎車洞書屋

主宰 井上收

頭の先より足の先まで

と云ふ趣意にて洋装に必要な附属雑貨部を開設致しました、實用向から高級品迄メット取揃へ、確かな品を極めて薄利で御便利に御提供申します、何卒「丁子屋の洋服」同様御評判の程御願申上げます。

▲雑貨部品目

帽子、ワイシャツ、カラー、ネクタイ、ボタン類
メリヤス、セーター、沓下、手袋、首巻、ズボン
ツリ、ハンカチーフ、小供セータ、下着類

毛布新着

有名なロシア毛布各種、旅行用として最も妙
日本毛織特製茶毛布各種、寝具用として必需品

京城南大門通り

丁子屋洋服店

電話本局

三六四二長
三九一一一
二〇九〇三
香

休日無し毎日夜九時迄營業

御用の節は店內雑貨部御呼出被下度

市内は御一軒次第現品持参貴覽に供し申候

官製食卓鹽

電機諸機械

コンチットチューブ

ラチオ

幣店への御用は
願上ます命下

京城南大門通三丁目

富田商會

(長)電本三三〇九

均質牛乳

牛乳界の大革命

日本最初の試み

均質牛乳の特徴は

脂肪を粉砕して居ります故に消化が宜しく風味の佳良と獣臭のない事は一度召上つた方には直覺せられます長らく腐敗しませぬから小兒や病人の方々にはこの均質牛乳に限ります品質本位でありますから値段の競争をせないのは弊場の主義生命であります。

朝鮮總督府病院特定御用
陸軍衛戍病院御用
京城府内各病院御用

平山牧場

電話光化門一三三番
京城東小門外

◎銘仙と

毛糸◎

秩
久
入
娘
也

堀内満輔

電話本局
八五五
九〇〇
〇六五
番番番

◎多少に拘らず御用命
の程を願ひ上げます

十月號目次

陣中即興	死と満足	長安寺村雜筆	最新皮肉辭典	山のぼり	紀念の一腰	紅の一點	あまた	生死の岐路	たわごと	夏日小景	本朝畫人異聞	臺座の話	魚釣り	京城つれく草	近ごろの事	猫ごころ	郷土自慢	運動の民衆化	母に飢へて	旅から旅の歌	生死巖頭に立てる妻	金剛山手記	妻の置き手紙	烏城兄との邂逅	公天隨筆	鈴虫を開きて	東京といふ處	東京といふ處	スタンダードから歸つて	大阪朝日新聞社	公天隨筆	京城第二高普	烏城兄との邂逅	李王聯醫局	仁川煙草元	朝鮮佛敎主幹	木浦	避信野球部監督	朝鮮新聞社	總督府農務課	釜山日報社長	朝鮮殖産銀行	京城帝國大學	鮮展洋畫家	辯護士	京城門學校	京城女子學校	中央朝鮮協會	總督府法務局	朝鮮佛敎主幹	長安寺ホテル	京城消防署長	小藤重雄	伊藤村	今川村	土居寬次	廣江澤島	中上斐七郎	井上斐七郎	佐藤七郎	中山島長	大田澤	杉原德	守原德	芥川龍之介	吉田龍次	久松前	加藤上	井田健	福村有	中村健太	吉岡義	池部賢太	井山賢	平尾三郎	寺田宏	津田常	下野村	伊藤憲	長谷川義	時實秋	關一	松田學	飯田泉	堂本貞一	和田香	和香明	脇田隆	古河美	古河美	松永	笠神志都	足立丈次郎	足立丈次郎	足立丈次郎
京畿道評議員	京城日報社	朝鮮鐵道會社	龍山電話分局	京城地方法院	總督府遞信局	總督府囑託	福岡市長	朝鮮日報社長	京城覆審法院	京城鐵道會社	總督府遞信局	大阪朝日新聞社	京城第二高普	京城鐵道會社	李王聯醫局	仁川煙草元	朝鮮佛敎主幹	木浦	避信野球部監督	朝鮮新聞社	總督府農務課	釜山日報社長	朝鮮殖産銀行	京城帝國大學	鮮展洋畫家	辯護士	京城門學校	京城女子學校	中央朝鮮協會	總督府法務局	朝鮮佛敎主幹	長安寺ホテル	京城消防署長	小藤重雄	伊藤村	今川村	土居寬次	廣江澤島	中上斐七郎	井上斐七郎	佐藤七郎	中山島長	大田澤	杉原德	守原德	芥川龍之介	吉田龍次	久松前	加藤上	井田健	福村有	中村健太	吉岡義	池部賢太	井山賢	平尾三郎	寺田宏	津田常	下野村	伊藤憲	長谷川義	時實秋	關一	松田學	飯田泉	堂本貞一	和田香	和香明	脇田隆	古河美	古河美	松永	笠神志都	足立丈次郎																					

◆聞くがま、

吉田 莊一

平壤には、二つの新聞が對立し一方は長谷川義雄氏を盟主とし、西鮮日日と呼び。他方は矢橋良胤君が主宰し、平壤毎日と言つてゐる。

○ どんな問題にも大抵相反對し、相筆戦してゐるが、老練濃厚な長谷川君は、劇場などでも、矢橋君の細君などに會ふと、公けの喧嘩は致方もないが、それはそれ、是はこれですから、どうぞ拙宅にお通りすがり遊びに来て下さい——仲々そらさない。

○ ところが、正直な矢橋夫人は、いたくこの御挨拶に感激し、歸宅して矢橋君の顔を見ると、アナタと呼び、アナタは芝居などで長谷川さんの奥さんに出會つた時、御挨拶しますか。——矢橋君、何の氣もつかず「ウンニヤ、挨拶なんかしないヨ」といふと、夫人いきなりにぢり寄つて、どうも貴郎が悪い、貴郎がよくない、長谷川さんは今日これくでした。私は涙が流れました、これから貴郎も屹度心を入れ替へて下さい——ほろ／＼泣かれたには、流石の剛腸漢の矢橋君もたゞ／＼だつたさうな

○ その後或る宴席で、兩君顔を合せると、矢橋君が長谷川君のところへ出かけ、私の女房がヒドクあなたに敬服してゐて……と前條の次第を告白し、そこで一つお杯を……に、是は近ごろの美談ぢやと一座大に興を催うしたといふ話。

雨の金山寺

足立丈次郎

空は曇つては居つたが、あちこちに青空も見え、降りそふにもないと、S君の勧誘も辭し難く、終にT君と共に三人、自動車にて全州を出發した。間もなくポツ／＼と雨が降り出した、此の雨は金山寺に著く頃には必ず晴れると、S君は頻りに瘦我慢を云ふ、頃しも夏の末の方、稻は種々として稔り、雀追ふ鮮農が或は懸小舎の中に或は畦畔に、ホー／＼と叫ぶ聲が、如何にも豊年を壽くが如く聞えて長閑である。

雀追ふ人遠近や田の稔り
走する程に行く程に、密雲深く鎖して雨はますます強く、折悪しく自動車にサイドカバーの用意なく、兩端の二人はビシヨ濡れとなりしも、雨に滴る山野の翠緑は一しほ其色を増して、眺望得も云はれず、雨に濡るるも亦風流と、こんどは自分達が瘦我慢を云ひつゝ、約二時間にして金山寺に着いた。

金山寺は全北の金堤郡に在りて、金堤驛を距る東四里、全州邑を距る西五里、母獄山の麓に構へられたる千有餘年の古刹で、百濟甄萱の創建に係るもの、雅味溢る、圓形の石門をくぐりて寺内に入る。

老樹蒼鬱の間に朱欄碧堂の隠見せる、煙雨迷濛の裡に伽藍石塔の聳立せる、風光眞に隔世の趣あり、寺僧に乞ひ雨を冒して、境内を一巡し、佛像や舍利塔に往古を憶んだ。雨中の古寺遊覽、自動車の音に寺僧を驚かしたのは罪であつたが、忙中一閑容易に得難き紀念の遊であつた。

千年の苔の匂ひや石の塔

夏木立煙るや雨の金山寺

續 二人稱

笠神志都延

せがれはコラだらう。召使はネエぐらゐのところ。宴席にありて藝妓を呼びかける。これは自覺がない、おそらくオイ、コラ、ネエの亂發とおもはれる。萬己むを得ざれば「何太郎さん、あなたは」でもやるか。ただしそれは多分おそろしく甘いあなただらうよ。

◇東京だより

謹一

○ 京電社長大橋新太郎君の將棋好きと來たら、非常なもので、廿有餘の會社の重役をつとめてゐるいそがしい體でありながら、毎日日本俱樂部や工業俱樂部で相手嫌はず取つ捕まへてはパチリ〜。

○ その大橋君、將棋に淫するの弊は糊に上げて、タバコの人體に有害なことだけを痛感したと見え、近來フツリ禁煙を斷行し、苦しむとボン〜を口に入れて辛抱して居る。所が先生闘闘たけなはなるに及ぶと、一切合切無我夢中になり、ボン〜と間違へて將棋のコマを口に入れることが珍しくない。

○ さうなると最初は氣つかずにゐるが、いくら舌の先でなめずりまわしてもいつものやうに甘い味がない、コレハは變だぞと氣がつき吐き出して見ると、手垢によこされたコマなので、その時の情なさうな先生の表情は、けだし將棋以上の見ものだとのことだ。

○ 前事務の本元倉二君も、將棋黨の一人だったが、今も觸殿町の灣呂木道場に、セッセと通つてゐる。

幹事長と怒鳴ることもある。

渡邊商業會議所會頭は會頭々々でよからう。黄海社の事務か何かだけれどもまさか事務さんでもなからう。ただ西崎副會頭をどうする。アノ副會頭、ネエ副會頭共にいひにくい。如かず西崎さん、西崎君の簡明なるにはだ。

銀行會社へ來ると總裁や社長や頭取の外は一切職名ぬきのさん付けである。時に事務さんと呼びかけるのもあるが、そう呼びかけられて恐悅するやうな事務さんはきつと永つつきしない。支店長々々もおかしい、支配人々々もヘンだ。貸付課長だの石炭部主任だのといふ呼びかたはない。ただホテルやレストランへ行けばそれはマネージャーと呼ぶだらう。

裁判所とか警察とかいふ方面こそ奇しきはない。オイ判事ともネエ検事ともいはない、判事さん検事さんといふ。書記さん廷丁さんとかいひかねない。内務部長をつかまへて内務部長と呼びずてにするが警察部長の方はそうはまゐらぬ。時あつて部長さんともいふ

その他典獄さん、署長さんも慣例のやうだ。大將は閣下だけれども大臣は大臣でよいが名もなき警視に對し署長さんはおかしいといへば甚だおかしい。

神主、坊主は知らぬが相手次第で使ひ分ける覺悟。女房はオイ

井上準之助は財界の怪物であるが怪物相當の敬意を表示すべきことばがない。大臣でも總裁でもない、何處かの會長位はやつてるかも知れぬが、かといつて會長々々でもあるまい、ではないか。爵位がないから男爵は、子爵はともいひにくい、閣下は無難だけれど昨年朝鮮漫遊の際閣下せめて閉口したと不平をいつて居たから取り下げることにする。商大や京大の講堂に立つけれども「先生」ではない。同時に政黨領袖でもないからその方からも先生とはいへぬ。博士とまぢがつた向はあつたやうだが實は法學士に相運ないけれどもさりとして學士が〜でもあるまい仕方なく〜貫下様は〜とやつて見たが釣合が取れぬ。面倒くさいから、井上さんあなたは、で用談を片付ける。それとも氏のおかげで土地會社の社長にでも推薦してもらひでもしたら又何とか敬語を發明する氣だ。

政黨領袖は先生だが總裁になることは明に總裁は〜とやる。故加藤伯は生前子爵だから時ありて子爵々々をつかふ。ごせんさまとやつてあいつはペラポウだねと貶黷された男があつた。總裁はそれだよいが顧問、総務となると顧問総務とはいはぬ。幹事長、幹事も同様だ。ただ發表物でも聞きかへすときは議院の廊下などで、オイ

京城の瞥見

松 永 工

物は馴れると不審識がなくなる
永く京城に住んでる人々には見る
もの聞くものが、不審識にも可笑
しくもない事でも、新しく来た人
の目や耳には異様に見聞されるも
のである。

京城に新米の私が雑筆のお目見
へに、京城最初の感じをお話して
見る事も、一興でない事もあるま
いと思ふ。

先づ京城驛に着いて困つたのは
赤帽の鈍い動作だ、手荷物を受取
る迄の時間が永い、停車場の構造
にもよるが、あの位のエレベータ
ー経路としてはちと遅過ぎる。

道路はメインだけは中々舗装が
よく行届いて居るが、人道と車道
とが別けられてあるに拘はらず、
通行者が之を區別して居ないのに
は驚かされる、本町の入口や十字
路では交通巡査が相當に活動して
居りながら、歩道の取締はちつと
も出来て居ない、歩道の中を大威
張で人力車や自轉車が走つても、
少しも取締つて居ない、警官も通
行人も歩道の意味を知らないのも
はあるまいか。

本町の取締もそうだ、入口では
莫迦に入釜敷左右の往來を整理し
て居るが、一ツ中にはひとと目茶
苦茶だ、あの人込の中を自轉車が
無制限の快速力で飛ばして居る、
危険千萬で安心して歩く事も出来
ない。

夫から京城の車夫は中々かけ離
をしないし警鈴も中々ならさない
又正面を注視して挽くものが少し
大抵下を向いて挽いてるものだけ
ら、障害物に衝突し損ふ迄氣付か
ずに居る、鮮人の多い爲だろう。

鮮人は、非常に果物好きだ。支
那人もさうだが鮮人は中々よく果
物を喰ふ、辻々は勿論往來する處
季節の果物露店を出して居る、立
てる人も踞てる人も、歩む人も大
抵は手に果物を携へて居る、果物
に付て非常な嗜好を持つて居る事
は内地人の及ぶ處ではない、莫も
そうだ、鮮人の殆ど九九パーセン
トは愛煙家だと云ても差支あるま
い、誰でも彼でもきつと長い煙管
か兩切葉のパイプをくはへて居る
そして仕事をして居る間でも歩い
て居る間でも、のべつ暮なしに喫
煙して居る。

食物も割合に發達して居る、料
理家で出す料理は日本式や西洋式
を加味して居るのが多いから、純
朝鮮式の物として批評は加へられ
ないが、却て家庭の食物やスリチ
などの食料品を見ると、案外おつな
物を食べて居る、殊に肉食に付て
は内地人を遙に超越して居る、牛
肉の如きは骨、頭、臍、臍など何
れも一緒に煮てスープにして居る
魚類なども内臓を賞美して居る處
など中々食ひ道樂だ、労働者の辯
當を見ると内地の職人が持つ様な

【四】

アルミニウムに増蝕と飯とを詰
め合すといふ様な幼稚のものでは
ない、大抵小豆飯を井に入れて汁物
が添へられて居る、スープと箸
と兩方を携帯し、汁と飯とはスプ
ーンで食べ、菜類は箸でやつてる
中々せいたくな食事だ。

睨むといふ動作は鮮人は中々巧
妙だ、可成り永く睨んで莫もふか
すし食事もやる。又唾も中々よく
吐く國民だ、煙草をのべつにのむ
せいだらう。

賣聲でロシアパンと豆腐屋鈴は
亡國的音律の様に聞へる、あれを
聞くとベルスといふ脚の馬の鈴を
思ひ起す、靴直しも可成り多い大
道職業だ、よくあれだけ多い直し
屋が飯を食つて行ける事だ。

成る程傘のない國だ、昔は雨が
なかつた爲だらうが、此頃の様に
雨の多い時節になつても、傘をさ
して居るものが少い、言葉の發音
は中々發達して居る、アクセント
が中々宜しい、支那もよいが朝鮮
のも舌遣ひがよく發達して居る。

浮浪者の多いのには驚く、四辻
や公園の様な處に相當な服裝の者
が、終日くわへ煙管でぶらぶらと
立つて居る、之等の人々は自分の
生活に必要な米の貯へがあるから
己れはかう遊んで居ても食つて行
ける身分であることを、誇り顔に
立つて居るのだと言ふ人もあるが
まさかさうでもあるまいけれど、
兎に角終日動きもせずぶらぶら遊
んで居る人間の多い事は事實だ、乞
食も多い夏の眞晝中銀行の石段や
高樓の軒下などに寝て居る浮浪者
がどの位あるだらうか。

鮮人が白服着るのには何か起源
があるのだらう、染織の發達しな
かつた爲かも知れないが、兎に角
石炭かつぎや煙突掃除人夫迄が管

危険千萬で安心して歩く事も出来
ない。

なと申すは、
當を見ると内地の職人が持つ様な

石灰かつぎや煙突掃除人夫迄が當

天の道

古河隆美

若しも低き地位に居るものが、高い地位に居るもの、信
望を得ないときには、何うなるであらうか。謂はずもがな
己が身に如何に才能が有つても、人を治むることは出来な
いのである。

されば高位の人に信望を得るには、如何にせば宜しきや
と云ふに、之には相當の方法がある。なんのことはない、
唯友人に信用せらるれば、夫れでよいのである。

ところが友人に信用せらるゝにも亦其の方法があるので
ある、夫れは恰かも親に事へて以て喜ばれるやうにすれば
よいのである。然らば如何にすれば親に喜ばれるかと云ふ
に、之れ亦むづかしい様であるが、我が身を反省して誠で
あらねばならぬ。

世を偽り、人を欺き、うそも方便などと謂ふが如き人は
決して善に明らかなる人では無いのである。斯かる人は其
の身に誠であることは出来ない、誠であることが出来なけ
れば決して親に喜ばれることは困難である、親に喜ばれる
ことが困難なれば、何うして友人に信用せられやう、だか
ら古人も至誠は天の道であると謂ふて居る、即ち人たるも
の道である。

左すれば友は選ばねばならぬこととなる、直言で、信實
で、古今の事情に精通して居るものを友とするときは、我
が身に益があるものなれど、虚勢を張りて、不正直で、誠
心のない、實意のないものを友とすることは、我が身に損
があるから、避けねばならぬことである。

要之、己が身を反省して誠であるものを友とし、我が身
も反省して誠であり、友人間に信用せらるゝことは最も肝
要なることである。西哲曰く、

Be honest and truthful.
諸君、正直にして虚言を言はぬやうにせられたい。

然黒くなるべき商賣して居ても、
白服を着なければならぬ様に習慣
を守つてゐるのには、どうしても料
簡が解らない。

婦人は美人が中々多い、内地の
美人よりもきれいだ、女學生の服
装もよい、あの結髪、白い上衣、
黒いスカートほんとに氣持のよい
調和だ、女學生に美人の多いのに
も驚く。

こんな事を言つてゐる自分も、も
うぢきにこんな事が不審議でなく
なるのだろう。

◆天扶羅會記

一 記 者

◎この間、廣江氏のテンブラ會
が、花仙で開かれたが、操觚界の
有名氏はかりを網羅して、仲々の
盛會。

◎藤村氏が會主に代つて「君も
奉天にばかり行つとるで、我々も
は大分疎縁になつてゐる、一會催
うしてはドウだと勸めて、今夕の
會を開いた」といふと。

◎來賓代表の大垣翁「思はぬ御
馳走を振舞はれる所を見ると、い
づれ奉天邊に、唯ではおけぬ好い
ことがあつて、口裏きのためと思
ふから、うんと御馳走になる」

◎すると、廣江氏「これはたま
らん」と大拍手の裡に立ち上つて
「決して、そんな行きさつてはな
い」と斷言したのはいいが、その
口の下から「我輩もとより木石で
ないから……」とすべらせたので
滿座大喜び。

◎花仙のテンブラは、やつぱり
好い。その證據には、牧山氏など
は、鍋のそばに固定して、うまい
／＼と禮讀して、テコでも動かなか
つたのである。

法廷漫談 雜記帳

— 忘れるといふ事 —

脇 鐵 一

るらしかつたのに、酔つて滑かになつた彼の舌は竟に取り返しのかめことを饒舌つてしまつたのである。何となれば、彼がその折語つた一くさりの物語りこそは殺人の被告として上戸の彼を酒氣のない留置場に送り無粋な法廷にまで引出したのであるから。

彼はその宵彼の財布の膨れてをる由來を事細かに説いて李完用の徳を讃へたまでは不難であつたが實はと驛を落して夢にも秘めてゐたその昔侯を明治町なるフランス教會堂の門前に要して成らず萍蓬今に至つた數奇な運命をもしんみりと語つて話を結んだのである。

物語のトリックとしては實に畫龍點睛の妙がある。けれども、畫いた龍に魂をいれた名工は、終に自分の命をその龍に奪はれねばならぬ。座にあつたものによつて彼は官に密告されたものらしい。

法廷に於ても彼は極めて素直であつた。往年の彼に漲つてゐた兇血は十五年の歳月にサツパリと洗ひ去られて今や彼は善良な臆病な一職工である。怨讐は時と共に流れて新しい世界が彼を迎へてゐる殺人未遂罪として二年の懲役に三年の執行猶豫は彼に輕過ぎた形ではなかつたやうだ。

妄執を去り怨恨を忘れることはやがては生の創造であると雜記帳はかうおつに結んでをる。

夏の夜を樂しむほどの者は晝の暑さをかこつてはならない。洗ひさらしの浴衣に柿澁團扇、人の世のいざこざをサラリと忘れ、妖光を曳く流星の數でも丹念に數へてをるに限るやうだ。

西歷千九百九年の暮日耳義皇帝

の崩御するやこゝ京城でも明治町のフランス教會堂でその遙拜式が行はれた。式には時の韓國總理大臣伯李完用をはじめ多くの高官たちが參列した。日韓合邦の機運がやうやく熟し韓國の國論は親日排日一派に分れて鏑を削つてゐたが排日派の中には官に總理大臣に在つた李完用と野に一推會を奉ゐてゐた李容九とを親日の兩權梁と目して之が暗殺を企てた者があつた當時のことよ、李完用がこの式に列するといふことはこの陰謀實行の機會を與へた。

式は午前十一時頃終つた。李完用は俾を驅つて教會堂の門を出た陰謀團の首魁である當時僅に二十歳を超えたばかりの李在明と李南秀(假名)とは匕首を呑んで李完用の歸途をその門前に要してゐたのである。先づ李完用を見つけた李在明は群集の中から躍り出て車上なる伯の腹部を刺し逃ぐるを追つて更に背部をも突いた。組みついて來た護衛の巡查を斃して尙も李完用を追はむとしたが車夫に押へられて縛についた。事は突墜の間に行はれたので李南秀は機會を失した爲かそれとも李在明が既に目的を遂げたとも思つたかそのまゝ姿を消してしまつた。雖も李在明は死刑に處せられ一味の者は夫々相當の罪に座したが李南秀は

竟に縛につかなかつた。

この物語の興味は暗殺の陰謀や兇行の状況に關するものではない。況んや犯行に付て法律上の價值判斷をせうといふのでは更々ない。ぶざまに毛壓を出して庭の雜草の中から攻め寄せて來る蚊の襲撃を團扇で舞ぎながら窓をとほして吹いて來る一抹の涼風を樂しんで、ペソを動かしてゐる筆者である。理屈をいへば汗がにじむ。雜記帳の筋は次の様に轉回する。

大正十三年の冬やうやく深い頃の宵である。都は京城の街はづれ小穢い酒屋の店頭に四五人の客が濁酒を傾けてゐたが、その中に四十を過ぎたと思はれる職人風の男があつた。この男こそこの物語りの主人公である。

彼は貧しい職工であつた。數日來今は侯爵李完用家に備はれて浴槽の修理をやつてゐたのであるが今日はその仕事も了へて約束の賃金の外にそこばくの心付けを貰つての歸るさである。彼の財布は久し振りにふくれてゐる。飲みたくても財布と相談づくで我慢をして來た酒も、今日は誰に遠慮がいらう。舌につく酒の味ひ、鼻に快い酒の香ひ、所詮は彼も上戸である飲んでは命じ命じては乾すほどに酩酊は醉もまはつて來た。鼓腹擊颯、彼は今を世の盛りと觀じてゐ

夫々相當の罪に座したか李南秀は
環、彼は今を世の盛りと罷して

或る日曜の午後

和田香明代

「お母様、佛様におそなへしたのは蠅がつくから、もうさげませうか?」……皆大笑ひ。
元氣な顔、楽しさうな顔、華やかな笑ひ、一家揃つて手製のおやつにしたつづみをうつ、平和な日曜の午後はかくして過ぎて行つた

◆江湖風聞録

吉田 莊一

○京南鐵道のわかき經理課長の井上賢太郎さんが、これから本誌に隨感隨想を寄せることになつた
○氏は、早大出身で、電氣經營もやり、新聞經營もやり、わかい割に、つぶさに世波を踏破して來てゐる。筆の方でも勁健だが、その得意は、壇上舌を鼓して、その意見を述ぶることだらう。雄辯の點にかけては、實に珍らしい新鋭の一人である。

美穂子さんは今日のおやつは學校で習つた果物のゼリーを拵へると朝から大騒ぎ。
お書頭からお臺所で「ばあや此の鍋使つてよいの?」
「お母様お皿はどれにしませう?」などと賑かに立廻つて居る。面白げにはあやを指揮する聲、高い笑ひ聲に交つて坊やのハシヤギ喜ぶ聲、楽しさうに織り交つてこちらまで流れて來る。私は青葉くぐる涼風を心地よく受けながら、ノンビリした氣でお椀側にミシンを持ち出しワイシヤツのつくるひをして居る。書齋の方ではさつきまで何やら大きな聲で讀んでおられた主人の聲がいつの間にかやんで何の音もない。キツト詩でも作つておられるのでせう。思ひ出した様に軒端の風鈴がリン／＼と涼しげになるばかり。バタ／＼坊や飛んで來る。

「お母様!!お姉様ステキな物を作りましたよ、一寸いらつしやい」大喜びで私を引つぱつて行く。お臺所の真中に机をおき、赤、青、黄、色とり／＼のゼリーが涼しげに人持ち顔に列んで居る。「まあ!!美穂子さん良く出來たわ、色の取り合せなど藝術的だわ」水兵服の上に眞白なエプロン、姿のかひ／＼しい美穂子さんはや／＼上氣した顔に始めての實習に成功した喜びをた／＼ながらしばし眺めて居

る。

「お父様のはこれにしませう。お母様にはこれを上げませうね。坊やはキツト大きいのが好きでせうからこれが良いわ」それ／＼食卓の方へはこぼれる。

「お父様、早くいらつしやい」書齋の方へ向つて子供等がラジオをかけるがデシイバが悪いのか何の返事も無い。

二人は待ちかねたらしく書齋にかけこみ書見に夢中のお父様を引ぱつて來る。純白のテーブル掛けに、涼しげなゼリーを圍みながら「坊やお姉さん拵へたのおいしいでせう。澤山お上り。坊やお姉さん好きでせう」坊や答へもやらすおいしさうに頂くばかり。

庭は眞夏の太陽の直射をうけてすべてが白く見える。
サツキから油蟬がジ／＼と暑苦しい聲でなくて居るが家の中は別世界の様に涼しい。明けはなした縁からたへず涼風が平和な食卓を訪れては何處かへ去る。

「美穂子、いつの間に覺えたかなか上手だ。お母さんもおつしやしろろ」と笑ひながらおつしやる。美穂子さんと私は思はず視線がバツタリ合つてどちらからともなくニコ／＼となる。坊やはいつの間にかたげられたかお皿の中は奇麗にかたづけられてもつと頂きたい様な顔。

○雄辯の殿堂を築くために、議太をやり、謠ひをやる人が多いが、氏は青年時代同じ意味で、琵琶をやり、浪花節をやつた。處が生れつき器用に出來てゐるので、それが玄人に近く、大に聴くに堪ゆるので、到る所一つやれ／＼でマルデ藝人待遇となつた。始めは面白半分やつてゐたが、とう／＼憤を發して「我輩を何と心得てる!」遂に如何に懇請しても、もう美聲は聴かれなかつた。

○が昔は忘れられないもので、自宅で陶然一浴、湯つぽに浸つてゐると、ツイはめが外れて、南部阪などが飛び出し、そのうまさに新婚の夫人などは、うつとりとなり、テンブラを黒焦げにしたといふ奇談もある。

○風格卓著、識見手腕之に伴つてゐるから、其將來は最も有望。

對話

堂本貞一

【八】

する地方青年をして如何なる感懐を懐かしむるか、深く……」

「まあ、まち給へ。そりやよくわかつてるよ。しかし、君の考へは消極的だよ。結局、民心を萎縮させる……抑々、都市は一國文化の中樞であり、京城は朝鮮の首都として全朝鮮文化の中心となり、支配者となり、而して先導者たるべき使命を擔ふて居るんだから、京城の光輝は總て全朝鮮の光輝となるんだもの、大に其の外観を整ふると共に内容の充實を期する必要がある。殊に、僕の理想を以てすれば、朝鮮の將來は商工業に俟たねばならぬ。産米増殖、結集さ、しかし、人口の増加と民度の向上とは、忽ち此の産米増殖の成果を喰ひ潰してしまふのは歴然たりさ。茲に於てか、何時までも原始産業たる農業にばかり、囁りつて居たつて駄目さ。途を商工業に拓くのが根本的對策と思ふ。斯くて都市の重要さは益々加はるわけさ。僕は現在の施設を物足りなく思いこそすれ、贅澤過ぎるとはチツとも思はない」

「君、そう昂奮し給ふな。僕だつて、朝鮮の將來が商工業の發達に俟つこと大なるものあるは充分認めて居るし、京城の都市施設もモット／＼整備充實して貰い度いと思つて居るさ。しかし、民人の眞の惱みが……」

「また、君の口癖泰邊に存しかね、ハハハハ……」

「そり、先き廻りをし給ふな。ところで、君の言はるゝ通り、大英帝國今日の富強は商工業の賜である。けれども、其の倨然として獨占的地位を占め、世界の市場に君臨して居つた英國の工業も、後進氣鋭の競争者が簇出し勃興して

「府廳も態々出來上つて見ると仲々立派だネー、先づ、これで大京城にふさはしい廳舎が建つたんだから、吾々府民として大に祝賀すべしだネー、君！」

「大京城といへば、永登浦を入れるのが、よいのわいのと議論があるやうだが、僕をして言はしむれば、何ぞ眼孔の狭小なると笑つて遣りたいよ」

「すると君は……う」

「永登浦なんか君、問題ぢやないよ。宜しく仁川まで抱擁する大策の下に大京城を建設すべしさ。京仁間の鐵道を電化するなんぞ當然さ。それよりも、僕の京仁二府論の核心たり申軸たる計畫は京城港を開くことだよ」

「京仁を一體とし、今の仁川港を京城港とするんだね」

「それだから、君にも困るよ。燕雀なんぞ大鵬の志を知らむか。アハハハ……僕の京城港案は漢江の水流を整理變更して大運河を造り、龍山埠頭に大船巨船を横着けするんである。連年惱まされる水害なんか昔の夢と消え失せてしまふよ」

「京仁間に運河を通ずるは大に可なりさ。然し、遠洋航路船を龍山まで入れるのは大計畫だネー」

「君、しかし、よく考へて見給へ。宇内の世界的良港は多く河川港であり、人造港ぢやないか！

ロンドン、リザアブル、ハンブルグ、ニューヨーク、ロツテルダム、アントワープ……」

「わかつたよ」

「まあ、聴き給へ、殊に、彼のマンチエスターの如きは、海を距ること實に三十六マイル、何でも今から四十年も前だが邦貨に換算して約二億圓の巨費を運河の開通に投じたと云ふではないか。此の氣魄が……ウム、此の氣魄が、マンチエスターをして今日あらしめ、大英帝國をして今日あらしめ、大ものと信するね。而して、我大京城が東洋のマンチエスターたる日には……君、想ふだけでも愉快ぢやないか。現在の停車場でも、公會堂でも、新築の廳舎でもみんな小さくて仕様がなせい」

「氣魄當るべからずだね。しかし、君、僕は此の文化の都市集中と云ふことは餘程考ふべきことと思ふ。先達つても金某と云ふ朝鮮の青年が來てネー、これは極く眞摯な感ずべき青年だが、その言ふには、朝鮮の最重要問題は經濟力の涵養である。急激に流入した文化の光彩に酔ふて、慾望徒らに向上し、經濟力が之に伴はない。茲に朝鮮の病患が醸されつゝあるのであつて深憂の存するところは此の點である。それでだね。京城驛にしる、總督府にしる、また定廳にしる、其の壯麗な輪奐に接

港であり、人造港ぢやないか！

定座にしる。其の壯麗な輪奐に接

港氣の意をなした

来たために漸く苦しくなつて、何時しか昔日の勢威も稍々傾きかけた。そこでビツクリして足元を顧みると田園荒れて春悲し矣と云つた工合さ。實に、今日、英國の惱みは田園の荒廢にあると謂ひ得やう。而して、宇内の列國が、農業から商工業へと遷り行く現下の趨勢を辿つて己まないならば、此の英國の惱みは、やがて世界の惱みとならう。否、現になりつゝある幸に、朝鮮には豊富なる水産がある。農業も將に陣容を新たにしよう。茲に、健實なる底力ある商工業の興起を期待し、京城府の前途を祝福しやう……」

雷燈も點けずに話し耽つて居る間に夜も更けたか、月光水の如く流れ入つて樹影冷やかに、蟲聲頻りである。

奈良たより

河野政廣

松本兄——老生爾來徒らに風塵に奔走して俗腸更に詩趣を藏せず強て御來示に應ぜんとすれば漸汗滴々、暑熱一層を感ず。
河豚多き北九州の酒興など夏座敷酒に生きたる男あり冷し酒隣に女の謠かな
時鳥の巢箱かけけり寧樂の山青藤獅子舞來り囀しつゝ、茅切りて鮎つゝみくれし女かな
峠道の釣鐘草や山かつら秋草や兎と遊ぶ子供達
枕流の亭あり蓮の飯匂ふ
滄海の一粟を嘆つや星月夜

朝鮮を去らぬ

飯泉幹太

九月號雜筆今朝面白く拜見しました。私が朝鮮を引上げると書いてありますが、アレは何かの御聞違でせう。私は會て聲明した通り既に二十五年餘朝鮮に居りますので餘生を朝鮮のため捧げる事に決めて居ります。ドウか今迄通り御指導御親交を願ひ上げます。海水浴やゴルフ修業に浮身をやつし雜筆の方に御無沙汰をして何とも申譯けありません。
先日所用あつて東上した時、日本俱樂部で時實さんに會ひました、仲々の御元氣に見受けました。
本日は關東大震災の記念日です、思ひ出してもゾットする日です。幸ひ各地とも快晴の様で二十十日を無事に過ごし得るは何より仕合せと存じます。
右御無沙汰御詫勞東京引上げ正誤御願迄。

世間ばなし

平田久雄

◎東大門署長の加藤さんといふと、今でも強情我慢な先生だから若い時は、さぞかし鬼のキモでも毎晩スキ焼にして、舌戯でも打つたんだらう。
◎その加藤さんの話——二十歳ばかりの時、師範學校在學中、同窓と高山めぐりをやる。すると、高い山に限つて山王様といふ石彫りの神像が立つてゐる。そして荷くもそれに不敬な措置があれば、忽ち山荒れがして、大抵のちはないといふ話。それを加藤さんが聞いて『フ、フ、そんな馬鹿なことがあつてたまるか』セ、ラ笑つたまではいいが、先生いきなり山杖を揮つて、山王の頭をぶんなぐる、背中をどやしつける。足をあげて、谷の底へ蹴落す。いやはや散々の武勇を表現する。
◎すると、マダ小半時も経たぬに、あな不思議、一天俄に晦冥、雷鳴さへ打加はつて、どつと響ひ寄る大山荒れ、大石小石、木ツ葉の如く落下して、一同は地べたに喰ひつき、イエスを呼ぶもの、釋迦を念ずるもの、天理！、大本！、黒住教！。
◎流石の武勇先生も、青くなつてゐると『斯うなるのも君が山王をどやした結果だ。我々を助けるために、君はこゝで首でも釣つて犠牲になつてくれ、どうだ！』蓋し加藤さん一期一生の大災難であつたさうな。
◎さし加へていふ、爾來加藤さん、ふつつり武を慎み、専心文事にいそしんでゐるが、能文麗詞では、サーベル界稀有の材であるといふ。

將棋觀戰記

一 記者

大阪棋界の麒麟兒と謳はるゝ辻繁之助六段は、或る縁故で、當分の京城に住まふこととなつた。彼れはマダ三十の上を、幾ツも出でない壯年棋士である。阪田（八段）門下の俊銳で、棋品の精逸は夙に斯界の定評がある。

○ 八月末の或る日、本間（徳雄）士木校師の宅で、棋會があつた。といふのは、本間氏の師であり、舊交のある平壤の池田即八六段が當日京派へやつて來たので、それを歓迎勞々、同好に引合せる意味で、當日の會は、催されたものだった。處が、機縁は不思議なもので、そこへヒョッコリ前記辻六段が高橋草之助氏の紹介狀を持つて訪ねて來た。六段同士の初對面、初手合せである。會集がどよめき渡つたのは、いふまでもない。

○ 鈴木勲任技師、橋本豊太郎氏など同好の面上には、好奇と感激の情念が溢れてゐた。兩棋士は懇懇なる初對面の後、局に向ひ、振り駒で、先手後手を決する。凄愴無比の血戰は、辻氏の先で開かれた。

○ 茲で、池田氏のことを一寸書いて置く。氏は別に師匠をとつたこともなく、東京へ遊んで、専門的に棋學を修めたでもなく、全く好きから業餘之を玩んだだけで、棋品六段に及び、而かも實力の健強、棋鋒の犀利、優に専門棋士を凌ぎ、聲名は、夙に東都及び京阪に響いてゐる。まことに、彼れは當代稀に見る天才兒なんだ。

蕃椒

松田學鷗

◎秋風蕭颯吹き度る頃、朝鮮の田舎に行くと、どこにも蕃椒が十しある。その赤々と日に映つる處に、鵲の遊んでゐるなどは如何にも畫としての風趣がある。朝鮮では老若男女すべてが蕃椒を嗜好する。大抵の食物にも加味すれば、漬物の中などには眞赤になる程入れる。内地視察の觀光團や、修學旅行の女學生までが、蕃椒を持つて行かねば、内地の宿屋の飯は食はれぬと云ふてゐる。恐らく蕃椒を嗜好すること世界第一であらう。

◎而して其名を苦草と云つて居り、又、蕃椒、唐椒とも書く、種子傳來に就ては支那よりと日本よりとの二説があつて、日本と云ふ方には『元來蕃椒は毒草である。日本人は朝鮮人を鑿殺する目的で輸入した、然し朝鮮人の體質はそれを食べて死ぬやうな者でなく、却つて之を嗜むに至つた』との俚言もある。

◎それから内地の蕃椒であるが、唐辛、南蠻、胡椒其他種々の異名があり、其の種子到來に關しては、朝鮮と同じく二様あるのも亦た面白い。

(一)近世、朝鮮より來たれり、故に高麗胡椒と稱す、其の形、大小長短、尖れるあり、圓きあり、上に向ふあり、下に垂るゝあり、肥壤の地に宜し、一所に種をうゑて、苗生じて後うつしうゑべし、或好事の人は盆にうゑて珍賞す(譯)

文祿年中、秀吉公の朝鮮をうち給ひし時、彼の地より種を持ち來りて、初めて日本に、種うる故にかうらい胡椒といふ。又西國にて南蠻胡椒と稱す(譯)

(二)本邦、蕃椒を用ゆるもの百年に過ぎず、煙草と相先後してともに蕃人種を傳ふ。海西より移し栽を、四方これあり、初め民間の賞をなせしも、近時饌に上ほるの具となる。此れ能く胸膈を開き、鬱滯を利用するの故乎(本朝)按ずるに、蕃椒、南蠻に出つ、慶長年中、煙草と同時に來る也(和漢三才圖繪)

其の當否は知り難きも、予は二説に左擔する。

ゴルフ雑感

關 一 雄

松林を縫ふて銜する囀と鳴る響、それが而も碧空の下雲に入るかと思はるゝ迄に延びて、二百五十、三百ヤードを飛んだ時の愉快さ、飛ぶ球を眺め入つて思はず頬上に上る微笑の快さ、到底之はやらぬ人の想像も出来ないものであつて、結局入つたが最後止められないといふ、ゴルフには云ひ得ない一種獨特の興味があるのではあるまいか。

大邱に來た序だといふので、僕が京城の俱樂部から招かれて京城ゴルフアーに、清涼里のリンクでコーチした五日間の感し。左様京城ゴルフアーの種々な點を云ふと、餘り露骨に云ひ過ぎると叱らるゝかも知れぬが、大體に於て京城のフォームとスピングは中村、武者兩氏の型に分れて居るといふ事が出来やう、此の間矢島氏の如き獨特の型を持つて居らるゝ方は別として、スピングの如きも大體フラットスピングに近いマークライトスイングとフラットスイングとの中間のものが多くやうで、一般的に云へば型其他も極めて粗雑な荒削りの方が多いやうに見られた、併し其の缺點を改めらるゝ事の速さと、容易である事には驚く程のものがあった、丈けに其の將來は先づ大に囑望さるゝものがあるかも知れない、特に兒島、伊藤氏など若さと力から見ても最も多望な人で、中村、武者氏等に至つては殆ど完璧に近い人とも云へやうか、矢島氏のアノ暢やかな型と奇麗なスピングには非常な軽さと自由さを見るゝ丈に研究を要する所がありはしないか、と共に其の將來は蓋し一層囑望さるゝものがある。

其の他大體に於てスピングがフラットである爲めか、一般にフィニッシュが左方に引かれ勝であるは考へものである。

何れにするも内地其他のものに比して、コースの善悪は別として非常に手軽にやれるといふ事は羨ましい程に恵まれた點で、同時に追々と一部のグループの遊戯でなくて一般的に開放されて行く、その道程であると思ふと一層心強さが感ぜらるゝ。

局面は、七六歩、三四歩、二六歩、八四歩、七八金、三三金……と相懸り模様に進び、さし進んで四十手内外に至るや、双方の考案漸く慘澹、盤上一抹の凄氣沈澁し對局者も、傍觀者も慘として一語を發するものなし。池田六段憤然として勇を鼓し、飛角を切つて、敵壘に迫る。形勢促進、危きこと轟卵の如し、接戦數十合、入をして唯茫然睡を吞ましむ。辻六段よく凌ぎ、よくこらへ、終盤池田氏の七二飛打つの過誤を咎めて、猛然寄り返して、遂に辻氏の勝となる。この手數實に百二十有六、茲に至つて感歎の聲、一時に上る。

○ 池田六段は、これを遺憾とし、その翌午後二時を期して、再び京城俱樂部に第二手合せ會を開く。當日參觀するもの多し。池田氏先番にて、飛を七筋に振り、八幡！この勝負必ず會稽の恥を雪がんと一駒々々火を噴く。初盤辻氏頗る優勢なりしが、六三歩打つの一手をばぶき、成角を七八に穿入せしより、始めて池田氏機を得、八三歩、と敵飛を誘致し、次いで八四歩と打つてこれを退け、手順に五六角と入れて、大勢漸く定まり、以下辻氏奮闘努力、よく守備したるも、六三歩の缺陷は最後まで影響し。百三十餘手に至つて、辻氏遂に棋子を投ず。池田氏見事に復讐に成功した。

○ 辻六段は、若草町若草湯では(若草町一六三、本町より入る横丁)に道場を開いてある。少くも三四年は居るだらう。記者は、池田氏の近くまた捲土重來することを深く望んでゐる。

唐津の半日

時實秋穂

木浦を木浦と讀むだと云ふので内地に居る人の朝鮮に對する智識の乏しいことを憤慨して話した人がある、それを思ふと、豫め之は内地の唐津であつて、朝鮮の唐津でないことを斷つて置く必要があるかも知れぬ。

近頃の若い處女子達、又それから馴らされた新しい人達の中に友達などと別れるときに、ハンカチを振つて別を惜む習のあることは皆さん御承知の通りで、これこそ最新流行と喜ぶで居る人も少くなからう、そこへ領巾振山の話なども擔ぎ出すのは、聊か野暮であるかも知れぬが、頃は欽明天皇の御宇、高麗討伐の將軍として大伴狹手彦が出征の首途に、寵姫松浦佐用姫が別れを惜むで、山の頂に登つて、領巾を脱いで打振つたのは、ハンカチ以上情熱が籠つて居つたに違ない、而かもハンカチ振を新らしいことの様に無性に喜ぶで居る人達には、そのことの古い因縁ものであることを承知して置いて貰ふのも無駄事ではあるまい、その領巾振山は唐津の町の直ぐ傍にある小高い丘陵である。此邊には峰の平べつたな屋根形の山が多いが、我領巾振山も矢張其の一つである、あの頂上であちらに走り、こちらにころげ、領巾振りながら、帆影の隠れる迄別離の涙にくれたのかと思ふと、停車場

あたりで、ピーを合圖に金切聲で暫しハンカチを振るのよりは、勿論眞剣であり、且情味が深かつたことゝ信ずる。

唐津から三四里の所に呼子と云ふ町がある。其の直ぐ向ふに加部島又の名姫島と云ふのがある。其處は國幣中社田島神社の鎮座します所である、其の境内に佐用姫神社と云ふ末社がある、前に書いた松浦佐用姫を祀つたものであるそこに望夫石と云ふて、佐用姫が夫を念ふて石になつたと云はれる其の石が社殿の下に安置せられてある、拜觀料十錢は、ちと當代の國幣社として如何であらうかと思はれるが、兎も角拜觀の榮を得た佐用姫がうつぶし姿で石になつた形であるとのことであるが、見た所中々大きい、殊に腰の部分が目立つて見える、これから見れば、佐用姫様は中々の大女であつたに違ない、望夫石と云ふのは名前其物から既に支那の故事にあること、之に佐用姫を附會したものであると云ふ人もあり、佐用姫が石になつたと云ふのは全くの俗説で夫の跡を慕ふて、石に靠つて別を惜むたので、望夫石は其の石であると云ふ人もある。何れにしても貞女の鑑、領巾振山の故事と、歌淨瑠璃にも残されて居るのは如何にも詩的で、懐古の情に堪へぬがちと石の大き過ぎて、興醒め氣味

に感ぜられるのは口惜しい。
田島神社の境内には今一つ見るべきものがある、それは太閤祈願石と云ふ巖石である、太閤棟の朝鮮入について、同社の神主が一七日の間、社殿の後にある件の巖に祈願を籠めたが、靈驗の見るべきものがないので、太閤自ら此の地にお出になり、其の巖の前に祈願し、さて此の度の軍其の功あるべくば、此の巖二つに割るべしと念じて、槍の石突で巖を突かれた所見事二つに割れたと云ふのが其因縁である、大きさは疊四五疊敷もあらう、前から見ると成程二つに割れて居るが、後の半分は割れて居らぬ、太閤のあの壯舉が中道で挫折したのも成程と首肯される、而かも前の方は半島の南部に似て後が北の方に似て居るのも不思議である、太閤様も、少ししつかり突かれたらよかつたものと思はざるを得ぬ。

文祿の役の大本營として名護屋城趾は、呼子の町から近い加部島から十數町の對岸に當つて居る、假の構とは云へ、流石は海外征服の雄圖の策源地丈に、又太閤のあの威光で造つただけに、規模は相當に大きい、今名護屋村で城趾として保存して居る部分丈でも五六萬坪はあるさうで、本丸二九三九と相當に廣大なものである、而かも見渡す限りの今の田畑丘陵、何れも當時の諸大名の陣屋であつたと云ふから、夫れ／＼家の紋所打つた幔幕やら旗幟など立て、いざと云ふ場合に備へて居つた光景は想像するだに雄々しい感がある殊に天主臺の跡と云はれる所に登つて見ると、豊岐の島は目の下に見える。對馬もちと薄くはあるが波の彼方にあり／＼と其の姿を認

めることが出来る、釜山へはこの邊からが最近距離であるさうで、呼子と釜山の間は山つと遠い。

◆法曹痛快録

りながら、朝影の隠れた送別館の
涙にくれたのかと思ふと、停車場

ちと石の大き過ぎて、興醒め氣味

波の彼方にありくと其の姿を認

めることが出来る、釜山へは此の
邊からが最近距離であるさうで、
呼子には今現に釜山からの海底電
信が通じて居る、向ふに見えるが
青岐の島、其の向ふは直に對馬、
それから朝鮮は又手の届く所にあ
る、何の事かあらんと、三軍を叱
咤した英雄の面影がまじ／＼と眼
の前に浮むで来る、小西勢が釜山
に着いた、加藤の先手が何處其處
を陥れたと云ふ注進を聞きつつ、
此處で美人を集めて祝杯を舉げた
のであらうと思ふと、云ひ知れぬ
感慨が湧いて来る、殊に盛夏鐵を
溶かす暑さの折も、此處には不斷

の涼風が、當時其の儘の松の梢を
渡つて来るので、海の彼方に對す
る特殊の追憶と共に、立去り難う
覺える。
唐津は勿論古い港である、今は
港も小さいし、其の點からは大し
たこともないが、矢張地方の都
邑である、福岡からは北九州鐵道
で二時間で行ける、一日の行樂、
古い感傷的な美人の跡を弔ふたり
不世出の英雄を偲むだりするに十
分である、今俗中の大俗商賣の我
輩には、此の所暫し命の洗濯と云
ふものである。
(一五、九、二日稿)

石川六段の事

將棋八段 土居市太郎

故六段石川友次郎氏は京都の人で多くの門人より
貰ひ受ける指南料は其都度直に酒に換へて飲んで仕
舞ふといふ評判の豪の者であつた、併し又棋道にか
けても頗る強手で研究も極めて緻密で漫遊中杯は常
に名家の棋譜を懐中して毎朝其研究を怠らなかつた
といふ熱心家である、現に關根名人の如きは石川の
お蔭で強くなつたと自ら言つて居る。

或日或旅宿で先生例に依つて名家の棋譜をさし試
みて居た時の事である、最初から敵の持駒も味方の
持駒も一つに握り込んで次第に指し進むに連れて持
駒の數も追々増して來ても先生一向平氣でずん／＼
指して行く、先程から傍に見て居た連中が變な顔を
して居たが其中の一人が不圖「先生々々、敵の持駒
と味方の持駒とをゴツチャになすつては指し悪い事
はありませんか」と尋ねた、夫も其筈傍で見て居る
人達は其持駒の差別が付かなく無つて來たので有る
處で石川先生の返事が頗る振つてゐる。

何、貴公達は敵と味方の持駒に區別が付かないで
指し悪いと言はれるのか、フーン何時でも敵は何
駒を持つて居るか見たり聴いたりする様では將棋は指
せて居らぬ、此駒を渡せば斯くなる、斯く戦へば幾
つ歩を敵に渡さねばならぬ、渡せば其駒によりて斯
く指さるゝなど考へて指すからには常に敵の持駒は
知れてゐる……。

法曹痛快録

平田久雄

○ 平壤の辯護士森岡二三君は、信
仰の人であり、正義の人であり、
同時に清貧自ら安んずる人である

○ 大學を出て、平壤に開業して、
茲に十餘年。いつも蓬頭粗服、街
頭に立つて、社會的正義を提唱し
てゐる。その貧乏さ加減に至つて
は、最もヒドク商人は品物と持込
む前に、森岡さんと聞くと、もう
目をつぶつて、社會奉仕だときき
らめてゐる——吠えてゐる——事
ほど左様に、一貧骨に徹したもの
だ。

○ ところが、天は決してこの正義
の士を捨てない。星霜流轉、十有
餘年にして、二萬圓といふ巨金が
ころりと森岡氏の懐へころび込ん
だ。尊敬すべきは、この以後の森
岡君だ。

○ 大抵、小金が出来ると、ヘンに
吝になるものだが、氏は少しもそ
の臭味がない。天の我れに與ふる
もの、これを費消せざればアタイ
がない——斯うして舊債などは、
ドン／＼片づける。

○ 愉快なのは、諸方の料亭だ。こ
れまでの請求書を出せといはるゝ
が、元來森岡さんからお金を貰へ
るものとは思はず、テンから詔け
込んでゐないので、請求書の書き
方がない。で、右の理由を話すと
「ぢやこの邊でドウだらう！」先
生百圓札を鷲つかみにして、目の
前へバラリ。

李王宮秘史を讀む

長谷川義雄

〔167〕

ぬが、維新の當時、勝安房が世界の大勢と大政奉還の已むを得ざる状態とを達観し、時の官軍西郷隆盛と靈犀一點相通し、一兵を動かさず江戸城を明渡し、徳川一門を兵革の間より救ひ、長に家運を安泰ならしめたのは、全く勝、大西郷諸豪の力で、日韓併合の大役者を此れと比較せば、伊藤幸内は當時の大西郷であり、李完用、宋秉喆は當時の勝安房で、今日李王家が政治圏外に超越し、徳壽、昌徳兩宮風隠かに、李花永に平和と光榮に輝くのは、恰かも明治維新の大業により、徳川家が、大政を奉還し萬代の安きに居ると酷似して居るのも亦た對照頗る妙である。

六

明治大帝の偉大なる御人格は、私共の常に感佩し奉る所であるが日韓併合に際し、我國の李王家に對する御優遇は體かに善き模範を世界に示めされたものと思つて居る。支那の革命に際し、宣統帝が今尚ほ悠々閑日月を浴するものは全く我日本が斯くの如き善き實例を示めしたからである。露國第一次の革命に際し、ケレンスキーが軍律以外、死刑廢止を斷行したのも、ケレンスキーの胸底、深く慮る所があつた爲である。ニコラス皇帝は偶々亂民の爲に殺戮せられたが、此れは露國爲政者の意ではなかつた。泰西の歴史を見ると、革命の際、君主にして身を履し、或ひは讓位後、一家没落の悲境に沈淪せらるゝ例は、其の數に乏しからぬが、東洋近世史上未だ曾つて斯くの如き悲劇を見ざるは全く明治大帝御偉徳の餘澤である。

七

就中日韓併合は、世界歴史上最も驚歎すべき大事件で、明治大帝の高遠なる理想と李王殿下の明察英斷により此歴史は生れ得たのである。明治維新の大業と日韓併合とは比喩聊か倫を失するかも知れ

著者は十五年の久しき李王家に仕へ、時には命を含みて時の皇帝皇後の侍従となり側近に奉侍した事があるから、大奥の秘事、政局變轉の樞機に參與し、宮廷秘史の著者としては、最も適任者である殊に氏は新聞記者出身にして、最も文筆に堪能であるから、本篇の記述は、著者に取つて全く誦へ向きの掘壇場である。

四

従つて遠くは統監政治の創始、宮中制度の革新、王世子の東京御遊學、伊藤公の凶變、南西巡幸等の史上に特筆せらるべき問題より近くは世界列國を驚倒せしめた日韓の併合、李王家として我國家及皇室に對し大謗名分を明にせられた、天機奉伺、又明治天皇の御遺旨たる皇室と王家の御成婚、獨立騒擾の渦中に行はれた徳壽宮の國葬等、一々掌を指すが如く、裏面側面の情勢は、著者の豊麗なる筆を通じて、歴々紙上に活躍して居る。

五

就中日韓併合は、世界歴史上最も驚歎すべき大事件で、明治大帝の高遠なる理想と李王殿下の明察英斷により此歴史は生れ得たのである。明治維新の大業と日韓併合とは比喩聊か倫を失するかも知れ

正史の必要なることは、言ふ迄もないが、裏面の複雑した事情を併せ解するに非ざれば表裏共に正鵠を得たなき觀察を下すことは出来ない、況んや宮廷裏深くして容易に他の窺知を許さざる、秘密の領域に於てをやだ。正史は地圖のようなものであり、側面史は寫眞そのものである。制度、文物、法律、政治、総べて表面に現れたものは、正史によつて知る事が出来るが、此れが實際の働きは、寫眞に待たねばならぬ。故に歴史は多くの場合に於て、乾燥無味であり、側面史は、津々たる趣味に富んで居る、史馬遷の達筆を以つてしても、史記は矢張り史記である到底、活動寫眞のような變化に富んだ面白味はない。

三

著者自ら此書に序し、私は運命の悪戯に弄ばれ果つて月台四十一

來るものではない、日韓併合の大

動寫眞のように有りの儘に、細大

著者自ら此書に序し、私は運命の悪戯に弄ばれ誤つて明治四十一年十一月から大正九年の十月迄十五年の働き盛りを忘れ、一身の榮達、功名野心を抛ち、衣冠の人となつた事を歎じて居たが、予をして言はむれば予は寧ろ著者が衣冠の人となつた事を喜ばねばならぬと思ふ、古谷久綱君にして伊藤公の秘書官でなかつたならば、或は藤公餘影の快著は生れ出て居らないかも知れぬ。エドワード、ハミルトンにしてグ翁の秘書官でなかつたならばグ翁の面目を隠したらしめたグ翁回顧録も出でなかつたかも知れぬ。著者が偶韓國未曾有の變局に際し、衣冠の人として變轉多きステージに起ち、自ら其役を務めたことは、それが直ちに日本の爲であり、又朝鮮の爲めであつたのである。何事も一人出

来るものではない、日韓併合の大偉業も、多くの人々が礎石となつて、歴史を築き上げたものだ、而して著者はその最も多きページを負担した一人である事を思へば著者は恐らく此れによつて満足するであろう。殊に著者が新聞記者の出身であり、文筆に長じた人である關係上、何人も謎の鍵を開く能はざる宮廷の秘事を直截に露骨に隠す所なく、飾る所なく、著者一流の麗筆により有りの儘に、世間に發表したことは、朝鮮近世史上、最も有益の記述であることを斷言して憚らぬのである。

八

私は嘗つて彼の奈翁回顧録を讀んだことがある、奈翁の偉業は、何人も正史によつて知る處であるが、回顧録は奈翁身邊の雜記を活動寫眞のように有りの儘に、細大洩らさず面白く記述して居る、著者ブリアンヌは幼年學校時代奈翁と同窓の友で奈翁が戦線に起つた時から皇帝に即位の得意な花々しい時代に至る迄、氏は秘書官として奈翁に追隨した人であるから、奈翁の面目、貌姿、悉く本書によつて精彩を加へて居る、従つて權威ある歴史家と雖ども此書を読むに非ざれば奈翁一代の歴史を語る能はずと逸言はれて居る程に有力視せられて居る、私は此の意味に於て李王宮秘史が、如何に有益であり、歴史上重要な書であるかを裏書したい。

九

私は著者と同窓であり、共に新聞記者である、唯だ學校に於ても年齢に於ても私は著者より一日の長であつたが著者は中央の文壇に活躍し、私は偏陬の地方に筆を執り、常に著者の後塵を拜して居る此の程、本書一冊に懇篤なる書面を添え批評を私に求められた、よつて讀後の感を叙して著者に贈り併せて此の快著良書を江湖に推奨したいと思ふ。

◆田園藝術話

平田久雄

この夏、守屋三葉氏が、部下の若い人達と、温陽へ入湯と出かける時、土地の知人が「イヤ、是は珍らしい」とあつて、近郷近在から例の田園美人を騙り集め、弾くわ唄ふわ、踊るわ跳ねるわ、藝術の極致を發揮したのは良いが、丁度隣室に泊り合せた鐵道の林原憲貞氏「イヤ、これはたまらん」

金剛山

雄盛山市 油醬田野

上八潭にて
 みそ秋の咲きつづきたる山みちに朽葉のほひしみるなるかも深霧につつまれながら岩かげにさかし出したる松葉百合かも
 や、雲のうすらぎくれば八つの潭ほのかなれどもみえて來にけりうつすらとさ霧のなかに八潭の流れましろくうかびたるみゆ
 絶壁の岩にみよせ深谷をみればはるかに溪川のあとばかりなり足もとの雲は次第にうすらぎそむる
 溪川のあとばかりなり足もとの雲は谷川は音たてやます幾とせをここに流れて潭をなしつつ
 岩がねを木の根をふみてのぼりゆくここしき山に咲くみそ秋の花
 九龍淵にて
 山の露ひそかにおりていつのまにか瀧のしぶきをけしにけるかもあをあをとたへてふかき龍壺に岩のせまりてうろをなしつつ
 そそりたつ巖はしりて龍壺のますめる水に深く入りたる
 飛鳳瀑にて
 すべりおつる水はくだけて霧となりながれてまたもあつまりにけりおちてくる水はせかれてまさなる潭をなしつつたたへけるかも

ある。明治維新の大業と日韓併合とは比喩聊か倫を失するかも知れ

姫と騎士

伊藤 憲 郎

【一六】

姫は一人、騎士は二人——争は避け得られぬ、昔も今も同じことである。

甲の紳士は女將を説いて丙なる藝妓を得んとした、乙なる紳士、これもその仲居を通して同じ丙なる藝妓を而かも同じ夜に覗つた蛇の道はへびである、斯道の達人はお互ひに腹を讀み合つた、そうしてお互ひに紳士道を守らう、……串劣な先驅けは止めやうと、玆に一つの決定方法を定めた、負けたものは深く譲つて女を相手に與へやう、彼等は握手して勝負に就いた。

豪奢な料亭の奥深く一室に籠つた甲乙の紳士、惚れた女を得やうと渾身の勇を振り脳漿の限りを盡くして妙技を闘はず、何れも負けは大變である——戦は終に來らんとする、甲の紳士は景況甚だ有利である。

にこ／＼しながら這入つて來たは當の藝妓——彼女は女將からも仲居からも今日の話を勿論聞いて居ぬ。自分を中心の大勝負であるとは知らぬ、座敷の嬉しさに唯にこ／＼這入つて來て二人の間に坐つた。

二人の客は夢中である、藝者はどえらいこと！と懸つてみると甲なる客フイと頭を擧げて叫んだ。オイー今晚おれがお前を抱くことにするぞ。

なんです！それは！。
まあいゝ、ヒヒ見てろ！。
エ？藝者だつて貞操がありますよ、失禮な！。

名妓はキリツとなつて側の欄徳利を甲なる客の頭の上に擧げた。

折悪しかつた、水に濡れてた爛徳利は手を滑つてほんどうに勢込んで甲なる客の額を叩き付けた。大變である。さつと切れて血が出た……紳士は玆に隠やかならぬ

藝者の冗談とゆるして置けぬ、勝負どころではない——丙なる藝者も眞直ぐに詫言に出ればよかつたが初めの勢にへたく／＼と引こみもならぬ、争は甲と丙とに轉換したが、例の乙なる客は藝者の肩を持つた、勝負の雲行悪かつた彼である——君がケツタイなことをこの妓に云ふからへうたんから駒が出たのさ、藝者に行つたら惚らうと妙に出た。

傷を受けて而かも乙丙間に同盟が出來さうである、甲は怒髪天をつん裂かう有様、女將や仲居の止めるのを聴かず附近の交番所に飛込んだ。

見れば立派な紳士である、巡査は皆迄訊ねず本署に報告した、甲はこの町で有名な男、警察も敬意を拂つて事件を、検事局に廻した——普通ならば警察で始末を付ける小事件であるが。

検事は關係者を呼んで詳細に調

べ出した。甲は心中あゝ下手をやつたと噂を囁んだ、彼は傷害事件の告訴を取下げたが検事は調を中止せぬ、丙なる藝者は全く私の過ちからですと詫びたが、只それだけで事件は済まされなかつた。

その夜の勝負は、甲と乙との二人の紳士は丙なる藝妓を賭けたのであつた、——はちばちは賭博である、いくら惚れた女でも一時の娛樂物であるからと一蹴する譯には參らない——藝者の傷害沙汰はかくて紳士賭博となつて公判に廻はされることゝなつた。

甲乙二人の被告人は何年何月何日市丙某料亭一室に於て藝者賭けにて花札を使用し俗にはちばちと稱する賭博を爲したり……判決はこう言渡されて二人の騎士は天晴れ勇名を世間に論はれた。

一人の姫は初めてその夜の甲なる騎士の怪言の眞意を知ることが出來たのであつた。

富士山より

麻生 晋 波

八月二十日午前四時、北口五合目の宿を出發の時、眼界一面雲の海を現はし、光景雄大なり。

雲の海これが棉なら金もうけ

○ 富士山頂上にて

來て見れば富士より高き我身哉
來て見れば大富士の山

○ 今夜御殿場に降り、明朝東京着
委細フミ。

○ 富士山は來てはいけない、見ることがよい。富士須走口、米山館方に於て(廿一日、以上電報)

の即席料理迄、何の手落ちもなく一日を愉快に過ごさせて呉れるの

東京と云ふ處

東京 堀 一 知 郎

△ 私の知人老夫婦が、朝鮮から東京に移つて來、一週間ばかり私の家を足場にして居たが、纏て淺草方面で二階借をして暮らし初めた

『東京は暮し可い處ですね』と或日來訪して、愉快氣に話し出すのであつたが。

『何しろ、刺身一人前、切身一片でも買はれるのだし、公設食堂に通ふとなれば、朝が十錢、晝と夜が十五錢宛で、結構甘く食べられますからねえ』と補足するのであつた。

△ と、別の朝鮮からの一友が、重い社用を帯びて上京し來つたのがあつたが、是は又反對に事毎に反感を抱いたらしく。

『おいッ、東京はイヤな處になつたねえ、昨晩は歌舞伎座に招待を受けたが、男三分、女七分の見物は可いとして、其等の女が云ひ合はせたように、金紗縮緬や、裳襦袢や、乃至紋付羽織と云ふんだから、驚かざるを得ないぢやないか。東京に居ると女房に恠厭つき、あいをさせなければならぬかと思ふと、亭主野郎が氣の毒だよ』

と盛にアンチトウキヤウ熱を吐いたが、更に二三日すると又飛んで來て、

『君ンとこで、麥飯のご馳走に

なるに眼るよ。實は、昨日少し屋に飛び込むで十個食べて、いざ會計となると、君どうだらう

『二圓頂きます』と云ふぢやないか。君ッ、二圓とすれば一ツが二十錢ぢやないか、べら棒な話だよ』

とフン慨よろしくあり、揚句には

『僕は一日も早く切上げて歸るよ』

△ 別に、在京の一友があるが、是は朝鮮時代の先輩で、今は閑雲野鶴の身の上である。

『東京だねえ、何と云つても。僕等のやうな無産浪人が、家賃の八十圓も出して、どうにか暮して行けると云ふのは、全く東京だからだよ』

と云ひながら、金口を摘み出して一吹き吹きながら、

『つまり抱擁力があるとでも云ふのだらうが、是で景氣でも可くなる日には、一躍して成金に成らぬとも云へないよ』

とからりと笑ふのであつた。

△ 西崎樂堂氏の上京中、随伴して清遊を試みたものゝ中、玉川と相模川の鮎狩があつた。前者は網獵で、後者は鵜飼であつたが、命令一下、茶屋が急速に一切の手配をして呉れ、舟中の飲み物から獲物の

の即席料理迄、何の手落ちもなく一日を愉快に過ごさせて呉れるのであつた。

『東京は矢張り便利だねえ』

歸來樂堂氏は無條件で感嘆するのであつたが、私は其不廉なのに竊に膽を冷やして居た。

△ 木挽町の觀劇料は座席だと通例十二圓だが、五階位から俯觀すると五十錢である。其間十一圓五十錢の相違が有るが、尙仔細に別けると貳圓から十圓迄に刻まれる。乃ち同一演劇を同時に觀るのに、此大きな開きがある。此大きな開きこそ蓋し『東京』なるものであつて、東京を地獄と見、極樂と觀ずる者がある所以であらう。(八月十四日稿)

續小男物語

吉田 莊 一

◎小男のことを書いたら、或る人から東拓の饒田技師、遞信局の堂本さんといつたやうな錚々組を脱失してゐると、キツイ御注意をうけた。

◎何んでも、饒田氏の總督府で使つてゐた椅子は、別製小型で、氏が東拓に去ると、そのあとを用ひ手がない。そこで口の悪いのが『オイ、この椅子が可哀さうぢやないか、なんで椅子もろ共東拓にかたづけなかつたのか?』で、大笑ひ。

◎ところが、世の中は案じたものではない。同じ課の石塚、飯島といふ、是れも短小組が、口ではケナシ／＼、その實大に欲しがつて暗に給仕をそゝのかし、目下盛に争奪の競争中とは、何とうれしいではないか。

スタンドから歸つて

津 田 常 男

炎天下に顔を曝すスタンドへ皆勤して、頭へ残つた感想の一つ、それは審判の問題である。

名前を忘れたが、可なり有名な話であるから、知つて居らるる人も多からうと思ふ。ある歴史家が遠くに喧嘩か何かが起つて居るのを、窓越しに見て居たさうである間もなく一友人が訪問して来て、その友人も今見た同じ出来事を話した。それによると、彼が現に目撃したとは大分相違して居るのでその歴史家は、現在、しかも眼の前に起つた出来事に對してすら、人によつてこれ程觀察を異にするのであるから、過去の出来事に對する歴史などといふ者が、如何に事實と相違ることの遠いものであるかを想うて、長大息したさうである。起つた現象は、唯一つである。しかも、人によつて二様、三様の觀察が下されて居るといふことが、偶々野球のやうなものに於ても生じるといふことは不合理である。しかし、この不合理は人世に於て避け難い不合理かも知れない。

野球、總じてスポーツに審判官が存在しなければならぬことは、氣懸りなことである。出来ることならば、審判官の代りに正確な機械でもあつて——尤も我々のやうに比較的この機械或は計器のやうなものを取扱つて居るものにとつ

ては、これ等も決して誤差といふやうなものを免れないものであり、その背後には矢張り人間の看視といふことが必要であることを経験して居る。——否應を言はさぬ表示をしてくれたらと思ふのである

が、實は審判官の存在といふことも、スポーツそのものの内容を構成して居る一つの重大な要素であるかと考へなければならぬのである勝れた物理學者であり、哲學者であつたボアンカレはスポーツを極端に嫌つたさうであるが、之は人間が、チャンスといふやうなものに生活の力點を置くことは、決して眞實の生活をなす所以でないと考へたからであるかも知れない、それは兎に角、實力、技量に大きな懸隔がある場合には、審判の正確も、起り得る餘地が少いであらうし、偶々起つたにしても、問題が紛糾するには、餘りに餘裕があり過ぎるであらう。けれども、精密な實驗をするには、精密な測定器を要するやうに、實に問髪を容れない所に、生死の境、勝敗の分岐點を有するやうな職法の行はるる試合に於ては、審判官も又明徹鏡の如き利器の所有者でなければならぬのは明である。名審判の期待に心血が凝固するのは、このときである。

審判は神の聲である。審判は神聖なりである。審判の前に従順な

【一八】

るは、スポーツマンシップの最たることである。けれども、それは泣く子と地頭に勝たれないといふのと、同種であつてよいのではない、審判官そのものについていへば、審判官としての權威ある内容を具備して居て欲しいことは、いふまでもないのである。野球技が進歩する如く、審判術も亦進歩しなければならぬ。この兩者は、決して獨立に存在すべきものではなく、正に不可分の關係にあるべきものである。今日の野球の進歩は、この兩者のデリケートな關係にまで分化して居ると言はれる。

トルストイは、人が人を裁くことは出来ないといつたさうであるが、野球の難局に於ける審判官の立場に於ても亦この感なき能はない。神ならぬ審判官の眼が、如何なる拍子に思はぬ曇りに遮られぬとは、誰が保證し得やう。私は何よりもこの冒險に身を挺して居る審判官の土に同情を禁じ得ないものである。そして、試合中その心眼が透徹して居ることを祈つて已まない、名實共に斷乎として自信ある態度には敬服し、窮地を糊塗する繕はれたる威嚴と、肩の邊まで漂ふ周章と苦悶の影とに、人間の悲喜劇を痛感するのである。

審判官が、機械的最高精長と道義心とを保つて居るのに、尙且つ偶の誤審があるとしても、我々は何として之を非難し得やう。けれども、一瞬の迷が起つたとき、その頭を掠める稲妻、その心理に浮ぶ芽、それはどんなものであらうか。それを付度するフアンの心にも邪心があつてはならない。審判官の自重はいはずもなである。スポーツとは、この間の機微までも支配する力を有すべきものである

るやうにも思ふ。又ないやうにも思ふ。スポーツ興二の分皮點でも

に比較的この機械或は計器のやうなものを取扱つて居るものにとつ

審判は神の隣である。審判は神聖なりである。審判の前に従順な

スポーツとは、この間の機械まで支配する力を有すべきものである

蠅酒

下村海南

語を半分にしても世界大戦以前權威赫々飛ぶ鳥を落した獨乙の維廉大帝に謁見の時、丹念に鼻糞の丸薬を製造して揚句のはてに陛下に向け、爪先でカツ飛ばしたといふ、噂を残した明石柏蔭將軍。

楊枝齒磨もロク／＼使はない將軍は鼻の穴に指を入れるのが御箱なら、鼻糞丸薬の製造も御手のものである。水漬を垂らした時は、傾手でコスリ上げる。手先の遣場を見て居ると、其儘ズボンのポケットに入れて、中でなすり付ける位はお茶の子さい／＼である。

眼さへ明いて居れば煙草を手にして居る、モノの二時間も立てば、見る／＼卓上の上も下も軍服も、そこらあたりは吸殻だらけになつて仕舞ふ。

巻煙草を吸ひつくすと、順々に新しい一本に火をうつしてゆく、時によると新規にマッチから火をうつす時もある南國の總督官邸には、四時天井の上では大きな電氣扇が、ギリ／＼音を立て、舞ふて居る。其の眞下に腰をかけて居る總督は、マッチを捲つて巻煙草に火をつけやうとすると火が消える。又捲る又消える、椅子を離れて風下を避けたら樂々と火がつくのだが、中々御興をあげやうとはしない。二本三本四本五本と、マッチの軸木を束にして捲つては消え、捲つては消え、巻煙草一本にマッチ箱一つを空にすることがある。つまり此空につぶして居る時間が節煙となつてゐる理合だから、皆宜い擔梅だと黙つて見て居る、尤も下手に口を出すと大カスと喚ぶ。

『總督と秋山大將が陸軍でかまはず屋の汚い兩大關だといひますかソウです』

『俺を秋山と一所にするとは飛んでもない事だ』

『總督の方が矢張り役者が一枚上です』

『馬鹿な秋山が上さ……アレハナ衛生の觀念がない、麥酒のコップに蠅の死骸があるだらう、秋山の奴グット飲み干して、あとから死骸をへっ／＼と口から吐き出すのだからな』

『ソレで總督は？』

『俺か、俺はコップの片側へ蠅を吹きつけて置いて飲む口へ入れるやうな馬鹿はしない！』

るやうにも思ふ。又ないやうにも思ふ。スポーツ興亡の分岐點であらう。思ひ巡らすならば、それはスポーツのみに限つた問題でないかも知れない。

以上が私の貧乏な感想である。私は觀る技術に於ても、又知識に於ても甚だ至らない單なるファンである。従つて、現實の批判を加ふべき資格も、材料も持たないものである。唯一言を許さるゝならば、京城に於けるファンの向上と審判の向上とは、その野球發達に寄與する重要事であるといふことには、大方諸君も共に同感を賜はることであらう思ふ。

◆おもひ出草

平田久雄

○大阪朝日の下村海南博士からその近著『思ひ出草』一巻を贈られた。

○この頁に登載してある『蠅酒』は、實はその思ひ出草の巻頭の一章を拜借に及んだもの。本著紹介の見本として、讀者に玩味して貰ひたいと思ふ。

○流石に、下村博士である。五十の生涯に、足跡地球の全表面に及び、その遭遇する人物、歐洲の諸帝王より列國の重臣、權相、學者、民間人物に及び、悉くそれが海南一流のレンズに、手速く、見事に、うつし取られてゐる。全卷二百三十ページ、讀み出したら到底中止する譯に行かぬ。面白いこと、實に近來無比の好著である。○博士の嚴君下村房次郎翁、夙に日露通商の急を主唱す、述懐に我はいざ聲をかぎりに山彦の答へするまで呼ばむと思ふ博士の詞藻豊富なのは、おのづから來る處があるのである。

公天隨筆

寺尾猛三郎

縦囚論

唐の太宗、死刑囚三百人を縦ちて家に歸らしめ。諭すに期日再び來つて戮に就くべきを以てす。期に至れば悉く還り來り終に一人の逃亡する者無し。太宗之を嘉みし即ち之を赦す。蓋し恩德を施すことの深くして、極惡大罪の小人も一朝にして、死を視ること歸するが如き君子となりたるもの乎。非乎。六一居士縦囚論を作つて曰く。情に逆ひて譽を干め。上は下の情を賊し、下は上の心を賊す。上下交も相賊して此名を成すを見る。是れ天下の常法と爲すべけん哉と。眞に千古の正論と云ふべし。今の世六一居士亡し。居士を九泉の下に起し問はんと欲すること多し。さるにても仕合せなるは太宗なる我。彼等囚徒は詐りにもせよ悔悟らしく振舞ひたればなり。咄

義士優遇

大石良雄等一味の義舉は、壯烈無比神人俱に感泣するところ。所謂正氣の煥發せるものにして、人間の精華永く櫻花と其芳を争ふものと云ふべし。宜なる哉。その囚はれて細川越州侯の邸にあるや、侯の之れを待つや國土の禮を以てし感慙たらざるなき傳へて以て一世の美談となす。後の侯たる者或は誤つて西施の鑿に做ひ。亂臣賊子、盜兒姦婦を優遇したりとせよ。世論の批難、史家の筆誅。期して待つべきのみ。越州侯は流石に明ありたりと云ふべし。

言難篇

韓非子の說難篇は不朽の作なり。誰れか言難篇を著はして名聲を競ふものぞ。想ふに言語の難きは、言ふことの難きにあらず、解釋の難きにあり。西諺に曰く町重とは事を延ばすの謂ひに非ずと。解き得て痛快なりと云ふべし。或は白馬は馬にあらず堅石は石にあらずと解する説客を出たし。或は鷲を鴉と云ひ瞞るむる辯士を生ず。此に於て群疑百出正邪紛々として判ち難し。例へば大逆無道の極惡囚あり。法を執るもの曰く、重大なる犯罪人なる故大切に取扱ふと。或は可ならむ、否大いに可はり。要は唯大切なる語句の解釋如何にあり。監視を厳にし警戒を密にし、苟も乘すべき間を與へず、以て國法の威を嚴ならしむ。これ解釋の一なり。待つに優遇を以てし尤すに放縱を以てす。法廷に淫婦を抱擁せしめ、妄りに秘録を外間に泄らさしむ。而して大切に取扱つたりと揚言す。これ解釋の二なり。我等其の適從するところを知らず。速かに言難の名篇出つるを俟つ。

鈴虫を聞きて

平 山 正

◇
我が雷昌洞の住居は、此頃毎夜鈴虫の聲に埋もれて居る。垣根の下、首楯の中、何處とも云はず鳴いて居る。昔和歌を學んだ時『今宵われ書讀みてあらん下り立たば音をよといめむ庭の鈴虫』と詠んだら先師原宏平翁は聲たてずして讀み玉へと書いて其儘返された。實は『誰か来た様だ垣根の外へ、庭の鈴虫音をとめた』といふ俗歌から思付いたのであつた。烏鬼匆々二十餘年今日滿庭の鈴虫を聞きながら讀書して感慨に堪えない。然し此可憐な鈴虫も何者かの手にかゝつて本町へ持出されると一疋二十五錢として取扱はれるのである。眞に面白い世の中と云ふべきだ。鈴虫と云へば必ず松虫を連想する。是は枕草紙に虫は松虫鈴虫とあるからであらう。可笑しなことは松虫鈴虫の名稱は昔と今とで反對になつて居ることである。試に辭書を見たら松虫といふ所に鈴虫の古名とあり。鈴虫には古の松虫とある。何時の頃から反對になつたものか。此二つの虫は大分違つて居る。松虫は機織がたであり。鈴虫は西爪の種子に手足を附けた様である。松虫はチンチロリンと鳴き、鈴虫はリンリンと鳴く。昔の歌人は科學的頭腦がないから、漠然と自分の都合次第で人を待つ様なことに引掛けては松

虫を使ひ。振る、古り杯云ふときは鈴虫を使ひ。實物にはトント御構なしに勝手に混同した結果、自然多數決で今日の様になつたのであらう。然し歌人には實際鈴虫の方が歡迎される筈である。其聲が如何にも沈鬱で何となく物の哀れを惹くに適する。松虫は陽氣で場合よると滑稽に聞ゆる。『風寒みなくまつ松虫の涙こそ草葉色とる露とおくらめ』『君しのぶ草にやつるる故郷は松虫の音を悲しかりける』杯はリン、リンとやらねば面白くない。総じて古歌には今の鈴虫を詠んだのが多い様である。薩摩の新納武藏守が秀吉に謁見して盃を載いた時、武藏守の口髭があまり見事であつたから細川幽齋が見とれて覺えず『口のあたりに松虫ぞ鳴く』とやつたら、武藏守は文武二道の達人であつたから聲に應じて『上髭をチンチロリンとひねり上げ』と答へたといふ話があるから、其頃は既に松虫がチンチロリンと爲つて居る様である。要する二つの名稱は永い間混同せられて居たのである。

◇
凡て是等の虫類の鳴くのは口や咽喉には關係なく翅を摩擦する音であるが、自分等は小供の時そんな事は知らないから、籠に入れて餌をやる時、茄子に少々砂糖をかけてやると聲がよくになると云つて居た。つまり鈴虫を義太夫詰りに準して居たので、今から考へて可笑しくなる。尤も古歌に『泣く虫の涙』など云つて居るのも矢張り自分等と五十歩百歩であらう。更に自分が虫に就て甚だ滑稽な記憶がある。是は鈴虫ではなくきり／＼すのことであつたが、一體是等の虫は鳴くのは皆雌で、雌は全く鳴かない。而して其見分けは極めて容易である。乃ち雌は尻に長い劍の様なものがある、是は産卵器で之を土中に刺込んで卵を産むのであるが、小供は劍のあるのは鳴かぬから取らなかつた。其頃村に廻つて來る鈴屋が小供の持つて居るきり／＼すと鈴とを交換した鈴屋は多分市へ持つて行つて今本町で鈴虫を高く賣る様に賣つたのであつたらう。或時仲間の悪太郎が手下に命じてきり／＼すの雌も雌も一切かまはず捕へさせて、雌の産卵器を鉄でチヨキン、チヨキンと切つて鈴屋にやつて鈴を澤山取つたことがあつた。當年の悪太郎は今日故人となつてしまつた。

◇
鈴虫の聲を聞きながら昔を懐ふと種々の感想が起つて來る。鈴虫は只妻喚ぶ一念に驅られて同じ様に鳴くのであらうが是も聞く人の考につれて色々に聞こえて來る。月影のさやかなる夜は嬉しくもはた可笑しくも虫のなぐらんと

◆佐世保より

伊藤 憲 郎

先日はお忙しいところを参上、お邪魔いたしました。明日長崎の方面へ出かけるつもりです、まだ大して面白いこともありませんが、旅の感興は嬉しいものです。

鳥城兄との邂逅

井上賢太郎

○ 八月十二日は雨揚句のキャン／＼照りつける暑い日であつた、併しカラツとして晴れ／＼した爽快の朝であつた、天安に歸へる私は京城驛のプラットホームに立つた

だ。私とは可成り古い友人である、一時は骨肉以上に信じ合つたものである、併し私とは方向が違ふのみならず永らく私は東京で生活して居つた關係上殆んど十年以上も音信さへ絶つて居つたのである、驛頭に於ける偶然的邂逅に兩人が感激したのは當然のことだ。

新聞記者に一流名妓の顔さへ交へてホームは溢れるやうな人波を打つて居る、其中に私はフト長幹瘦軀にして七三にいらした肩に細の羽織を引つ掛けた一壯漢を見出した、一別以來十年以上も經つて居るが流石に見られる筈はない今は永樂町人で知られて居るが當時の鳥城松本武正兄である、先方が気が付かないので私が背後から

○ 彼は私と同郷の岡山縣の産である。彼れは青年時代中國民報で田岡嶺雲先生に師事したものである、先生の歿後岡山を去つて九州西鮮、其他の操觚界で達識なる健筆を振つたものである、彼の著『漢京一年』『人生雜記』等を見るも其片鱗を窺ふことが出来る。

○ ボンと肩を打つと振り向き乍ら、ヤッ暫くじやつた(岡山の言葉)會いたかつた／＼と行きなり私の手を取つて固く握り締めた、そして性來感激的な彼れはもう兩眼に涙を浮べて居つた、私も久調を叙して二三の懷舊談を交へる内人心をせき立てる發車信號のベルがホームの隅々に響き渡つて來た、今迄動搖めいて居つた人波は急に緊張して來た、そして一齊に列車の方に眼を注ぐ、私も鳥城兄に名残りを惜みつゝ再會を約して八列車の客となつた。

○ 鳥城兄(鳥城とは岡山城の舊稱

○ 彼は一面趣味の人である、刀劍遊びと將棋とは玄人に近い、又一種譚味を帯べる彼の座談は人を魅するに充分だ、恰好の談敵を得れば夜を徹する事も辭せない、煙草は吸ふと云ふよりも寧ろ喰ふと云ふ方が當つて居る、彼の書齋は常に瀟々として吸殻は灰皿に山をなして居る、此の話を快漢に只だ一つ玉に瑕とでも云ふのは李白「斗詩百篇、長安市上酒家眠底の左」りが利かない一事である。但しこれは吾人上戸の言分であつて耶蘇や蔡酒會員に云はせれば神様に近いと云ふかも知れない、好漢自重加餐を祈る。

【三三】

◆駒田氏の事

平田久雄

○ 地質研究所の駒田技師が、四十そこ／＼で、永眠したのは、實にいたましい。

○ 思へば、篤學な、生一本な、熱誠な好箇の専門學徒であつたが。

○ 文藻の點では、燃料研究所の市村學士と並び、科學者に珍らしい詩趣横溢の文を草したものだ。

○ 氏の生一本に就ては、面白い逸話がある。娯樂は將棋一本槍で、部下のW君などとやると、元來氏が弱いので、忽ち悲境に立つ。すると頗る御機嫌が悪く、殊に必死の一手でもボンと下すと『ブムいよ／＼俺を殺す氣かな』……若いW君など、ふるえ上つたものだらうな。

○ 東萊や、海運臺の温泉は、もと／＼湯分を唯一の資料とするのでこの兩者を比較すると、どうしてもその稀薄な東萊より濃厚な海運臺が良いといふ事になる。駒田氏は、その専門が地下水——温泉なので、先年兩者を踏査したのち、明らかに所信を公表したので、東萊では散々冷遇迫害せられ、轉じて海運臺に行くこと、恩人ぢや、土地の氏神ぢや、感恩碑を建てねばならぬなど、下にもおかの優遇に『東萊で縮んだいのちがこゝで元の長さに還元する』

○ 駒田氏の書いたものは、骨張つた漢文調の美詞が多い。同氏と相並んで、うつくしい文藻の持主たる市村氏、善し感懐無量であらう

といふ觀察について重大な意義を

妻の置き手紙

池部 義雄

貴郎！

私は私独自の創見から貴郎との結婚を破壊する事に大なる勇氣を見出したる事を感謝いたします。ソレは貴郎に諸否を問ふ程鈍い決心でないだけそれだけ私を信じて下さい。貴郎！ナンと云つても既往は死灰であり、歴史は執着を強ゆる記録に外なりません。素より祖先の努力に對しては幾分の敬意を吝むものではありませんが其代はりヨリ以上の怨恨を訴ふるのではありません。ソレは人生の構成手段がアマリに男子の勝手であつたと云ふ事です。貴郎！ナゼ女子は人生の陪臣とならねばなりませんかなゼ婦人は副産的人間とならねばなりませんか。女子の参加を禁じたる歴史が、どふしてオール人生の記録と認められますか。私は此變態なる構成を打破し純理的に改善せしむる前提として結婚の破壊を第一次に選びます。私は家政者とか、母性愛とか戯曲的禮讚に甘んずる程自らを欺く者ではありません。貴郎！何が無理解な成立と言つても結婚程無理解なものはありません。貴郎何が愚化に浸潤すると云つても家庭の成立ほど人間を愚化するものはありません。すべて是等は人間を壓搾し固定化

せしめて人生の争闘を絶たんとする變態時代の詐略ではありませんか。私はかゝる小さき障壁の内であらしきなど云ふ侮辱にちかひ賞賛から脱れて、進んで人間らしく文化の主幹に直屬して、すべての建設を男子と争ひます。ソレは有史以來忍従せし以穢としても。

貴郎！破壊と建設が一線上に作用して、兩者の距離が文化の領域であります。今私は一つの破壊を宣した以上、順序として建設を代償せねばなりません、而して私はこれを試演の序幕といたしませふ。ソレはお互が眞面目に自分自身を見つめた後、赫々たる天日の前に立ち一つ一つの誓約をするといふ事です。而して其誓約の内容は、戀愛のみを限定して私は貴郎のものであり、貴郎は私のものであるといふ事です。貴郎！すべての階級を超越して平等に人生に機能して居るものは死と戀愛のみではありませんか。此二つのものは綱理上の原則として、私は無言の内に服従する者であります。而して貴郎との戀愛の道程に於いて若しも子女でも娩まれたならば、乳期を完了した後育兒院に送る事をお約束しませふ。ソレは單に便宜と利益からのみではありません、親子

といふ觀察について重大な意義を見出さぬからであります。俗に親子の情愛など云ふ事は傳統的義務の彩色されたもので、弱き人々に安價な慰安を與へると云ふ、平凡なる眞理の匙加減に外なりません子を對照にして親の力を延長するとか、子をして補給せしむるとか云ふ事は、尤も卑怯なる人間の行爲ではありませんか。ナント云つても、人間の本領は自己を活かすといふ事を以つて、全量とせねばなりません。親とか子とか云つてもソレは哺乳間の代名詞であります。女が乳房を有つて居る以上、此間だけは否定することは出来ません。

貴郎！すべての文化は『自然』の分解現象であります。此現象かくだらない感情に着色されて面前の世相を組織して居ます。隨ふて人生の大部分は全く戯曲としか見られません、私達は此現象がアマリ現代的に染色されぬ以前に理性の眼を張らねばなりません。

既往に囚はれ歴史に溺れたる人から觀れば、狂氣ぢみたお約束のやうだが、何にも人生の構成に抵觸せないのみでなく、人間が人間の爲めに交換しつゝある低級なる行爲から免れて、努力と享樂！此二大目的を充實せしむると云ふ事は必ずすや成立すべき眞理を包蔵して居ると思ひます。貴郎！もしも此お約束が来るべき遙かの時代に於いて全人類に普遍したとするならば改善の濫觴たるお互は『自然』に應答し得たる祝福者ではありませんか。

同慶三年、貴郎のすべてを識れる私は、此手形に裏書する事を信じて居ます。ソレは全くの無條件で……。

金剛山手記

吉岡久

【二四】

散つて来る秋の露がヒイヤリと冷たい、遠くで鳴く山鳩の聲が何となく山路にふさはしい、旅愁が一入しみんと迫つて来る。

寒霞溪で休んでゐると背の高い二人の西洋婦人が靴はきのまゝで日傘をさして辨當を腰につけ乍ら上つて来る、彼女等は案内人もない杖もつかない、大きな男の出で立ちが少々耻しいわい。

清流で顔を洗つて登つてゆく事二十町、そこには萬相亭の茶店がある、こゝが萬物相で終りの茶屋だ。

サイダアを飲んだり、辨當を食つたりして歩みをつゞけると三町ほどで萬物相に達する。

鬼面岩の怪異！玉女峰の矗立！雲は連峰を去來して只大偉觀に驚くのみだ。

こゝから谷川に下りると三仙殿の眺めがよい。

記念撮影を終る頃急に空模様がおかしくなつて新萬物相行の中止は遺憾やる方ないものがあつた。

大嶺の雲吐くところ花野かな腹這ひて女のゐたり霧の茶屋石飛べば青き蛙や霧の雨

神溪寺

温井里を離るゝ事十町、極樂峴の峠を下ること數丁。

そこには神溪寺の古刹がある。極彩色の伽藍、古びた羅漢殿、新羅時代の古塔は嚴然として突出つてゐる僧侶三十餘人。

靜かにして廣々とした境内、松林に圍まれた此寺は流石外金剛第一の名刹に恥ぢぬのである。

扉を排して類つけば何となくクラシクな気分が打たれる。松林に日の出の遅し山の寺

九龍淵と上八瀧

温泉の町の近づきて虫時雨かな

朝の温井里

家まばらの温泉の町温井里はまだ眠から醒めてはゐぬのだ。

宿の下駄を引つかけて霞橋の上に行むと、掬へば溶けさうな谷川の水は靜かにせゝらぎの音をたて乍ら石を洗つてゐる。

眼前に聳え立つた水晶山が初秋の狭霧の中からはのかな寂光の姿をあらはしてゐる。

橋袂の草原には桔梗や萩や女郎花がしほらしい花をつけて靜かに朝霧の懷に抱かれてゐる。

あゝ霧を突き破つてすばらしい日の出！靈霧圍氣！
暫くして宿の水晶の様な温泉にしたる。

霧の川のみを眠し温泉をま

萬物相

縮のシャツに縮のスボン、脚絆に草靴、鍔盾帽子に金剛杖、腹には懷爐があり腰にはキヤラメルがある、出で立ち誠に豪儀だ。

温井里の宿から霞橋を渡つて行くこと一里、此の邊から道は次第に險しくなる。

水晶山の頂、觀音峰の壺壺から淡い霧が流れて来る、思ひ出した様に木の葉を鳴らしてバラ／＼と小雨が降る。

ふり分けつゝのぼる青い山芒、

庫底より温井里

元山から庫底まで四時間を費した忠清丸は濃霧と海荒れで出帆する事が出来なくなつた。

室の汚さと船の動搖に神経をとがらした自分等は、一先づ船に別れを告げて陸行する事に決心した。

庫底の旅館で夕飯を食ひ疲れを休めて自動車の手入を待つ事二時間餘、午後八時漸く一行が恙なく自動車上の人となる事を得たのである。

是處から温井里まで約十三里、道は思ひ切り悪く、平野をすぎ川を渡り野原を横切り、自動車は今坂道にかゝつて來た。

下は千仞の谷、山中の夜は次第に更ける。小躍又小躍！九十九折の坂道を自動車は今僅かな電燈の光を頼りに下つて行くのだ。

突き出た岩、生ひ茂つた森、月は思ひ出した様に折々樹の間からはにかみ乍らのぞいてゐる。

ハラ／＼させ乍ら秋草の咲き亂れた谷間の上を飛び白樺の林を突き抜けた車は『晝通るとしても好い景色で御座いますよ』といふ運轉手の聲がした時には、岩によせる荒波の磯を傳つて、満々と湛へた大きな湖水の傍を過ぎ青葉と秋草と潮の交錯した香りに酔ふ間もなく、いつか濃い霧に鎖されて靜かに長筒街道を走つてゐた。

河を渡ること九回、其度に大きな石の上を飛び越えて行くのだ、一〇の間遠くと渦を巻く青い水潭の

空に聳えてゐるではないか、玉女峰の連山は峨々として雄姿をあらはしてゐるではないか、下を覗け

なく、いつか濃い霧に鎖されて静かに長筒街道を走つてゐた。

小雨が降る。ふり分けつゝのぼる青い山芒、

九龍淵と上八潭

河を渡ることに九回、其度に大きな石の上を飛び越えて行くのだ、一つ間違ふと渦を巻く青い水潭の中に落ち込まなければならぬのだ

松丸太を攀ち石の上を這ひ鐵柵をつたつて飛鳳瀑を見、玉流溪を渡つて温井里から約三里、そこには三百尺の九龍淵瀑布がある。

瀧の右の大きな岩には金圭鎮氏の筆になる彌勒佛の大字が物々しく彫られてゐる。

瀑は響々の響をなして飛沫は霧となり雨となつてあたりは面をむくべくもない。

高い小屋の茶店で折詰を開いて神秘的の傳説などを聞く。興は限りなくつきない。

九龍淵を辭して數丁引返すと八潭上峰の登り口である。

道はない木の枝草の根、石を攀ち丸太にすがつて上ること約半里その頂は所謂『上八潭』である。

あゝ雲は遙かに脚下にあり、觀音峰、毘輪峰の連峰は巖として蒼

空に聳えてゐるではないか、玉女峰の連山は峨々として雄姿をあらはしてゐるではないか、下を覗けば數千丈の谷底。

濃く鎖した霧は次第に晴れて、谷底の八潭の流が水晶を溶したやに見え初める。八潭の水壺には、物凄く青さを湛へて八龍の住むてふ傳説をありありと頭に浮はしめる。

外金剛の風色、萬物相あり、九龍淵あり、海金剛あり、叢石亭あるも、あゝ此の大偉觀たる八潭上峰の眺望に及ぶべくもない。

連峰の巍峨、去來する雲、雲をのぼる日光の色、蛇を住ましむる八ツの清潭、千仞の斷崖、落葉樹は赤々と松の實をつけてゐるではないか、あゝ外金剛第一の景勝上八潭をおいて遂に金剛の景色を論ずべくもないのだ。

霧つる閑を見返る峰や霧晴る、霧の晴れ間を赤き松の實たづねけり

いろいろ帖

A C

齒科の利根川さんは、マダほんとの書生流だ。子供の齒を二本もぬいて貰つたが、

何の手數もかゝらない、簡単なものだ、お金はいりません。

洒然たるものだ。何より子供が泣きも叫びもしなかつたことがうれし。そして二本とも何時の間にかキレイに抜かれてゐた。

消暑の小熊さん、小氣味のいゝ署長さんである。電話をかけて曰く、

書いてしまつて、規程を見ると成るべく一頁以内とある、しまつたと思ふか、もう仕方がない切なるなり消すなりして下さい、一旦出した以上は、活殺取捨は

貴社の權利ですからね。權利が面白い。痛快な先生の面目が眼前にうかんで来る。

旅して

南部とも子

かがり火のまあかに燃えし鵜飼舟今宵は旅の憂さを忘れぬ欄干によりて見つむる球磨川の水の面は旅の淋しさに満つ鵜飼せる球磨川の夜の涼風は家戀ふる子の頬をたぶらう夜更けて鵜飼の炎いよゝもゆわが魂のながれるごとく

桐の葉のいまだ散らぬに秋の氣は梨の梢より地に擴りぬあをそらに秋立つと見ゆうすきぬの袖かえり見ぬ今更の如堪えたえて夜の街をゆく無理も。笑ひの聲は灯に吸まらる。あまりにもまぶし明るし街の灯は泣き笑ひする面さらしてふりむかず冷く去りし白ゆかた縦横無様に胸をのたうつ泣き疲れ囉落せば隣近くこほろぎしづくはひよりて來ぬ

總督府の鈴木技師(竹磨氏)はやつとこの頃將棋を心懸け初めた人だが『着眼は非凡なところがあつて、少しやるとキツト出色のウデ前になるでせう』と、辻六段は評してゐた。先日二枚落で、同六段と對局したが、三局中二面まで鈴木さんの勝。辻六段曰く『無理をすれば、勝つてぬこともないが、向ふが手筋で來られたので、いさぎよく兎をぬきました』と、蓋し大手柄である。

廣江澤次郎氏、出資してゐた學生がこのほど早水を出したが、その本人は、マダ會つたことも、見たこともないとは、痛快々々。

生死巖頭に立てる

妻を見て

中村健太郎

○私は、この二ヶ月の間に、偉大なる體験と驚異とに出くわした體験とは妻が不治の病と稱せられる胃癌にかゝつたことであり、驚異とは、近來醫術の進歩の著しいことである。

○私は、胃癌といふ病は、到底も助からぬものと考へてゐた。初め胃癌といふことを聞いた時は、電氣に打たれたやうな感じがした。兆民居士の一年有半などを思ひ出して、永くて一年も壽命が保てるものであらうかと思つたりした。○そうなる何となく心淋しくなつて来る。子供のことも考へずには居れない。男の親のない子供は育つが女親のない子供は育たぬと聞かされたことなどが、次から／＼に湧いて来る。思はず嘆聲を漏さずには居れなかつた。

○然るに胃癌も、早く発見されて、之れに適當の方法さへ施せば難治でないといふことが判つて來た。即ち近來醫術の進歩は、外科的手術によりて、根治することが出来る。某警部の夫人が、その確かな證據である。

○只だ今日に於ても、尙ほ多數の死亡率を示してゐるのは、病が進むだけ進んでから、病院に來るので、その発見する時は、既に手遅れとなつてゐるからである。又之れを的確に見出すことの困難なもの、その理由の一つである。

○妻は、今年の三月頃から、ブ／＼病氣ではあつたが、元氣はあり、營養はよく、發熱もせず、自然そのまゝに打過ぎて來た。只だ不思議なのは、食物が進まぬこと、盛に吐き氣が來ること、何處となく痛を覺ゆることであつた。終に堪へられなくなつて、伊藤博士の診察を受けたところが、胃癌の疑があるといふことになり、急ぎ入院させたのである。

○されど少しにても、その疑のある以上は、之を放置することは出來ない。病氣になつては、醫師に一任するのが、私の主義である。私は是まで随分病氣もしたが、その時は毎も醫師に一任して、決して他を顧みなかつた。今度も、この方針によつて、主治醫に、一切を任かせた。

○一ヶ月目に内科から外科に移された。そしてとうとう手術といふことになつた。癌の手術には、消極、積極の兩方法がある。消極とは、患部の切斷をなさず、そのまゝ元の如く縫合して置くこと、積極的方法は、患部を徹底的に切除することである。

○消極的方法によれば、即座に危険の伴ふことはないが、病は進んで落命するの外なく、積極的方法によれば、根本的の治療方法たるだけに、それだけ危険も伴ふやうである。

【二六〇】

○私は右二者の内何れにするかと問はれた時、徹底的手術を求めた。後にて聞けば、妻は、既に決心して、徹底的手術をするやうに自ら主治醫と、主任看護婦に依頼して居つたやうである。然かも手術の結果は、頗る良好にして、十五日日には退院を許さるゝまでになつた。若しも躊躇して、手術を決心しなかつたならば、一命は取り止められなかつたかも知れぬ。

○死を決した彼女は一時一寸退院して、再び入院する時、自らの單箭を立派に整理して往つたといふことである。然かもい／＼／＼とになると、中々に決心が付き兼ねるものの如く、愈々決心の出來たのは、井上船井兩女史の力に依るであつた。あの熱心な同情ある勸告には、終に背くことが出來なかつた。然かも生死巖頭に立つた私には、何一つ頼むものもなく、只だかねて信仰の觀音におすがりするの外なかつたとは彼女の告白であつた。そして井上船井兩女史の如き人が、觀音様にも擬すべき人であらう。

◆達摩二百幅

平田久雄

大村尚議書記長、有名な座禪家だけに、達摩の軸を集めては、既に二百幅以上上つてるとの評判がある。そして閑餘自ら筆を執るが、それは諸流諸家の長所を探り、頗る素人放れがしてゐる。但し自重して、仲々書かぬのである。氏はまた金秋史の書幅——それは天下第一ともいふべきものを愛蔵してゐるが、これは御本人の御自慢モノだけに、誰が見ても、ウゝとまゐるやうな絶品ださうな。

ので、その發見する時は、既に
手遅れとなつてゐるからである。
又之れを的確に發見することの困
難なもの、その理由の一つである

んで落命するの外なく、種痘の
法によれば、根本的の治療方法た
るだけに、それだけ危険も伴ふや
うである。

旅から旅の歌

福田有造

海近し磯の匂ひと遠鳴りとあはたしくも君はゆくかも
眞夏にもゴルフのクラブ握るかな温泉岳の朝と夕とに
滾々とする日もなし温泉湯にも夏冬ともに上海よりも來
る(以上三首温泉ヶ岳にて)

湯の町を素通りして棧橋にテープの幾筋見るも旅人
温泉の夏の眞晝を君のゆく別府なればなつかしきかな(以
上二首別府にて)

あけただし水に渦巻く鳥のたつその行方や夏の夕暮
水鳥の羽音悲し今更らに夏の海邊に千鳥鳴くかも

夏なればアルプス連峰漂泊へば又なきものと若人の群ゆく
あの山の奥の岩陰清水湧くその流れゆく水の音かも
夏の新紅丸の甲板にしみく海の青きを見るかも(以上五
首新紅丸にて)

道後にも遊んで見たり旅なれば五十一番の靈所をも拜して
友あれば松山に來て昔など語りて夏の日も暮れにけり
温泉は何處も同じ今更らに道後の町を歩いて思ふ

ある時はボールの話、ある時はゴルフの事など語りて明け
たり

涼風を入れてビールの満を引くメジロの宴の晴やかさかな
夜は更ける夏の宴につらなればお酌は銀扇ゆらめかしつゝ
藝者等のさよめく聲を外にして友と吾とは盃を重ねつ
はるんぐと東京よりも來りけるその宴も東京の如
待合のお女將はふたりをしみく見つめて年をとつたと
云へり(以上九首松山と道後にて)

青々と船は音戸の瀬戸通る麗はしき海上戦の軍艦よ
廣島のある家に來て計らずも思はぬことありやなしやと
ダンサーか何か知らねど阿婆摺になつたものと吾は思へり
吉川の川邊の室に藤椅子にうたゝ寝するも旅なるかな
右腕に入墨するも女なり何の戀ぞや羨ましきかな
妖婦か毒婦か知らねど夥しその名は町に響きたりとか(以
上五首廣島にて)

温泉の湯殿の鏡に寫りたるあのデリケートなる君の顔かな

◆無駄ばなし

吉田 莊一

○ 讀者お馴染の廣田康博士は、今
度歐洲へ留學せらるゝこととなり
この間元氣よく當地を出發せられ
た。記者は、誌友各位と共に、一
路の平安を禱つてやまぬ。

○ 今度朝鮮新聞社に、太平俱樂部
といふ社員の娛樂場が出来た。甚
も將棋も可なり盛んらしいが、出
色なのは、竹田洋事務の將棋で、
これは大分手筋がいゝといふ評判
である。

○ 西大門署の原署長さん、毎日署
員をつれて、構内で驅ケ足をして
ゐる。イヤ新任以來、來る日もく
驅ケ足をやらせるので、今度の署
長は「かけ足署長だ」といはれて
ゐる。

○ ところで、原さんの主張を聞いて
見ると、警察官は足が痒者でな
ければ、第一要件を缺く。それも
長距離となると、自動車、オート
バイなどがあつて、その必要もな
いが、それ火車！それ泥棒！とい
ふ時、二町や三町を走つて、顔色
青紫の如くなつては、どうして物
の用に立たう。これ我輩の敢て驅
け足主義を鼓吹する所以のものだ
とある。

○ 井上取さん「近く『半島に馳く』
の一書を出版する筈。就て思ふの
は、この朝鮮も、一人や二人の專
門著述家を、僅に食はせるだけの
包糰味のあつて欲しいことである
思ふその日は果して何時か?。」

母に飢ゑて

—森悟一氏の後添論—

S P R 井上 收

(二八)

私はまだ女房を亡くした経験はない。従て女房を取替た例もない。

世には随分不幸な人があつて、女房に先立たれ、憂目を見る人が多い、のみならず、多くの子供達を遺されてそれこそ人にも話せない、頼みもならないやうな、苦勞の中に悶えて居る人が、尠くないさうした不幸な人達は、多くの場合後添を娶るとか、後妻を迎える女房を亡くした経験のない私ばかりした話をきく場合に、その後妻の要件は、主として良人たるべき人の、身の廻りや、享樂生活の加玉であつて、育児といふ方面、家庭といふ問題は、概ね第二義に置かれて居るものと觀て来た、後添を求め居る人の心理は、概ねこれに出發して居り、遺された子供の世話、といふことも、元よりその要求條件の一部にはなつて居るが先づ第一義としては、良人の享樂慾求だ、と考へてみた。

この私の後妻論は、度々そんな不幸な人に當面し、心持を聞いた時、必ずその人に私は斯ういつたそれは私の、多年唱えて居る、私一個の児童愛、童心論に出發したのは、いふまでもないが。

『あなたは、後妻をお貰ひになつても、決して前の奥さんの子供達に、その人を、お母さんと呼ばせてはいけない、必ず小母(おばさん)と呼ぶ様になさう……』

と、随分いらざるお節介をいつた。その理由は、世間にいふ、繼母といふ者が、子供の發育上決してよい結果を齎さない、よし其後妻なる人が、頭めて善良なる人であつても、繼母たる事は事實でその家庭だけでは、前のお母さんと變らぬ、同じかも知れないが、世間やまた門を一步出た周囲では

『貴君の今度のお母様は、貴君を苛めやしないか？あれは繼母よ』などと、切角家庭では、よいお母さんで居る人を、子供も亦、大切ない、お母さんと思つて、居るのを、家庭外の周囲から、うちのお母さんは繼母だ？といふやうな暗い影を、子供の頭に注入することになり、自然に母子の間が疎隔するやうになる。後妻をお母さんと呼びしめることは、元より一種の虚偽であり、一面かうした、家庭の内輪からは、思ひもよらぬ、災ひの芽生が出る、となれば、その後妻の人を『小母さん』と呼ぶせ、ほんとうのお母さんは、亡くなられてゐない人、といふ眞實を教へるのが、児童教養上、尤も適切な言葉である、小母さんといふ言葉は、現在も亦、行々いつまでも、少しも間違のない、少しも偽りのない言葉である。

と私は多年説いて来た。そしてこれが尤も正しい事で、そんな萬一の場合があつては大變であるがもし私が、そんな場合があるとすれば、必ずこの主義で拂通す考である。處が、先頃殖銀の理事森悟一氏の話をきいて、私は今この主義の根據に疑問を持つ様になつた。森氏夫人は、昨年六人の子女を遺されて、不幸この世を去られた。森氏は去月、その遺骨を京都に埋められた、いづれは後妻問題にも直面するやであらうが、この人から私は端なくも、

『母親に死なれた子供は、その後明けても暮れても、お母さんを追ひ求めて居る。嬉しいこと、悲しいこととの感激にふれた場合、お母さん！と呼びたくて堪らない……たしかに母の名に飢をきつて居る、僕は君の小母さん論の記事を讀んだ、そして君の説には敬服してゐたが、子供の顔を見ると、お母さん！と呼びたくて堪らない様である、僕は或人から、それも後妻を娶つた先輩から、この母に飢ゑてる、といふ子供の心情を聞いた時、久しく求めてゐたものになつた。久しく求めてゐたものになつた。久しく求めてゐたものになつた。久しく求めてゐたものになつた。』

といふ話をきいた、この刹那、多年主義として来た、小母さん論は木ッ葉微塵のていである。その後私は、この問題に就て、しばしく考へてみた、果して、飢ゑたものに『お母さん』を與へてよいか、どうかであるが、たゞその當座、寂しい飢餓の童心を慰むる爲に、一時的に……と考へて見た、然し私のいふのは理屈であり、森氏の説は偽らぬ眞情である、この童心の母への飢餓を慰むるか、將來の家庭的空氣の爲に私の説を行ふかは今もつて私には、セレクトがつかない、此雜筆の寄稿家また讀者には、多くの體驗者があらうと思ふ。志ある人の高教を仰ぎたい。

なつて、選手の上に表はれるのであるから、其の團體自身『スポー

運動の民衆化

加藤 寮 平

道に、その人を、おぼせ、せ、てはいけない、必ず小母(おぼせ)さん、と呼ぶ様になさい、……』

一の場合があつては大變であるがもし私が、そんな場合があるとす

には、多くの體験者があらうと居ふ。志ある人の高教を仰ぎたい。

文部省が、明治神宮競技に、學生の參加を三年目一回に、制限した事に對し、大分議論もあるやふであるが、文部省とはまた別箇の意味で、これに共鳴して居る者もある。即ち文部省の處置が、運動をして學生以外の、一般民衆にも理解普及せしむる時期を、促進するに効果ありといふにあるが、屈もつけやふである。

娛樂が生活の一部であり、夫々其の分に應じて、楽しむといふことは、譬澤でもなければ、何等とがむべきことでも、いやしむべき事でも無い、況んや娛樂と雖も、自ら行ふ者と之を觀る者とに限りず、其の心掛けに依つては、教訓とならないものは一つもない、さればこそ最近爲政者も之を善導すべく、所謂民衆娛樂の設備等に、其の意を用ひつゝあるのである。運動も娛樂の一つではあるが、所謂『スポーツ』なるものには、別に或る嚴肅なる意味が含まれて居る、其の精神を一口にいへば、心身の鍛練にあるといひ得る、而して心身の鍛練が獨り學生にのみ必要でないといふことが解れば、運動を民衆化することに、何人も異存のある筈はないのである。

此の意味に於て、吾が逓信局でも、一昨年局員に運動を奨勵して相當効果をあげて居る、缺勤者の少くなつた事は、直ちに身體の強

健を思はしめ、事務能率の増進は即ち精神練磨に資する事、渺少ならずといはざるを得ない。

凡そ何事に依らず、興味の伴はざるものは、意り勝ちとなるは喋々を要しない、喩へば吾々の食事が根本に於て、身體を營養するを目的とするが、若し本能的に、食欲をそゝらなければ、中には食事を怠る者がないとは限らない、運動もそれと同様に、單に純理にのみ解嚮して、競技を抜きにして、面白味を添へなければ、所謂自體術や大和ばたらきの如く、永續性に乏しいものである。

唯だ競技が白熱して、選手を擁して對抗する時に、選手以外的大部分が、運動を體験しなければ、根本の趣旨に反する場合を、憂ふる者もあるかも知れないが、吾人の觀るところでは、成程凡ての者が、運動を體験するを理想とすべきではあるが、實際に於て此等の場合、選手以外のものは皆な、青瓢單の様に、ヒヨロ／＼して、全然『スポーツマン、スピリット』を體得しないかといふに、強ち左にあらず、選手と選手を擁立する團體とは、不可分の關係にある、『ミシガン』より湧いて流れる『ミシシッピー』の河水が傾て『ナイヤガラ』の瀑布となつて落ちる、團體を貫いて流るゝ意氣や『フアイテングスピリット』が、一丸と

なつて、選手の上に表はれるのであるから、其の團體自身『スポーツ』の要素となる凡ての條件を具備しなければ、完全なる『チーム』を戰場に送る事は到底望まれないのである、其の條件の主なるものに、協力一致あり、犠牲意氣所謂澹澹たる『フアイテング、スピリット』等を擧げなければならぬ、此等は社會人公職者として、直ちに探つて、已れに資する事が出来る、これ獨り選手たらずと雖も、其れを後援する『バック』は勿論其の團圍氣にある所謂『ファン』も凡て、『スポーツマン、スピリット』の眞髓、大部分享有し體験し得る可能性を有する所以である

◇とりぐ草

平田 久雄

○ 和田商銀頭取夫人から、原稿をもらふやうになつた。尤も當分の間、頭取には内所にして置く筈である——干渉されると、ウルサイからな。

○ 東拓では、川上法學士の夫人が短歌を贈つて下さる——喜久子さんといふのが、その人である。

○ 今度新に南部とも子さんの稿を頂いた。とも子さんは、鮮銀南部法學士の夫人で、中村家再造氏から嫁かれた人である。

○ 川上夫人も、南部夫人も、マダ三十に手の届かない、どつちも有名な美しい方である。そしてその作歌は、その容姿におとらず是れも亦珠玉のやうに、燦然と光りを放つてゐる。

郷土自慢

久松前平

【NO. 1】

つた風に、日本國民として國民性の發露さへも出来ない様な點が多いのであります。

○今日ではそんなこともありませんが私等の子供の時には畏れ多いことですが、三大節に御眞影の拜賀を禁じられ其信者の先生も學校生徒も登校しなかつた時代もあつたさうです。然し今日でも尙此宗教の爲めに村政に大なる支障のあることは事實で、極最近にも耶蘇の宣教師を村長にするとして大騒ぎを演じた滑稽もあつたと云ふ、ことを聞きました。一寸想像もつかぬ事實でせう。爲政者は思想がどうだのこうだのと云つて居るけれども、今少しくこんな所も考へないと純眞無垢な忠良の國民でも宗教に依つて或意味の悪化を免れ得ざることになりはせぬかと心配に堪へません。

○外海に面して居るだけあつて濔濔たる生魚を味ひ得ることは他で味ふことの出来ぬ自慢の一つです。午前六時頃から七時頃になると漁船が群をなして沖合から歸つて來ます。波止場に横附けた所に行つて見ると、アヂ、サバ、カツヲ、イツサキと云つた様な魚族が青味切つた潮に遊ぎ廻つて居るのです。海の中の縮圖と見らるゝ此有様は何とも彼とも申し様がありません。ですから食膳に山と積まれた生魚の料理は此上無き珍味です。京城は勿論内地の都邑地でも百萬金を積んでも得難いものです。夏季は比較的漁獲高も少いですが春、秋は網漁の時期ですから鱒の様な小魚からブリ、シビ、フカに至る迄盛んなものです。投網でス、キだのボラ、チヌ等の大漁があります。私共は夕方汀で投網を打つて毎日食膳に上せる漁業が

私は七月二十一日から八月二十一日迄、約一ヶ月間郷里に歸りました。田舎話も一興と存じ、風變りの所を紹介して見やうと思ひます。

○私の郷里は長崎縣西彼杵郡黒崎村です。長崎から七里北西に行つた外海に面した半農半漁の一寒村です。御存知の通り西彼杵郡半島は日本でも一番地質の古い所だと云はれた所である爲めに殆んど岩から出来上がった様な所ですから、陸路は険しい山坂路許りで自動車交通が危険な位です。然し海路を辿れば四通發達の便利な所です。

○有名な炭坑のある高嶋、樺嶋は灣の南方に望見することが出來ます。五嶋は西の方に指顧することが出来るのです。産物もありませんし僅か長崎に七里しか離れて居ない所であつて文化の程度はお話にならぬ程進んで居ないので、でも漁業の方は昔から五嶋、平戸壹岐、對馬、朝鮮と聯絡があります。

○昔のことを云へば大村藩と佐賀藩との争ひの中心地であつた所ださうで、其領分も複雑多岐であり人情風俗も異つた點が多いのです。兎に角日本にもこんな開けぬ所があるかと思はれる程の田舎であることを先づ御記憶に留めて戴き度いのです。

○そんな寒村であるのに、佛蘭西から直輸入の葡萄酒が駄菓子屋で賣られて居ります。佛蘭西式の食パンも手に入ります。一寸意外でせう。それには理由があるので

す。と云ふのは今から四十年許り前に肥前領へ私の村では肥前領、大村領と今日でも呼んで居ります。私は大村領の方です。の内でも貧乏人の多い中出津郷と云ふ所に一外國人がやつて來まして、煉瓦建の廣大な教會堂を建てました。それから病院が出來、授産場が出來て貧乏人に職業を興へ、醫藥を給したのです。期せずして救ひの神來ると教會に押し掛ける者踵を接する有様で、忽ちにして一大王國をなすの觀を呈したのです。此外國人は佛蘭西人でナポレオンの後裔なりと稱し、ドロと名を呼び、イエスキリストの使ひなりとして舊教の布教に没頭したのです。これより先き同じ肥前領の下黒崎と云ふ郷にも矢張り舊教の教會堂があつたので、今日では立派な教會堂が二つあります。だから如何にも耶蘇教村の様にありますけれども千戸餘の所で半分迄には至つて居ないと云ふことです。

○然し其宗教を信するものは教會を中心として一大王國をなして居るので、日曜日には必ず休まねばならず、神社の参拜も禁じられ他宗の者との結婚も許されぬと云

あつたのですから全般を想像することが出來ますでせう。

○朝日に輝く大海原、夕日の大

◆Wさんの事

吉田社

あつたのですから全般を想像することが出来ませう。

○朝日に輝く大海原、夕日の大海に没する風情、月夜の海面、扇ざわりの宜い潮風、とても繪にも詩にも盡くせぬものがあります。

それから夏は時々大波が立ちます遙か沖合から山のような大波が押し寄せて来るのです。其怒濤を機會に村の青年は僅か一枚(半身を乗せ得る位のもので)に頼つて其怒濤と闘ふ游泳をやるのです。波落しと通稱して居る游泳術ですが私の村で遣つて居る様な此波落し術は珍らしいのださうです。十數人或は數十人が沖合に居つて其大波に乗つて汀迄来るのです。其勇壯なること例へ様がありません、隨に大海を征服するの意氣と體力とが養成されます。だから小さい和船で朝鮮近海迄も漁事に出掛けることなんか平氣の平左の筈です。アア此位にして置ませう。

學生の方へ

福田有造

拜啓 昨日の手紙に一寸書くことを忘れましたが、雜筆九月號に『特志の方へ』の記事を見て僕が若しも京城に住つてゐたらば何とかしたいと思ひます。若しも優良な方であるならば學費を出してもいいと思ひます。

必ず優良な方に違ひないと思ひます。

松本さんあなたがいと云へば毎月三十五圓位ならば送つてもいいと思ひますが、どんなものですか世の中には優秀な才能を持ちながら困つてゐる人があると思ひます今後その方面に出来るだけやりたいと思ひます。

學生時代のことなどを考へて。

Wさんの事

吉田壯一

前號にWさんといふ貧しい學生(京大政治科一年生)のことを書いたら、三人の先輩からスグにお話があつた。

記者は、みづから救はれたやうに思つた。人生は、必ずしも冷めたくはない。

○ K社長は、現に四五人の學生を引取つてゐるが、お話を聞いて、人事ならず思ふ。半分位學費を支持つても良い……まことに快く同情して下さつた。

○ と、巨賈家からも電話があり都合では、自宅において、子供の監督をして貰つても良いと思ふがドウだといふ話。記者は耳寄りの話だと、大によろこんだ。

○ その晩、木浦の福田氏から、別稿の手紙が届く。これでやつと、肩が軽くなつたやうで、早速旨を教授に通じて置いた。

○ どんな風になるかは判らぬが、記者の腹では、先づHさんところに置いてもらつて、口の問題を解決し、殘る學校入費だけを、どなたかへお願ひしたらどうかと思ふとに角もう斯うなれば、夜は明けとも同然と、記者はゆつくりした氣分になつた。

○ Wさんは、學校の方は、成績最優秀といふことは出来ないが、その人物志操のシツカリしてゐることは蓋し稀に見る好青年である。

【三一】

金剛山雜詠

岩淵山與水

霧の降りて来る山うらにも龍の鳴る音
龍壺におり立てば山の雲垂る、
みちまがりまがり山深うなり
霧流れ去るあらぬ方山の見えそめ
のほり行くに岩がねかづらふみすべり
はりがねつたひのほり岩にだきつく
山山露れゆく谷水のひとすじに落ちくる
山から見る山の軍なりの雲のちぎれ置く
夕の谷に浴びる我等に迫り来るや峰々
寺を宿にした山番の酔ふてゐる今日も

猫

吉田雄次郎

瘦せた畑には太い大根は決して出来ない、人や動物の性質も矢張り日常の境遇に依つて成るものが多いから、馬や犬や其他の動物の性質がよくないからと、無闇に叩いた所で仕方がない。責める前には先づ其の人から責めるのが順序でなからふかと思ふ。それには最も手近なところでよい例證がある即ち猫は其の生れ時に依つて幼時から日常の境遇が異ふと、その性質にも著しい差別を生ずる事を見るも明かであらう。

昔から猫の性質には四種あるものとしてある、それは春夏秋冬の生れ時により、自然の境遇がこの四種の性質を造るのである、春季に生れたものは幼時から春陽の和氣に懷かれて、柔かい芳草の上を飛びかふ蝶に戯るゝのが習慣となつて、親猫となつても蝶をとる癖がある、それで春兒は『チヨコ』と唱へられてゐる。夏季に生れたものは、恰度鶏の雛が發育中で、初めは戯れに逐ひ廻すのが習慣となつて、親猫になつても鶏を覗ふ悪い癖が止まぬ、故に夏兒を『トコ』と言はれてゐる。又夏の末から秋へかけて生まれた所謂秋兒となつると、とかく蛇を覗ひたがるから、これを『ヘコ』と云ふのである。

機會が少く、多くは寒氣や風雪に鎖されて屋内に蟄居し、周圍の境遇が彼れの性能を他に誘惑するものがないので、自ら其の本能を發揮して鼠捕りの一點張りとなるから、これが眞の『ネコ』と唱へられて最も珍重せられて居る。モ一つ序に猫の話『子供のある家には猫は育たぬ』とは昔から能く人の云ふことで、子供の多い家には肥へて福々しい猫の少いのは事實で、多くは瘦せてゐる、元來猫は斯くまでに子供を嫌ふものかと思ふに決してさうではない、却て子供と共に遊び、わけても兎猫などは子供と戯るゝ事を喜ぶのであるが、然し猫は浴に寢兒といふ通り睡眠は實に彼の生命であつて晝間はたゞ睡眠の適所を選ぶのに汲々として居るのである。ところが頭長ない子供は一向これ等に傾着せず、彼を愛するの餘り睡眠中も突然これを抱き上げたり、尾を引き耳を捻り、自然彼れの生命とも云ふべき睡眠を妨げるのであるこれが著しく彼れに不快を感じしむるので其發育を妨げ、或は瘦せたり或は天死したりする原因となるのであらうと思ふ。生理上動物に所要の睡眠を與へざる害は、所要の食物を與へざる害よりも甚しいものである、而して猫が斯やうに睡眠を貪るのは何故であるかと云ふに、彼の睡眠は最も淺くし

て斷續的のものであるから、従つて長い時間をこれに費さねば到底彼れが生存上に必要な休養を得られないからであらう。

試みに彼れの睡眠中僅かに嗜むべき香に接しても、又微な物の響に遭つても、直ぐに鼻を動かし耳を揺かし、又は起き上るのを見ても、睡眠の性質が他の動物に較べて最も淺い事が察せられるのである、この淺い睡眠はいふまでもなく敵の防禦の爲めで、又晝間よく眠るのは夜間の警戒に備ふる用意であつて、彼れの野戰時代の本能が今日まで遺傳して居るのである

◆刀のはなし

平田久雄

○森悟一氏は、愛刀家ではないが、傳來物の信國、外敷刀を藏してゐる。

○古い家の、新しい相續者は、斯うしてみんな重代の名刀を有つてゐる。生田局長などは、その趣味はないが、藏してゐる數は、相應に多いと聞いてゐる。

○中島貞信氏は、衣笠院長と親善なので、勧められては良い物をポツリ／＼と手に入れ、今では仲々の藏刀家になつてゐる。

○鑛業會の徳野氏も、嚴君がさして廻つたといふ關物(兼元といひ傳へる)大脇差を藏してゐる。

○新聞記者では、高島素夫君がその趣味があつて、自らあつめたものや、櫻井氏から貰つたものなど十口許り、仲々良いものがあるのである。天正祐定は自慢になる。○この頃、三矢局長の所へ、村正在銘の短刀が東京から來てゐる局長は賣物だがね……といつてゐたが、仲々立派なものだと思つてゐる。

冬季に生れた所謂冬兒になると
 幼い頃から屋外の悪戯を爲すべき
 りに睡眠を貪るのは何故であるか
 と云ふに、彼の睡眠は最も浅くし
 たる。 大か、仲々立派なものだと思つて

四大特長!!

風味の良
 芳香の良
 色澤の良
 き人の良
 い!!!

最上醬油



ウユークツキ

みやこ味噌本舗

嶋屋醬油部

營業所
京華 京天 京城 北米 倉崎 町町

後藤式フリクシオ法 診療所(理學的療法)

後藤回生院

院主 後藤 柰良 枝
 京城府永樂町二丁目七番地
 電話本局 (長) 三三二四

士居八段主幹
月刊將棋新誌
（二冊定價金三十七錢）
東京市橋區西紺屋町五
發行所 將棋新誌社

市内永樂町二丁目
木戸齒科醫院
院長 木戸 虎藏

西洋料理
支那料理
東京へお出での節はどうぞお立寄りください
東京芝區新櫻田町一七
泰明軒

市内明治町二丁目
小兒科中島病院
院長 中島貞信

市内明治町二ノ七五
利根川齒科醫院
院長 利根川清治郎

市内旭丁二丁目

外科
皮膚科
瀨戸病院

院長 瀨戸 潔

市内鐘路二丁目

濱洋服店

電話光化門二四四

人生の幸福は健康より

健康それは夢精の服用によつて解決します明日と云わず今日から而して人生の幸に向つて

(定價内用二十瓦入壹圓五十錢)

京城本町二丁目

總發行所
精製賣元

貴生堂藥品店

電話本局一三三八
振替京城七六一

高級
京 洙

(新刊見本到着)

京城本町三丁目

あらぎ屋

電話本三〇六八
京城五八三

市内吉野町一丁目

小兒科
木村醫院

電話本局七二五

東洋拓殖株式會社

土地改良部



鈴木木商店

京城支店

近ごろの事

芥川 正

僕が近頃の消息は、毎も病氣と云ふ二字で終始されるやうで甚だ面目ない次第であるが、幸にして病氣も今や根治されて、只元氣が思ふやうに恢復されぬのである、と云へば、傍から夫はお年のセイだと云ふ人が多いので夫れが僕には少々癪癪の種である。

現に僕は昨年十一月末から今年三月の末日まで足掛五ヶ月間は釜山府立病院の病客となり、艷陽四月の下旬から九州は南筑船小屋礦泉に療養客たること約三ヶ月、六月の中旬に至つて釜山に歸つて釜山日報社内の雲水坊に蟠臥した。歸釜後漸くに酷暑の候となり今は殘熱尙は釜中にあるに異ならないが、病餘の僕は元氣未だ全く快復しかぬので來訪客や集會席などには甚だ失禮とは恐縮しながらも、多く不面會、不出席、失禮して過ぎ去つてゐる。

併しながら新聞社務を見ることや、他の新聞雜誌を讀むことなどは元氣であつて四方に活動するときよりも餘程勉強が出来る。或る友人が皮肉的に蕃洲社長老いて活動乏しと云ふが僕は汽車や汽船で旅行し廻るのみが活動とは思はない、雲水坊裏に靜臥し、古今の名士と紙上に把臂談笑して、思慮を練磨し修養を積堆するも亦人生の一大活動ではあるまいかと負けぬ氣になつて回答した。

皮肉屋の友人は更に進んで釜日社の雲水坊は釜山市の紅葉草丈裏にあつて、決して健康の能く保てる場所でなく、況んや本年の極熱を避くる好位地ではないかと詰る。僕答へて、成程君の言は確かに道理あるも、余は本年は秋風の來るを此の雲水坊で待つゝの覺悟である。僕を以て云へば我が雲水坊は大陸鐵道の起點たる大停車場と關門連絡の大棧橋を庭前に控へ郵便、電信、税關、警察、或はホテル、劇場等の設備は附近左右にありて、文明の風は其の流通甚だよく、況んや僕としては元來六十餘歳の今日まで態々避暑の境涯に専遊したことなく、此頃は古人の傳を讀んで其の及ばざる遠きに慚愧し、又或は青壯年時代に同志と俱に失敗頗る多く、債鬼窮神に圍繞せられて冷汗背を浸せしことを思ひ出して避暑の好資料となす復可ならざるに非ずや、と答へたら流石の友人も呵々大笑して立ち去つた。

◆「寂光」を讀む

一 記 者

○ 專賣局の高武公美氏から、その近著「寂光」を惠送せられた。

○ 氏は、その前「靜想」と題する自著をひろく知友に配られたこともある。今度は二度目である。

○ 氏は、專賣局の要部に居る人と同時に總督府の官人であるが、その筆にせらるゝ所を見ると、立派な詩人であり、文學者であり、思想の人、哲學的冥想の人である。勿論經世的文字も見えるが、つゞめていふと、役人といふよりも、人としての高武氏に一層ふかい敬愛と親しみを覺えしめる。著者の如きは、俗流中の清吏といつても、決して滲美ではないだらう。

○ 「物を尊ぶ心」「母を喪ひて」「最初の東京」など、讀み了つて印象いつまでも去らざるものがある。就中「歐米の旅」などは、止むる國にも、衰へたる民族にも、將たまた電節館耀たる都市にも、著者の感慨と、咏嘆とが流溢し、人をしてその人と共に、いくたびとなく歎息せしむるものがある。

○ 業閑、筆をとることが一ツの美事であり、更にそれをまとめて、廣く知友に問ふことは、最もうつくしい友愛の一つである。記者は江湖の有志が斯うした風尚に、心から共鳴、響發せられんことを熱望する。

○ 著者今頃江々畔に、秋風を迎へんとしてゐる。遙に自愛を祈る。

【三十一】

京城つれつれ草

守屋 徳夫

○つれつれ草徒然なるまゝに物するうち心行く業なりしも、今月は是非に此の度は必らずなど催促せらるゝ様なりては負はねばならぬ債務とはあらねど氣にかゝりて何となら物憂し。

○忙中閑ありといふ言葉あり、そは『わけ知り』のすることにて凡人のなかなか及ぶべき事にもあらず、産米増殖、農事改良など朝まだきより夜更くる迄米や肥料の話に浸りもて行く間に、いつか青葉の頃も過ぎ、南山空高く澄み渡る月を仰ぎ、庭の叢に蟋蟀を聴くなり、思へば噪たゞしき我身にもある哉。タンクにて山野を蹂躪するか如く急行列車の停車場を尻目にひた走るが如し、荒涼無慘一抹の風流を宿さず、かくて猶いつ迄を生くべき我身なりや。

○學校の先生より銀行屋に代れるは三味線持つ手に火吹竹以上の變化なるべし、藝者より女房への變化は本質上何等の變化なしと言ひ得べきも精神文化の圈内より物質文化の眞唯中に迷ひ込みては昔源義經八咫飛以上の藝當にして雀化して蛤となるの類なり。

○あるときは善きまに悪かりきなくてぞ人の戀しかるらん女房など誠に然り、平素存在の價値すら認め得ざりしもの一朝病床に臥しては儘ならぬこと夥しく入

院などされてけ殆ど我衣食さへ全からざるを感ず、小さき子供の母を慕ひ、夜な夜な寂しげなる面持ちを見る毎に絶えなんばかり悲しこの心何とて常に湧かざる。

○商賈人になりて一番欲しきは休養なり、學校の先生たりし頃何時も不自由なりしは金なり、どこ迄も皮肉に出来たる世の中なる哉先生たりし頃稍倦怠をさへ覺えし三旬の休暇の今は如何に戀しき、或は山に或は海に一族打ち揃ひついと氣輕に遊び得たる頃のなつかしさよ、銀行屋など纏りたる休暇とてもなく『半ドン』など言ふ調法な者とてもなし、唯營々として蟻の如く生くるが運命なり、暇ありとて金なくばまゝにもならずさばれ何れかと言はゞ欲しきは數日の休暇なる哉。秋風立ち初むるまゝに空晴れ渡るまゝに遊心勃々として禁し難く詩意しきりに動けど、今の馬車馬の身には山里の使來ればとて鞍置かん術だになし。

○益裁程はかなく悲しきはなし壽命に限りあるを思はしむればなり、色よき花の優しきを賞で俤など履ひつ運び来る道すがらの浮立つ心よ、妻や子の水などやりつゝ飽かず賞つるも嬉し。うつらうまゝに枯れ行くまゝに、底意捨て難き名残はあれどやがて顧みずなりもて行くに庭の片隅になど枯骨の

【三八】

みさらして幾つともなく並べられたるよき人の骸骨にも似てあさまし。

○逃ぐるを北進といふ、大和民族には當らず、我等は北進しつゝ、今本陣を京城に置くなり、前哨既に滿洲にあり、斥候しきりに東露蒙古に出没す、朝鮮半島また何かあらん、五十年後の水利組合は正に蒙古にあるべく間島一帯にあるべし、我が殖産銀行など東西の土地抵當銀行として支店をクレーンに置き、延吉に置くべし、誰か痴人の夢とのみ笑はん。

○目賀田男長逝す、二三度頭取に御伴して御邪魔したる外何等知るところとてなければ、傳へ聞く男の功績は擧げて數ふべくもあらず。朝鮮今日の事業殆んど其の緒を男の創意に置くといふも可ならん。我等朝鮮の經濟にたつさはるもの感慨亦一層切なるを覺ゆ。男に逸事多し此の方面のことなかなかに味ふべきものあれども自ら追々に書きつらぬべき人も出つべし唯吾等の學ぶべきは判斷の速かなるにあり、實行の機敏にあり。頃日調査研究の美聲に隠れて殆んど因循姑息なる現状に鑑み誰か三省の値なしと言はんや。

◆野球笑ひ話

平田 久雄

法學専門學校の鷹松教授は、校內第一の野球好きだが、奥さんは亦『野球なんて何處が面白いのでせう』といふ絶對反對黨。そこで鷹松さんが一計を案じて、この間全鮮爭鬪戦を見物にやると、奏効顯面。爾來御主人の在否に拘らず、令息達とサツサと見物に行かれるので、鷹松さん『イヤ是はく』

られる、そなた』と皮肉つたり、

魚釣り

杉原德行

或畫家に世の中の一馬鹿者を
書いて呉れと頼んだら、魚釣る人
を両手に桶を掲げた儘で見て居る
人を畫いたと。

大海に一本の糸を垂れて魚が喰
ひ付くまで辛抱して居るのは随分
馬鹿氣た事だ、其れを見て居る者
は之を掲げた者と見做さるゝも無
理はない。

能因法師は家に閉ぢ籠りながら
顔を天道十しにして『都をば霞と
ともに立ちしかど』と詠じて歌人
の本能を満足させた。然しこんな
想像俳人には魚釣りの趣味は解せ
られまい。

私が京城著任未だ日淺きに度々
學校の事務員達と魚釣りに行くの
は、魚を釣り上げる時の何物にも
譬へ難き快感を覺えんが爲である
景色を眺めるとか、健康上よ、と
かは第二次的のものである。

昨夏ノールウェー國巡歴の時、
或田舎の小川に鱒が游泳せるを運
轉手が指した。私は直ちに自働車
を止めさせ運轉手と二人で川に這
入り込んで其鱒を獲つた。其時の
嬉しさは今も忘れられぬ。其間同
行の中村ドクトルは『悪戯にも程
がある』といふ顔付で私等の馬鹿
氣た行爲を見て居つた。後刻高い
自働車賃を支拂つた時には、私は
大分不平を聞いた。

それから約一ヶ月後巡歴も終つ
てパリに落付き、早速日本から

來た手紙を受取りに大使館へ出掛
けた、魚釣り好きの甥からの通信
の中に『叔父様には滞歐中と雖も
一糸を垂れる餘裕がありますか』
といふ一節があつた。大使館を出
た私の足は自然とセーヌ河畔に向
つた。其處には西洋の大公望が澤
山居るではないか。一時間余り世
界中の一馬鹿者となつた私は、
到頭意を決して第二の馬鹿者の仲
間入りをして其日の午後を過した
誰か言はば言へ『高い在外研究費
をもらひながら』と。

私の郷里では魚釣り税をとられ
る。この事は京城府の財源捻出法
に御懸念の御役人様には内密に願
ひ度い。夏休暇歸省中だけの魚釣
りの爲に私は鑑札を受け、又釣り
好きの甥と出資爲合つて小舟を一
艘設けて居つた。父の開業の手傳
をさせらるゝ私は余暇を偷んでは
魚釣りに出掛けた。お切懸な人が
『生臭い手で診察は釣合はぬ』と
か『學生時代は兎も角もお醫者様
になられたら、獵師の仲間入りは
廢業せられては』とか言つて私や
父に度々忠告して呉れた。因習を
尊ぶ私の町人は、醫者様は何時も
羽織を着て、表付の下駄をはき、
道樂は藝者遊びと相場が定つて居
るらしかつた。『診察が釣合はぬ
ではない、魚釣りが釣合はぬ、昨
日も魚から大分ツリを取られた。
然し醫者の藝者遊びは財布まで取

られる、そんな』と皮肉つたり、
『奥田義人は東京市長の時に夏は
蟬取りをやつたさうだ』と云つて
暗に自分を偉人に比し、凡人趣味
を解せずと其言外に意味を含ませ
て私を顧みたま。無口な父はニ
ヤリ／＼と笑ふのみ。相變らず私
の魚釣りは止まぬ。

尻からげで、海に入り石垣の穴
の中の小蝦を掬ひ出す時の興味は
參謀長が敵軍を包圍した時の快感
と大小の差こそあれ、其性質上
には相違はない、攻められた蝦が正
に後退して待ち設けられた籠の中
に入らんか、それとも前進して其
包圍より脱出せんかとの瀬戸際に
『先生!!急病人です、靴も羽織も
車夫が持參して來ました、直ぐに
往診して下さい』と向ふ岸が大聲
に喚く、其聲は到底休戦ラッパの
音と私の耳朶に轟かう筈がない。
斯様に好きな私の魚釣りは決し
て上手じゃない。魚の方からよき
パトロン御座んなれと歓迎をする
部類に屬する。又私は太公望の様
に天下を釣る式の名人じゃない。
魚釣りに行く度に得る物は疲労と
家内から小言を喰ふ位が落である

◆本阿彌先生

平田久雄

最近本阿彌某といふ自稱刀劍家が
鮮内を徘徊し、宗家だといふのを
笠に、滅茶／＼な鑑定をし、亂暴
極まる折紙などをつけてゐるとい
ふが、同じ本阿彌でもこの先生は
有名な明目で、東京などでは誰も
相手にしないのである。所が京城
の某氏などは、この先生からニセ
の水心子を、高價なネダンでつか
ませられ『君、これ位の尤物は京
城にはないんだぜ』は險々々々。

臺座の話

大 澤 勝

【三〇】

今度薬師寺へは此間八月末の暑い日の半日を利用して行つた、事新しく申す迄もなく薬師寺は奈良郊外の大軌西の京停留場に近くにある古寺である。此寺が日本美術史上に占める重要な地歩は、吾人の説明を待つ迄もなく明かである。

むし暑い日盛りの午後半ばくづれた築地のつきる所に美しい一種の旋律を持つ東塔を仰ぎ見た時はいつもながら何とも云へぬ穏かな氣持につままれてしまつた。フェノロサが始めて奈良朝藝術の秘奥の殿堂に參して、其美世界の驚異とさくつた時に、此寺の佛達を共に始めて見たと云ふ老人が案内に立つてくれて、先づ金堂に行つた。こゝにある薬師三尊は東院堂の聖觀音とならんで此寺を代表し且つ白鳳藝術を代表する物である。

此佛が如何に優秀なものであるかはどうも繪がなくては説明はし難いが、飛鳥時代の黎明期藝術に伴ふ稚拙にして稍生硬なる所を脱し、次に來るべき天平爛熟の時代を暗示する實に立派な作である。肌の色は故岡倉覺三氏が嘆美措く能はなかつたもので、所謂羽羽色をして居ても滴らん風情を有する。しかし時に私の注意をひいたのは其臺座である。此臺座の様式が珍奇にして且つギリシヤ文明の東漸を語る有力なものである事は已に周知の事である。

此所五六年前に來た時は八月の雨の相當に強い日であつた、其時の如何にも物寂びた一種の趣のあつた事は今も尙忘れ得ない。

薬師寺の佛の臺座すかし見る畫ほの暗き八月の雨
之は當時の臺座に對する私の印象であつた。だから其時は様式や模様を詳に見る事は勿論出來得べくもなかつた。従つて私のそれに關する智識と印象は寫眞を通しての物に過ぎなかつた。純白の大理石の壇上に安置せられた其臺座は千年の古びを黒き肌に見せて、グロテスクな形と表情を有する、魔人の蹲踞する姿が彫られて居る。そうして其周圍に特有なるアツシリアのホネーサツクル式葡萄の模様を有する。而して更に葱茭模様の中央に動物が刻まれて居る。

此日は老人の好意によつて金堂背面の扉が明けられた。以前二三度は唯小暗い中の中のみ見た其臺座は忽ち眩い白光のもとに照し出された、面白い魔人の姿が躍る様に目にせまつて來た、實は此隣間にオヤと思つた。
と云ふのは魔人の彫像の周圍の模様中央にある、動物の手法である。殊に背面の龜形の物である。(之は玄武青龍白虎朱雀の何れかに屬する物の様に思はれるが)實によく似て居る、平壤江西の古墳の壁畫其儘の手法である。(茲でも

一寸序に申し度いのは實は江西古墳に關する私の智識の極めて貧弱な事で、實物はまだ見て居ない、私は李主職の博物館の模寫を見て居るばかりであるが、しかしそれは極めて正確に且つ忠實に寫されてあるものと思つて居る。龜にまつはる蛇身を表はす線及び感じがよく之程に似得た物である、と思はれる程似て居る。古代朝鮮民族と日本民族との交渉等と云ふ事は古墳より出づる土器裝身具等が已に之を證して居るし又藝術的には百濟新羅と奈良朝藝術との間の密接なる關係のあつた事も又明かなる事實である。だから今更云爲するにも及ばないかも知れないが、しかし此畫見のがして終うには餘りに大きな相似である。

如何なる作者によつて此臺座が作られたかは不明である、而して臺のまきへ定かならぬ江西の壁畫が誰によつて描かれたかは素より知るよすがもない、しかも私の凡眼にさへうつるそれ程の相似がある、和辻哲郎氏は薬師三尊の作者が當時淨山に渡來した唐人或は百濟高麗人若くは其系統の者の手になつた物かと云つて居るが、なる程と思はれる、單なる手法の模倣と見るには餘りに偉大である。朝鮮藝術直接の移植であるかも知れない。
兎に角矢張り看過しがたい一の実事であると思ふ。

◆將棋指南所

平 田 久 雄

棋界の新鋭六段辻繁之助氏は、今度若草町一六三に、辻將棋教授所を開いた。月謝一ヶ月金一圓五十錢である。好棋家の御後援を望む尙御希望では出張指南もする。

己に周知の事である。

向御希望では出張指南もする。

本朝畫人異聞

山田新一

◆
今や日本美術院の常連にして邦畫界の新人たる井上白楊氏は、其の昔美術學校角力部選手にして、關東學生角力聯盟の副將たり。

即ち第一回東西對抗大會の時士儀に登れば、必ず控選手を顧みて曰はく。

『大阪の奴等士儀へ出ると、みんな足が震へてやがんだぜ』と關西選手聞きて怒髪天を衝き、猛烈なる突撃をなせば、君得意の叩込みにて軽く仕止む。五日間全勝。いさゝか、お人悪し。

◆
昨年歸朝、我國に於ける、聖畫界の第一人者、石河光哉君は學生時代よりして、信仰心厚く、内村鑑三氏崇拜者、一個の哲人なり。

或る時美學の時間、教授菅原教造氏、變態心理を説きて遂に婦人〇〇のことに及ぶ。

石河君憤然色をなし。

『先生、婦人が、如何にしてしか爲すを得んや、婦人自體の何處によりて……到底吾等は想像不能なり。希くば婦人を辱かしむるなかれ』と教授説明に窮して、苦笑に紛らさんとする共、眞面目に追究して止まず。

教室内喧嘩鳴りも止まず、即ち一大哄笑裡に授業終りぬ。

◆風のたより

吉田 莊一

赤十字の大橋次郎さん、野球が面白くてたまらず、閑さへあれば、令息をつかまへて、最新野球學につき勉強す、令息うるさがつて曰く『ヘン、面白くもないぜ、おやぢと来ては、一度や二度では腹に入らんのだからな』

品を購ひ、淑女令嬢環視の前にて之を穿ち、舊品は之を脱し、番頭に示して曰く『捨てるは惜し、君に提供せん』と、悠然として去る。三造氏令夫人は故大久保將軍の令嬢にして三造氏學生の時尾行數回、有名なる直談判によりて結婚せりと傳へらるれども、萬一の誤傳ならんことを懼れ、茲に詳述を避く。

◆
日本美術院同人、春陽會々石井鶴三氏は又、『大菩薩峠』挿畫の筆者にして、現代挿畫界に一大革命を成せるの人、余にとりても亦敬愛惜く能はざるの好先輩なり氏亦現代を超越せる獨自性の所有者なり。少しく現代を超越し過ぎたるの感なきにしもあらざれば、悪青年共『鶴仙』と呼ぶあれど、氏又敢て意に介せざるもの如し。

鶴三氏凡そ十年の昔、まだ獨身にして、日暮里は、某小工場の廢屋を借り、以て畫室となし。又自製の寢臺ビール箱によりて造れるものにて起居し、日夜勵精す。或深夜、此の特製寢臺にして、ものゝ氣によりて夢より醒むれば覆面の盜賊なり。

鶴三氏矢庭に寢臺上四ツ這ひとなり、大聲叱咤して呼ぶ。『ワンワン〜』と盜賊、駭きに駭きて逃ぐ。

◆
總督府新廳舎壁畫の作者和田三造氏近頃稀に見るの快男兒なり。君東京美術學校學生の時、好んで學則を守らず無届缺席して、伊豆大島に遊ぶこと半歳、彩筆を走らすこと縱横、遂に快心の大作を獲たり。

歸校教官室に至りて批評を乞ふ教授等大喝して曰はく。『よくも無届にして半歳の長きを休みたるぞ。焉ぞ批評の要あらんや』と。三造氏亦敢て強ふる處なく微笑して退る。

數月の後文部省美術展覽會開かる。東部の新聞紙筆を揃へて云ふ。『天才兒和田三造君の驚異的力作……』と。三造氏大島の老漁夫をモデルとせる半年、心血を凝げるの力作『南風』は、二等賞を獲て首席となる教授某々氏等皆漸くにして三等賞を得るのみ。

三造氏再び教官室を訪ねて曰く『余今日より教授たらん、君等よく缺席することなくして學べよ』と。

◆
教授等默然たるのみ。三造氏の學生時代又赤繩を愛好して止まず。その汚損するや決して洗ふことなし。三越に至りて新

夏日餘景

中島長作

駄馬

眞夏の暑い晝下り物見高い都大路に黒山の様な人集りに何事なるやと人間持前の彌次馬性と好奇心に咬られ人垣越にのぞき込むと駄馬が横様に臥して苦んで居る。

其脇には山程に重さうな石材を積んだ荷馬車が投出されて居る。

炎天の下生とし生ける者が食はんが爲めの労働に腦まされ遂に病に倒れ身體の自由をさへも失つて居るのだ。私は唯何ともなしに悲しい様な可愛想な様な氣分に變はれて来た。馬の苦痛はますます募つて来る。蓄生の悲しさ苦痛に堪へかねて自分の頭を自分から側の石に打ち付け打ち付けして居る。

其頭の傷からはどす黒い血が流れて居る。馬車挽きの男は色を失つて近所から水道の水を持つて来た。其の水桶の中に頭を突き込んでやつても馬は水を呑まんとせぬ。可愛想に水を呑む勇氣もないらしい。彼は課せられた過重の労働と炎暑の爲めにさいなまれて暗い死の斷末魔に近づいて居る。

馬は少し許りの間隔を置いて苦痛に身體を微動させて居る。見て居る内に其微動も少くなつて来た。私はもう見て居る元氣も失せて顔を背けた。

馬車挽きの男の顔にも一抹の悲しい表情が浮んで居る。其れは自分の飼ひ馴した愛馬に對する哀別

の涙か、其れとも自分の生活の粗たる馬を失ひ明日から迫り来る生活の脅威におびへて居るのか、私には解せられない。私は泌々動物愛護と云ふ事を考へさせられた。

投身者

私は眞夏の夜下關に汽車を乗り捨て、午後の關釜聯絡船の客となさまじく岸壁を離れた。生來船のきらいな私でも此海上七十里の航海はいつも厭だと思つた事はない。其れは關門の風光があるからだ。船は本土を離れてゆるやかに海波を分けて進む。

左右に下關關司小倉等の夜景を眺める美しさ、天の星の様な兩岸して居る。まるで繪に見る龍宮だ一幅の名畫だ。あかす眺めて居ると思は夢の中を走る。ふと吾に還ると美しかりし火は曉天の星の様に消へて行く。今は全く龍宮は水中に消へ失せた。時計を出して見ると二時前だ。

四方は寂として唯波を分けて進む船のエンジンの音の外何物もない。海は油を流した様に靜かにして中天には絃月が懸つて青白い光を海面に投げて居る。

彼方の甲板には寢はぐれた人の一團が何か世間漸にふけつて居る。私は獨り夢心持になつて無限の月光を仰ぎ、海に寫る其光の美

しさを讀美して居た。

其時突然靜寂を破つて海上に唯ならぬ音がした。私は其物音に吾に還つた。向ふに居た人達が投身者だと呼んだ。私の居た甲板の二間位先から或若い男が投身自殺した。集つた人達は其場所から何物かを求める様に海上を見詰めた。

併し影だも見へない。船は速力を平常に復して小波を立てて進む。

淡い月光も青黒い海の水も何事も知らぬ顔に以前の儘だつた。私は自殺者の名も知らない、顔も知らない、其自殺した理由も知らな、併し人生の悲劇を目のあたり見せられた私は一種の悲哀を感じた。

其夜は若き薄幸なる自殺者を思ふて一睡もしなかつた。

夏供養

八月二十一日は若くして死んだ姉の十三年忌に當る。

佛壇を清掃して故人の好きだつた菓物等を供へ、親類四五人集まつて型の如く讀經してもらう。

死んだ姉は大の佛教信者で其最後の模様等も立派な修業を積んだ名僧知識もかくやと思ふばかり大悟徹底せるもので宗教的に見て有意義だつた。生來無精神な自分等は時々其光景を思ひ出して恥しく感ずる。法事だとか知人の葬式だとかの佛供養に寺参りした時には思はずして人生と云ふものを考へさせられる。朝に生の喜悅を味ぶ者が早夕べには寂滅の悲哀を見ざるべからざる人生の常である。この無情人生に處するの道は安心立命の佛の道に歸するにありとの坊さんの説教に其場限りであるかも知れぬが無上の有難味を感じるのである。

分の飼ひ馴した愛馬に對する哀別の月光を仰ぎ、海に寫る其光の美

たわごと

佐藤七太郎

蜂

五十年も昔の話だ、自由黨を評して新しき保守黨だ、と變な奴が云ふた。暖かい東南の風が吹いて堅氷の如く凝り固まつてゐた自由黨は、だん／＼融けて小さくなつた、水を凝視めて居た連中は、アラおかしいな、と思ふた。フト向ふを見たら、一面の綠草、初夏の景色になつてゐた、綠草の中には喬木の芽生えもまちつて居るらしい。

衣換

『禁斷の木の實を持つて來てはいけない!!』
ソナナ事を云ふても、味を覺えた連中は、中々やめませんよ。
『雨戸をあけちやいけない!! まだゆつくり寝るんだ』
モウ日がカン／＼照つて居ますよ。
『なんだ其さまは? だらしのない風をして』
だらしが無いのは、夜が明けたからですよ。

癡亂れ姿のだらしなさは、朝めに喰べたリンゴのせいではない

やらだ、朝めし前には、化粧をして着物を着換へることだ。
蛇を殺し、リンゴをなくしてもエデンは又歸らない、其時々の粧をこらすことだ。

夫婦の間答

『アナタ!』
『ウ!』
『DサンやSサンの家は、キレイよ、わたし初めて御伺ひして、ビックリしましたワ』
『フウイン』
『家は小さいんですがネ、ソレハ／＼よく整頓して、ホントウに氣持ちがよいワ、マゝ理想的と云ふんでせうネー……ウチでもあんな風にしませうよ』
『しかしウチじや、到底、そんな風には出来まいナ』
『ソナナ事はないワヨ!! しませうヨ』
『オレもそふしたいのは山々だよ、しかしウチじや出来ない方により多くの可能性を有することを遺憾とするネ』
『ソナナ事は、ありませんよ、大に協力一致して理想の實現をやらじやありませんか』

『ソレじや、これから、オレの云ふ事をきくかい?』

『きくま共……何でも』

『何でもきく?』

『ですから、アナタも、それつもりで、協力してやりませうヨ』

『ソナナラネ、ウー、お前はネウー、これから子供を産んじやいけないぜ!!』

『エツ? ソレヤ、アナタ無理ヨ出来な相談ダワ』

『ソナナラ、ウチではDサンやSサンの様な、家庭は、出来ないサ』

『ナゼですか?』

『ウチは、古い家の上に、人口過剰だからナ』

『……………』

◆大學たより

吉田 莊一

○京城帝大も、草創の折柄とて科目に依ると、先生三人、生徒二名といふやうな奇現象を呈してゐる。

○例の哲學科などは、この實例に洩れず、生徒はたつた二名である。ところが、同科を受持つてゐる阿部能成教授は、獨り新進氣鋭研究力燃ゆるが如き人物であるのみならず、博く文藝に通達し、その講義は、趣味津々聴くものをして、恍惚たらしむるの概がある。

そこで大に人氣を博し、氏の講座は、いつも何十といふ生徒が押名し懸け、水の如く静まり返つて、熱心に聴講してゐる。

○大谷勝眞教授の講義も、引例豊富、無駄がなくて、しかも人を引つけるといふので、生徒の信望はタイしたものらしい。

生死の岐路 (上)

井 上 要 二

【 〇 〇 】

余は死の問題と言ふ題にて雜筆社につまらぬ事を記し寄せた處本年四月號に掲載せられた。この稿はそれに續くものとして寄せたものである。

死に瀕した人、其の人は殆んど死を待たれるばかりの者が、不可思議なる事より生命をとりとめて死より遁れたる例は随分多いことである。其の事實を見て、余は人の生命は天より與へられたる定命であつて、決して人の支配し得べきものでないと思ふ信念を年を逐ふて強からしむるのである。

重態に陥りたる腸窒扶斯患者が發熱したためにや、生水を乞ふこと切なるも、生水を飲ましむれば病症を益々危からしむる虞ありとて與へられざりし者が、患者自ら自己の其の要求に打勝つ能はず生水を飲みたるために死することあるも、患者自身は今や其の生水を飲まざれば咽喉渇し直ちに死に到る如く苦痛を感じるより、看護人の隙を窺ひ、幸に枕邊に近く生水あるを發見し、思ふ儘に多量の生水を飲みたりしに、其の時より熱度下降し漸次快くなりたりとか又同じく同病症の患者にして死を宣告せられたる者が、死に際しての要求として果物を與へられ、其の果物を食したるためか、或は他の原因か、兎に角果物を食してよ

り漸次快方に向ふ事となりたりと又同じく腸窒扶斯患者なるが、是は前二例とは大に事情の異なりたる例にして、いと面白き話なり患者は余の親友にして確にそを信仰して生死の岐路は危機一髪の間

に在ることを信じて余に語りたるものなり。恰も病症重態にして生命の危篤に陥りたる夜、二三の友人集會して病人の爲に死後の處置など協議すると同時に、或者は病床に侍して生命の終焉を告ぐるを待ちつゝありたる夜の事なり、患者は夢幻の裡に次の如きものを見たりと。佛菩薩が多數居並ぶかと思ふと、一方には閻魔大王の如きあり、其の側には赤鬼、青鬼の如き多數の從臣らしき者整列し居り其の前に在る五色の焰の上には目映き程美しく磨き上げられたる大釜に熱湯の沸騰するあり。一鬼曰くこの大釜の湯は神の靈藥なり、汝に之れを與ふべし、汝之れを飲めば汝の病は忽ち全癒すべしと。然るに患者は之れを飲むを肯んぜず、如何程強ひらるゝも遂に飲まざりき。患者は病重態に陥りてよりは藥湯を嫌ひ、如何に之れを勧むるも決して嚥下せず、頑固に湯藥を拒絶し、たとひ生命を保つ能はざるも藥は嫌なり飲まずと頑張りたる男なり。この夢幻の表現せしは患者が藥を嫌ひたる結果が、平素の俗説により耳にしたること

、聯關して生じたるものなるべしと信せらるゝも、友人の語る所に依れば其の時に其の藥を飲みて病を助からんとしたらんか、其の時が生命の終焉なりしに相違なかるべし、其の言を肯かず藥を飲まざりしことが彼の生命の存することとなりたるならんと信じ居れり。不可思議にも其危篤を傳へられたる夜、其の夢幻の現はれたる夜を越へてより、病は一日／＼と輕快に赴きたり。

右の三例中前二例は病症の異變の原因とも考へらるゝものが略々同様なるも、後の一例は大に其の趣を異にせり。乍併要するに三例共に純理論上より考ふる時は、直に傾聴すべき價値なきものなるべきも、死の危機を脱したる場合に如上の事實を見たるは、人生の死生の別るゝ所には一種靈妙なる作用あるが如く考へらるゝなり。

次の事實は余自身の體驗にして眞に生死は不可思議なる時(と言はんか場合と言はんか)に起る如く考へらる。

回顧すれば今より六年前即ち大正十年七月四日の事である。この日は余には最も生涯の記憶として忘るゝ能はざる日である。この年六月中旬、背部に小なる腫物を生じ其の痛みを感じることに烈しく次第に背部全體に不能堪疼痛を感じるに到れり。然れども時機來れば治癒すべしと考へ、水を以て局部の冷却に努めたりしが、益々狀勢險惡に進みつゝあるに際し、友人の懇切なる勧誘に接し、植村博士(當時朝鮮總督府醫院外科部長)の診察を乞ふこととせり。恰も七月二日(土曜日)朝診察を受けたりに、病症は甚だ重態なるが如く診斷せられ、切開手術を施すの

外他に手段なかるべし、特に重態

の原因か、兎に角果物を食してよ
平素の作詩により耳にしたる

黒き蝶

長安寺の落ちたる橋の邊にて

徳野眞士

いかほどの雨にもあらず思ひしが古りに
し橋はつひに落ちたり
くち果てし木け力なしみづからをささえ
がたくて橋は落ちたり
落ちはてし橋杭の上にさびしくも羽根を
いためし蝶はとまれり
今われの腰をかけむと思ふ石に片羽根破
れし黒き蝶あり
くち橋の袂に咲ける紅萩は昨日の如く風
にそよげり
韓乙女白き衣洗ふかたはらの石に動かぬ
男を見たり(一五、八月)

近詠

杉原斐出女

たま／＼の琴の音うとし汗にじむ
水まいて風鈴の音をきながら
日に背きいそく薄着の裾もつれ
子をすかす心強めて汗ふきぬ
秋涼し灯のかさたゝく夜の虫
夜見世散歩
灯の下の秋草に我まねかれつ
野球戦の日
秋空を凱歌の一響鳩飛びぬ
棚の上に集つてくる拾遺扇

外他に手段なかるべし、特に重態に陥れるを以て寸時も早く切開するを要するも、其の日は土曜日に當り、翌日は日曜日なるを以て月曜日まで待たざる可らずとの事に、病室の都合をつけられ、日曜日午後四時頃、寢台車に乗せられ西小門町より総督府病院まで運搬せられたり。この時こそ屠所に導かるゝ羊も斯くや感ずるならんと言語に發表する能はざる不愉快なる感想に打れたり(以下次號)

◆見聞記入帳

吉田 莊 一

○橋川局長は、風流の士であるあの忙しい、職務の中で、少しの閑でもあると、たとへば食後の休憩時など、何をいぢつてゐるのかと、思ふと、鉛筆を管めく、即興の絶句を作るのである。而かもそれが脱然として、一點の俗調をとどめないなどは、確に濶信界稀有の一人材である。

○お職掌柄とはいへ、事務局的薄田事務官、原稿を書くのは、實に手に入つたものだ。想さへまると、一氣呵成、些の滯滞する風がない。而かもその筆蹟を見る時、どうしても十年以上新聞社で飯を食つたものゝ筆蹟だ。文句に記者特徴がたつぷりだ。いつのまに、どこであんな修業を?、?
○山元さんのあとを繼いで、京單庶務課長となつた森秀雄さん、文藝通であつて、而かも仲々の麗筆家だと聞いてゐる。麗筆家といへば、鮮銀の漣川氏、ちよいく旅行記などを、銀行の雑誌に書いてゐるが、皮肉もあれば諷刺もあり、蓋し稀に見る名筆家の一人。

あたま

東京中島司

【B.K.】

の氣を注人して欲しいものだ。
内地人は朝鮮を殖民地扱ひにして、
フ、ンと木で鼻をくつつた態度
である。それもよからう、だが若
しも、他日本を輝かす光が朝鮮
からさして来た時は？。

朝鮮よ、朝鮮の人々よ、自ら卑
下することなかれ。日本の清明境
は朝鮮であることの自覺と自負心
を強めるがよい。神經過敏はまっ
ぴらだ。小柄巧なあたまはまつび
らだ、大きい、ゆとりのある。し
つかりしたあたまよ、朝鮮の大氣
の中からどしどし出てくれ。(大
正十五年九月九日夜品川にて)

うわさ雑誌

平田久雄

○ 総督府の近藤圖書課長は、大分
煙草道樂らしく見受ける。

○ その卓子の上を見ると、あらゆる
種類の煙草を備へつけ、あの激
忙の中で、一味の悠然味を樂んで
ゐるらしい。

○ それに煙草好きの證據は、何と
かいふつめ煙草を、書類を見る傍
頗る器用な手付でくるくくと丸め
マツチをすつて口へ持つて行く要
領！頗る非常に手に入つたものだ

○ 縣内の新聞、通信、雑誌のみな
らず、内地のあらゆる刊行物に目
を通す、それに映畫檢閲といふも
う一ツのお役目がある。だからど
んなに早くても、退職は五時、六
時。前の田中課長と一緒に、話好
きで世話好きで、いつ行つても千
客萬來。

秋風がたつて来た。虫の音がし
げくなつた。暑さのあいだ重くる
しかつたあたまも、これからだん
だん軽くなるだらう。ことしは私
にとつて苦しい夏であつた。

東京をけなすのではないが、六
月からこのかたの東京は、まつた
く苦の世界であつた。生れてまだ
こんないやな夏にめぐりあつたこ
とはない。元來私は明るい痛快な
夏を好むが、それは朝鮮のこと
だ。東京の夏はむしろ咀はしい。

いやにしめつぽくて、脂汗のべ
とつく、四六時中むしむして、
爽快味の乏しい東京の夏は、これ
までは朝冷暮涼、男性的なまつば
りとした朝鮮の夏を愛して来たこ
ころの私には、堪へがたい不愉快
のシーズンであつた。

こんな氣候に責めさいなまれて
ると、何だかあたまがぼんやり
して、物ごとを考へてもよい智慧
が出ず、筆を執つても想かまとも
らない。それでなくとも大都會の
激しい營みの渦巻に呑みこまれて
、餘裕のない氣の休まらない生
活をしてみると、人間のあたまは
自然とわるくなるやうな心地がす
るのに、ましてこのいやな陰性な
夏に苦しまされては、地獄に落ち
たも同然、地獄に居てよいあたま
を保つことはできない。

夏になつてあたまの悪くなる證
據には、愚劣な事件が新聞を賑す

ことのさらに多いのもわかる。
氣の毒なは都會人だ、東京人だ。

首府だお隣元だと威張つても、そ
の生活は常住座臥おびやかされ通
しだ。右を見ても左を見ても、前
もうしろも、せかせかといらだつ
た人たちが群がつかつてゐる。神經衰
弱の都會人、のんびりとした大國
民的の襟度の見出されない日本の
首都よ。

何と言つてもあたまを休める餘
裕の多いのは我が朝鮮だ。空が明
るく、氣が澄んで、人がこせつか
ない朝鮮は、たとひ現代文化にお
くれてゐるにしても、民衆が悠々
と星を眺めて生きて行ける丈け又
となし有りがたい所だ、どうぞ朝
鮮よ、せちがらくならずに、その
まゝであてくれ、薄つべらな物質
文明にかぶれないでくれ、いやみ
たつぶりの洋化はまつびらだ。

あの限りなく高い蒼空と、あの
澄み切つた大氣が、どんなに人間
のあたまを、すつきりと軽くさせ
ることぞ。心がのんびりと、氣が
すがすがしく、あたまかはずきり
となる朝鮮からこそ、うんとよい
あたまの持ちぬしが輩出して欲し
いものだ。

日本はこれからいくらでもよい
あたまを必要とする。あらゆる方
面に濁つたあたまが支配しつゝあ
る日本に對して、本當によいあた
まが朝鮮で養はれて、到る處清涼

夏になつてあたまの悪くなるを
る日本に對して、本質はよいが
まか朝鮮で養はれて、到る處清涼

客星來。

紅一點

廣江澤次郎

逐號京城雜筆大繁昌、松本御大を始め綺羅星の如く居並ぶ御同様名譽記者三百五十有餘名光榮至極に存し奉る、我京城雜筆は大陸筆壇の絢爛たる華であり、成功せる文化政治の一表現とも觀てよい、全篇之れ詩の國！全篇之れ歌の離れ嶋にも比すべく、又特種の友情の漲れる斯の如き特殊雜誌が、朝鮮、滿洲、母國を通じ何處にかある？。自畫自贊も此邊で一服し針路一轉！。

慾を云へば雜筆にも異性の寄稿家が毎號二三人あつてほしい、萬綠叢中紅一點、砂漠のオーシーズは全體を一層美化する。換言せば雜筆にモウ少し軟か味かほしい、夏の夕べト風呂浴び、浴衣がけで、大廣間に大の字なりに寝そべつた様な氣分に浸る處に、雜筆の本領があるのだから！之れに凄艶な軟か味、キリリとした情調を漂はしたい。

春風胎蕩、百花爛漫至極結構！毀けるが如き炎天と終日根競べをし勝ち誇つて花咲く日廻り草も賞すべし、楚々風にも堪へぬ風情の秋の野菊や萩桔梗亦好材料なるべし、併し雨に濡るゝアノいぢらしき海棠や、早春寒風を衝いて甍を破る紅梅も、雜筆を彩る花であつて欲しい、情味津々、餘韻蕩々、近松張りが彷彿たらしめたい。

希望をモ少し露骨に端的にいへば、更け行く夜、森閑たる静寂を破り恍惚たらしむる門附新内の三味の韻律と、振い附く様な洗練された美音に思はず聴き惚れ、女性に紅涙を絞らせ、男性にも特種のインスピレーションを與ふる様な場面、情調もあつて欲しいと思ふ、而して讀者を飽かせず一層グン々々引着ける様な魅力を有したいと存する。

斯様な口調で希望の程を申上げるとサも私が粹人らしいが、之れが亦入念な野暮天！ウブな可愛い奴でゴ坐る。随つて比喩の拙劣、叙情の不十分な點は幾重にもゴ容赦、折角ゴ指導の程伏して願上奉る焉（京城に於て九、一〇日）

◆初心の方へ

八段 大崎 熊雄

○『どうしたら早く將棋が上達するだらう』といふ質問を、私はよく浴せられる。

○夫に對して私はきまつて『せい／＼定跡を研究なさい。がそれにもまして大切なのは精神だ』と紋切型の答をする。月並だが將棋の秘訣はこの外にはない。

○豪膽な人は、亂暴な將棋を指すといふ。が、それは嘘だ。豪膽な人ほど亂暴な將棋は指さない。

○亂暴な手は、ヂツと腹にもちこたへられなくなつた時の、苦しまぎれのがきなのだ。

○豪膽をもつて聽えた天野宗歩先生は決して亂暴な將棋は指さなかつた。

○駒落の將棋は、互角の勢だ。駒を落されたからと言つて、自分の方が劣勢だと思ふのは、とんだ間違ひだ。駒割で双方の勢力は均整された譯なのだから。

○戦はざる前に氣折れして、どうして勝負に勝てよう。

○對局中、劣勢になつたからとて、決して悲觀してはならない。全力を盡して、ヂツトもちこたえなくてはならぬ。その中に、必ず局面轉換の機は到來する。

○これに反して、自分の棋勢のよくなつた時は、最も危険なのだ。敵はあらゆる方策を回らして、自分の隙をうかがつてゐるから。

○將棋は、勝負を争ふ競技だ。

○が、眞實の將棋の味は駒捌きにあるのだ、自分の思ふ存分に駒がさばけた折の嬉しさ。悦ばしきものがある。○將棋にあつては、勝負は第二

記念の一腰

土居寛申

私の親族に平井六衛門といふ隠居があつた。今から三十年も昔、私の十三の頃既に七十に迫り老人であつた様に記憶する、別に用事もない體であるので、江戸から鳥銃を買ひ求めて、チョン髷頭にあかざの杖をつき、其鳥銃をかんいで野山に出かける姿をよく見受けた。隠居の宅は丁度私の家と向ひ合つて居るので、私は老體が鳥銃をかつぐ窮屈な姿を朝夕見るのが氣の毒になつて、鳥銃かつぎの勞に服せんことを申出でた、勿論隠居は大喜びで應じて呉れた、それから一冬の間暇さへあれば鳥銃の隨行、素より老體のことで獲物が澤山ある譯ではない、山鳩やツグミの數羽のお土産が大手柄であつた、其翌年も同じ事を繰り返した、そして三年目であつたと思ふ、何分年老つて鳥銃も骨が折れるから見合せる、此れ迄鳥銃かつぎの勞に對して粗木ではあるが若い時分から佩き古したものであるから、記念に贈るといふて大小刀一腰を呉れた、見れば拵へも粗末ではあるし、又小供に何の役にも立たないので、其まゝ仕舞つて置いた、隠居は其翌年の元旦眠るが如く大往生を遂げた。

い時分江戸に勤番して居つた或日市中を歩いて居つたら田舎侍と見て、無頼漢の一青年が故意に襦の上で衝き當つて來た、無禮者手は見せぬぞと刀の柄に手をかけたがこんなことで騒ぎを起すも馬鹿げて居り、且つは人を斬ることが大厭ひ、何とかならぬものかと思案中、後から元氣のよさうな薩州侍が朱鞘の大刀に反りを打たせ、高下駄の音響々とやつて來る、そこで若者にいらた、あの侍には衝き當れまいと、わかい江戸ッ兒は「何をッ」とばかり駈け出して薩州侍にドンとやつた、同時にバサリ、六衛門はニツコリ涼しい顔をして行き過ぎたといふ一の逸話は眞偽の程は分らぬが人々の興味を惹いた、元來平井家は藩主能見松平家の三河以來客臣として代々劍道指南の家柄であつた、六衛門も師範であつた、無頼の一青年を手討にする位は何の手間はいらぬが安りに人を斬ることを好まぬことや、其の際の奇智甚だ愛すべきものがあるので、私はかすかに記憶に残る老人に非常になつかしきを持つ様になり、十數年前記念に呉れた刀のことを考へ出して、久しぶりに戸棚から引張り出し、其當時の隠居に會ふやうな心持で、先づ大刀を抜いた、刀身二尺三寸、身巾も重ねも反りも頃合の亂刀句作の石州物と見ゆる無銘の一刀、

【四八】

上作とは見えぬが、如何にも實用に適した品物、それに不思議なことは刃の表裏一分程癩刃を合はせてあることである、不慮差として常に癩刃を合はせて居つたものか又は何かの必要があつて特に癩刃を合はせたまゝになつて居つたものか、其邊のことは今に一向分らぬ、次に小刀の鞘を拂つて見た、此はしつかりした高田古刀の中直刀物、此も上作ではないが、實用上此上もないもの、名刀を澤山持つて居る家柄でありながら、なぜこんなヤクザなものを呉れたかか一時は恨んで見たこともあつたがよく考へて見ると名より實をとれとの教訓であつたかと前の逸話と思ひ比べて、非常に嬉しくなつた私は早速研ぎ直して今でも其儘保存して居る、私の貧しい藏刀の中でも、品位は中以下ではあるが、別の意味から見ても最も貴い最もなつかしい一腰となつて居る。

◆紅一點の話

吉田 莊一

朝新の紫影女史こと吉村幹子さんは、髯だらけの男子の間に交つて盛んに活動してゐるので、到る處評判になつてゐる。

○ 處が、權藤副社長の證明する處に依ると、仲々意思の鞏固な、見識の非凡な婦人だから、どんな誘惑にも打勝つて、練々として餘裕があるとの話である。

○ 肩を振つて、堂々と闊歩するのが女史の特徴で、東京では「肩振り女史」と難有い通稱を貰つてゐたとは、これは女史の自家告白である。

の話を開始した、其れは其體居の若、
作の不物と見、其れは其體居の若、

山登り

川村五峰

叶はず、朝鮮へやつて来たのは、
これも残念の一つである。

◇
大正十年の八月、吉田口から富士に登った、而も少年團の子供たちを二十人ほど連れて、八合目で天候急變、風雨にあひ頂上を斷念して、否、無理に少年たちに斷念させて私と今一人の引率者だけが寒さにふるえながら淺間神社に參詣して、甘酒を頂いて御殿場口へ下山した。大勢の子供を連れての山登りは、非常にいゝこゝろみであつた。私は山登りの經驗としては、全くお恥かしいくらゐで話にならない。

◇
の青年と北漢山登りを企てた所、生憎の雨天で果しえなかつた。一昨年も四五人の若い人達と一緒に登つたが、天候激變大暴風になつたので、夕刻まで、文殊庵に籠城して、引つ返し、頂上まで登らなかつたことを残念に思つてゐる。

◇
大正十二年の夏、私は朝鮮關係の史蹟を探訪する目的で、富山から新潟方面へ出かけ、彌彦山に登つた。彌彦は「北國のお伊勢さま」と云はれるくらゐ、地方民の尊信が篤く、社殿も立派なら、背景の山も宜に好い。神代に所謂「しの國」開拓の中心をなした土地であるが、頂上の景色はまた何とも云へない。歌にある波上四十九里の佐渡ヶ島を脚下に、日本海を展望される。

◇
朝鮮少なくとも京城附近で何うもころあひな山のないのは残念に思ふ。第一朝鮮の山は、何れも花崗岩のゴロ石ばかりで、登るのに骨が折れる。併し山がないのではなく、餘り内地人も朝鮮人も山登りをやらならしい。何故だらうか。今年日本アルプスなど、各地の男女學生團體の登山が大變なものだと、聞かさへ胸がぞくぞくするやうな氣もちがする。

◇
山岳會でもつくつて、盛んに山登り熱を扇吹して貰ひたい。いや第一内地人もつと〜元氣を養はなくちや駄目だ。山登り熱が盛んになれば、自から新しい、ころ合ひの山が見られるやうにならう。せめて北漢南漢山くらゐは、女子供でも下駄はきで登れるやうに、道をつけてもらいたいのだ。

◇
朝鮮の山に、神様も佛様——信仰の篤い——もないのが、山登りのためには妙なからず、手頼りなさを感ぜしめるやうに思ふ。

◇
東京の自宅から子供の寫眞が届いた、開いて見ると、それは去五月中旬——私が歸鮮出發の數日前今尋常五年に通學してゐる長女のお相伴をして武州高尾山に登つた時の記念撮影であつて、約四十五人ばかりの一級タダの少女たちが、あの山土本堂下の廣場で、蒼鬱たる大森林を背景にして撮つたもので、如何にも無邪氣で皆可憐らしくうつつてゐる。お相伴の私もそのお仲間入をしてゐることは申すまでもないが、途中でへたく〜になつてやつと本堂まで辿りつき、奥の院以上を思ひ止つたデブさんの女先生も入つてゐる、そして元氣な、校長先生が、先頭に立つて「ヨイサ〜」と掛聲勇ましく、二百餘名の生徒等を激勵しながら、駆け登つた雄姿が想ひ出されてなつかしい。

◇
高尾山は、東京から約二時間程で、山の高サと、登道道の勾配は相當困難ではあるけれども、近來路面も可也好くなほしたので、女子供が日歸りに登るのには眺へ向きであり、頂上の見晴し臺は關東十三州を一眸の裡に收められるといはれ、昨今案條鐵道の敷設を急いでゐる。

◇
去る七月の第一日曜日に、一人

◇
近江の大津に住んでゐた時分、坂本から比叡山に登つたことがある。山王の登山口などなく、好い。古松老杉の茂りあつた間から丹塗りの根本中堂の伽藍を眺めた景色は、一種云はうやうなき莊嚴さに打たれたことであつた。ところが昨年の冬『京都からケープルカーが架設され、七八分間で頂上まで登られるやうになつたから、是非一度やつて来い』と云つて、山上の學院にゐる友人の坊さんから案内を受けながら、つひそれも

最新皮肉辭典

今村 鞆

【 501 】

皮肉な悪戯

○「ブラトニツクラブ」……雑魚

寝の親類、上品な夢精

○「インテリゲンチヤ」……智識

に食傷せる患者、上出来の論語

讀みの論語知らず

○「モダンガール」……ノラ三代

の後裔、異性戦の斥候

○「モダンラヤチ」……此の文を

書いた男のよふな人間

○「XXXXX」……、、、、、

○「△△△△」……、、、、、

、、、、、

◆張大人の事

吉田 莊 一

○この間、或る宴會の席上で、

丸ぼちやの、眼の可愛い、或る若い

藝者が、藤村忠助氏を捉まへて

「旦那は、ほんとに、そっくりだ

わ、なつかしいことね」と、イキ

ナリ握手するので、藤村さんスツ

カリ面喰って、だぢ〜の態。

○屹度、我輩の面貌が、彼の女

の情人か何んかに似てゐるんだら

ろと、悪い氣はしない。「オイい

きなり何うしたんだ」と訊くと、

「私ね、奉天の老松に出てゐたの

よ、旦那そっくりだわ」「誰れに

似るといふんかね」「張大人

よ」「張大人つて誰だね」「あら

知らないこと、張作霖將軍」「藤

村氏、あいた口の態からざること

半時間。

○その藤村氏は、アレで仲を持

てるといふ評判。ほんとかねと聞

いて見ると、二三人聲を揃へて、

「え、アレで、仲々實意がある

わ」

○「宗教」……精神薄弱者が、服

用する鐵の生へた羅羅樂

○「道徳」……利く人には利き過

ぎて、副作用を起し、利かぬ人

には利かな過ぎて、何の効もな

い家庭樂

○「法律」……九分九厘九毛九、

九、九……迄は一寸で無いと云

ふ處世數學を書いたもの、岸か

ら大海へ引張つた繩張……浅い

所文へは確實に行はる

○「新聞」……「廣告料」と云ふ

惡酒に酔ふた、饒舌家のホコリ

タタキの坐敷藝

○「殺人」……杓子と條規とを振

廻して、十二行野紙の中に立籠

つて居る人、入目に立たぬサボ

タージユの常習慢性病者

○「判任官」……足利時代の國語

文を神妙に、何々……候條と迄

書いて一息仕て居る人

○「資本主義」……偶然大きな魚

を釣つた同志が申合せ、其よき

釣場所を何時迄も動かぬ……と

云ふよふな事柄、牛馬を飼つて

儲けたることを人間に應用した

までのほなし

○「資本家」……資本と云ふ萬年

シンソウの養女を妾にやり左團

扇不暮して居る人達

○「社會主義」……不平等、嫉妬

を、弱者が、千思萬考して、鍊

へて双物にしたもの

○「共產主義」……鐵引きで、財

産を輪姦しよう……云ふ考へ

方

○「帝國主義」……國と云ふ子供

が「お山の大将俺れ一人り」と

云つて居ること

○「失業者」……登山が出来ず、

麓に溜つて居る、心臓の弱い人

の群れ

○「詩人」……自己は、紫水晶の

如き心臓を持ってりと、妄想して

居る人、空想の霧の中で、文字

の用品を使つて居る人

○「讀者」……世の中で貞操の價

値を重んずる第一人者

○「才媛淑女」……金持や大官の

娘の結婚前の別名

○「戀愛」……花粉の虹の幻覺……

青春の眼に映する

○「結婚」……自己を賭けた人生

の賭博、祕事に敵肅味を付けた

る公表

○「糟糠の妻」……唐のコトコ具

きことを語源とした言葉

○「カツフェー」……キツスの前

迄を限界とした氣分を味ふ所、

賣る所

○「直接行動」……能率主義の體

體、簡單の尊重者がする仕事

○「科學者」……萬有の用品の種

を骨を折つて見付出し素人に教

へて喜ぶ物數奇の人

○「貨幣」……無神論者に對する

○石段を上がれば金剛山長安寺

長安寺村雜筆

長安寺ホテル

伊藤龍

○金剛景情美の絶對を環境とする長安寺村は、輝かしい平和な村である。

○金剛靈場の地である

○長安寺村に入るの最初の橋梁を向仙橋と謂ふ。

○此處、松樹林一帯の地である樹間を路が匍ふて居る。左側樹々交々の隙間を透して溪流の澄々たる聲を聞く。

○路傍に秋の七草が亂れ咲いて居る。

○長安寺村で、隨一の逍遙の地である。

○鐵道局では其樹間にテニスコート場を設けた。金剛連峰の頂から吹き来る涼風は樹上を撫で、銷夏の心地を誘ふて呉れる。で、ボール打つ手も軽い。

○兩側松樹の路を進めば南川橋に至る。こゝから、ホテルまで約二丁。

○ホテルは輕快な建物で、線路に沿ふて位置して居る。

○長安寺村街道の兩側には赤松五葉松、樺などが脊丈延ばして生ひ茂つて居る。常緑の樹だけに氣持がいい。樺は眞直ぐに聳え立つ所がなんとも言へぬ尊さがある。

○松も樺も葉の繁みが重なり合つて、太陽の光線を遮ぎるに具合よく出来て居るから、樹下は冷や

かな涼味を覺えて居心地がいい。

○輕便寢臺を組み立て、樹下午睡もなかく、趣情がある。都街では味へぬ悠長さもある。

○ホテルから八丁ばかり涼しい路を歩んで行くと門がある。

○入るべく見れば雲性門、四柱に聯が懸けられてある

一住寒山萬事休。
更無雜念掛心所。

閑拾石辟遊詩句。
德運還同不繫舟。

○出るべく見れば唯二門、四柱に聯の垂るゝを見る。

新羅舊觀、節波金剛。
蓬萊洞天、萬二千峰。

○此處を過ぐれば萬川橋に出づ

○橋上に佇んで溪流の奥上は、長慶峰、地藏峰、釋迦峰の諸姿を見る、金剛景情美の展開はこゝより始まる。

○橋を渡れば長安寺である

○六殿七閣、古雅閑寂の裡に存在す。山又山、諸峰、樹々圍繞して靜寂の極みを知る。所謂、金剛靈場の情景を表現して居る。

○四柱の門がある。萬水亭、裏より見れば水晶門となる。門の周圍の空地は僧徒達の丹精で植込んだ野菊、百日草など爛熳と黄ない紅い桃色と染めた笑顔が美しい。

○石段を上がれば金剛山長安寺と太字で書いた大額の掲かつた樓門を見る。其額の兩側に臨濟宗第一伽藍の扁額がある。

○樓下をくぐつて、振り返ると軒下に梵主樓の扁額を見る。

○樓側に梵鐘閣、朝な夕な鐘打の音は響き渡る。

○長安寺の本殿は即ち大雄寶殿

○右に大香閣、左に極樂殿。

○極樂殿は滿鐵時代に借受けてそこを長安寺ホテルとして設けて居た。現在事務所となつて居る。

○大雄寶殿の六柱に聯を懸垂して居る。
如來智圓滿、境界亦清淨
譬如大龍王、普濟諸群生
春山疊亂青、秋水漾虛碧

○殿内三宮に劃されて、三佛像安置せられて居る。
滿月宮に藥師如來
寂滅宮に釋迦牟尼佛
極樂宮に阿彌陀佛

○諸峰の雲間に、姿を消す夕頃に、淨心朗らかな讀經の聲、間斷なく叩く木魚の音響、長安寺村の靜寂を破つて耳に觸れて來る。

○外金剛は徒らに雄大である。男性美の表現である。

○内金剛の景情美は繊細であり雅致に優れ、趣情あり、靈感的であり、ふるいつきたい、靜視したい、飛びつきたいと挑む様な自然の極美が深刻に彫りつけてある。

○雨に濡れた明鏡臺の姿、萬瀑洞の變化極まる美的情景、靈源庵の閑寂、水簾洞の懸水の清らかさ

○すべて内金剛の美しさは噛み締めて見たい味がある。
○言はず、女性の肌の様に觸れて見たい誘惑を感じる美の表現である。(一九二六、九、九)

死と満足

小熊九萬造

〔三二〕

行くやうに見へたが、其れからは自分も知らず、気が附いた時は前言ふた刑事室に看護されて居たのである。

格闘中僕は賊を下に組伏せた、賊も僕を上を抱き込んだ、其の賊の右手の短刀が僕の肩胛部から肺部を刺して居たのである。

刑事室で醫者から聞かされるまでは此の負傷を知らなかつた、知つてからも痛さなど覺へなかつた一ツ時の人事不省も、途中水を求めたのも皆此の格闘と負傷の結果である。眠らしめぬのは、眠ると其の儘息が絶へると云ふ醫師の注意があつたからださうだ、しかも平然として死を期することの出来たのは、其死に打勝つ満足があつたからだ、即ち署長感發の一言及賊逮捕等によりて證據立てられたる、平素怠らず其の職分に盡して來たと云ふ自信ある満足が死をして悔ゆるに至らしめなかつたのだ。

此の賊の逮捕で町の被害は全部擧り、予の負傷も案外に經過がよくて入院六十日間で全く快癒し、今六十歳の老齡になつても壯者に伍して、京城消防の職務を辱め得ると云ふのは何たる幸福だらう。

一度死んだ命今更惜しくもないとはよく聞く事だ、故板垣伯も岐阜事件以來事に觸れては之を言はれたやうに思ふ。が、自分は一度死んだ命とは云へ、今となつては死ぬのが惜い、僅の健康の故障にも死を怖れる。

けれど、人間満足さへあれば死怖るゝに足らず、苦痛でもない、と云ふ事を、右の負傷事件により體驗し信念づけられたから、今はいつでも、死生に満足の出来る様に入問たるの職分に勉めて行きたいと思つて居る。

となるのであつたから愛されなかつたのも無理はない、今は知らず當時の地方警察署長の上下に對する心遣ひは氣の毒であつた。

此の時分又能谷町に持兇器の泥棒が横行した、縣下第一の評ある老刑事が當署に居るにも拘らず檢舉が出来ない、警察の威信地に落ちた。外勤の自分としては巡邏を勵むより他に方法が無い、非番の日は私服で密行し、當番には同僚に憎まれながら規則通り巡邏した巡邏して、曾て被害家であつた搦米屋の前に来ると、表戸はたしかに締めてあるが、しかも敷居から外づれて居るのが角燈の照らしで分る、すぐ直覺した、占めたと心に悦んだ。相當の警戒を以て靜かに其の戸を排し、更に内側の腰障子戸を明けて内に這入つてから又締めた、對敵身構へで搜索した

が何者も居ない。一、二言家人を呼んで見た其の利那、突然黒臼の中から飛び出た黒影が、僕の右手の角燈を叩き落し、障子の駒を破つて逃げるのを僕は後ろから押へた、此時の嬉しさは喩へ様がない、稍暫く戸外で格闘の後、出て來た家人の助けを得て捕縛が出來た。

署に引致するのに僅三町許の間を僕は二回民家に立寄つて水を求めた、署の事務室に引き入れさせま氏名を問ひ始めると同僚が遽て止めた。其の時僕の眼には周囲の硝子戸の棧が茫乎として擴まつて

「今まで君を目誤つて居た、許してくれ」と署長は僕の耳近く口を運んだ、自分の命は今絶えんとして居る、署員は身分帳を披けて恐るゝ僕の原籍や父母を尋ねる危篤を國に打つたのが分る。時は明治廿八年一月三十日午前二時、埼玉縣熊谷警察署の署直轄なる熊谷町の一部の受持巡査である予は斯うして署の刑事室に取容看護された、死に面して恐怖もなく煩悶若痛、悔恨もなく、平然として其の死を待つて居るのである。

僕の埼玉縣は二度目の巡査奉職だ、初は警視廳で所謂警視流の嚴格なる警察教育を受けて居たから埼玉に來ても俄に地方化せず勤務は嚴格であつた。爲に署員にも受けが悪く、署長にも愛されなかつた、唯一人の山田と云ふ直屬の警部が庇護してくれたばかり、僕は今に彼を徳として忘れぬ。

僕の警視廳育ちは地方に來ては餘りに嚴格であつたと思ふ、或日清潔方法の監督に下水掃除の不充分なのをやり直さして居ると、署長が來て中止せしめた、又或夜放歌高聲して署前を往く者を制止したが肯せぬので引致告發した、之も署長が放免して仕舞つて、尙懸念を残して居た、前者は町會議員後者は博徒の親分町の顔役で、好んで署と人民との間に介在の勞を取る者であつた。僕の警視流のやり方は、斯うして署長政策の妨害

丁度此の時だつた、我々が各官署

陣中即興

工藤重雄

青嶋攻圍の時、中村に着いたのは丁度初秋の頃だ、馬はへト々々になつて居たから、数日の滞在を仕合せと自分の休養よりも馬を大切に扱はつたものだ。河に馬を引き入れて朝夕洗つてやつた。

朝ぼらけ霧立ちのぼる河のへに武夫共の馬洗ふ見ゆ

實景だ、實感だ、歌人の歌と見て呉れてはこまる。

夕されば絶へくになる大砲のひびける岡にかゝる三ヶ月

これは黒見の戦のすんだ其の晩の光景だ。

かりねする戦の野邊の虫の音をいくかの命のべて聞くらむ

何時出發命令が来るのか判らない手綱を手に巻きつけて止まれの號令があつた場所にそのまゝ眠るのだ。照明弾とは話にも聞いた事が無かつたので敵が之を連發するに驚いた。而も敵は我軍の行動を阻止する爲に大砲の盲打ちをする危険は疾くに通り越して正に死八分生二分といふ時だ、こんな時にも秋の虫は秋草に、秋の露に、亂るゝが如く鳴いて止まないのだ、その折にフト浮んだ歌さ。

飛ぶ雁よ雲井の外に出で、見よ我古里も月や照るか

何でも月の夜の事、母戀し、兄妹戀しと思つたのだ。

松山つたいに偵察すれば

月に風情の曳火彈

夜中バツと松山の姿が見へる、それが如何にも美しく繪にもしたいと思ふ程だ。

妻と添ひ寝の夢見てさめて寢言氣にする後備兵

強がりを言ふ後備兵が、背囊枕に藪蓐住居、危険地域にある程に、晝は武士の意氣張り切る働きをするが睡魔の乗す所となりて夢に妻と語るは當り前だ。醒めて人の聞かかど心配するのもやさしい心懸けである。

これが別れと恩賜の酒を突撃陣地で廻し飲み

盃は飯盒の蓋だ「明朝ハ四時行動ヲ起シ、某々他點ヲ確實ニ占領シ云々」の命令が来て居る。恩賜の酒が分配される。實は死ねとの暗號だ、濠から顔を出す敵は最後の防禦に狂ふが如く砲火を濺殺して居る。一順飲み終つた時には、兩眼には決死の涙が光る。

波風よ心して吹けみいくさのたゝかひ勝ちて歸る船路を

第三句が何だか變だがのびくした氣になつて、沙子口から乗船した時の歌だ。

とりで破り東の方をふしおがみ涙なりけりかちどきのこと

思へば十三年前の話だ。霜月七日の朝、唐紅に東の雲と海とが光る。旭日は——皇祖の靈は——昇り初めてサツと青島一帯を照す。

丁度此の時だつた、我々が各砲臺を占領したのは。峰といふ峰には既に旭日旗はひらくとひるがへり、各兵士が持參する日章旗は旗行列の如く見へた、封鎖艦隊は船體相衝んで靜かに、遙かに其の船體を現はして寄せて來た。何といふ勇ましい、壯大な、感激的な光景であらう、我々は萬歳を叫んだ

喇叭手は君が代を吹奏した。而も喇叭の音は亂れ、萬歳の聲は震へた、東方宮城と桃山御陵を念じて伏し拜んだ時、譯なしに雨の如く熱涙が流れて止まかつた。その折のありのまゝを、手帳に書きとめたのが右の歌だ、歌では無い簡單な日記が偶々三十一字になつてるのだ。

〇脇判事さん、時々將棋をやる而かも仲々強い。大山朝鮮時論子など、ヒドクいちめられるので、これではいかんとはかり、新聞に載つてゐる高段者の對局を研究し「假すに一年の歳月を以てせよ、きつと目に物見せる」と、眞つ赤になつて、向ふ鉢巻で、復仇計畫に熱中してゐる。

〇その大山氏の盤を見ると、中古の組板に、半紙を白々と貼りつけ、筆で九々八十一角を書き、廿錢位の駒で、ウン、ウン、エイ

研究してゐるので、この苦學生には、いづれ仇を討たれるだらうと、脇さんも内心首ツ根を洗つて待つてるさうな。

〇處がこゝに脇さんも兎を脱ぐ強者があらはれた。それは畫家の加藤松林君で、やつて見ると、テナデも齒も立たないので、脇さん

「俺も一ツ組板で盤をつくるかな」

人のうわさ

平田久雄

〇脇判事さん、時々將棋をやる而かも仲々強い。大山朝鮮時論子など、ヒドクいちめられるので、これではいかんとはかり、新聞に載つてゐる高段者の對局を研究し「假すに一年の歳月を以てせよ、きつと目に物見せる」と、眞つ赤になつて、向ふ鉢巻で、復仇計畫に熱中してゐる。

〇その大山氏の盤を見ると、中古の組板に、半紙を白々と貼りつけ、筆で九々八十一角を書き、廿錢位の駒で、ウン、ウン、エイ

研究してゐるので、この苦學生には、いづれ仇を討たれるだらうと、脇さんも内心首ツ根を洗つて待つてるさうな。

〇處がこゝに脇さんも兎を脱ぐ強者があらはれた。それは畫家の加藤松林君で、やつて見ると、テナデも齒も立たないので、脇さん

「俺も一ツ組板で盤をつくるかな」

雜想

永樂町人

言志錄

近ごろ、儒家の書物といふものは、何一ツ讀んだことがない。たま／＼贈る人があつたので、佐藤一齊の言志錄を、久々に讀んで見た。

一齊は、流石に近代の鴻儒である。そのいふ所大體を指し、毫もコセ／＼したところのないのは、快心である。

○唐虞之治、只是情一字、極而言之、萬物一體、不外情之推。

○凡作事、須要有事天之心。

○胸次清快、即人事百難亦不阻

○身有老少、而心無老少、氣有老少、而理無老少、須能執無老少之心、以體無老少之理。

元來、東洋の古學は、心のおきどころの學問であつて、儒教の如きも、人間を相手にせず、天を相手として、考思し、行爲するといふ處に、その魂があるのである。

然るに、末學の徒は、これを考へず、註脚に註脚を加へ、細則に細則を附加し、この教をして、徒らに繁鎖、贅冗のものとならしめた。

一齊は、流石に大人である。そのいふ所は、大道に通達し、讀んで人をして光明ならしめ、快適ならしめ、公勇ならしむるものがある。

私は、この書に對して、近ごろ良いものを讀んだと、深く感謝してゐる次第である。

獨身

宮本武蔵は、一生不犯であつた

さうだ。

彼は、劍に聖であつたのみならず、繪を善くし、彫刻に巧であつた。即ち彼は、一箇の藝術家であつて、その遊ぶところの別乾坤は相當の深さと、廣さとを有つてゐたものと見ていい。

斯ういふ種類の人は終生を狐獨で送つた例は、決して珍らしくない。

池大雅の如きは、女房があつたが、旅して、三年も五年も、その女房を忘れてゐたのである。

劍工大兼光の如きも、一生、修業と旅とに費して、家あることは全く忘れてゐたものゝやうにある

西洋の科學者、發明家には、獨身者が殊に多い。

私は、日本のさうした種類の人に、どし／＼獨身者の出でんことを望んでゐる。道を樂しむためにすべてを一旦するに至つて、それは初めて本筋に洞徹するのではないかと思つてゐる。

著書

朝鮮にも、だん／＼書物をつくる人が、多くなつて行く傾向のあるのは、喜ばしいことである。

鳴かざる虫は、決して珍重されないのである。

叩いて、反響のない鐘は、尊むところは、一ツもないのである。

官位は高くとも、財寶は多くとも、人間は死すれば、一片の枯骨である。

そして死して後、あますところ感徳錄一篇もないに至つては、彼の生存は、畢竟何であつたか、遂に判らないのである。

秋

朝鮮の最もいゝ時は、秋である
天空の高朗さを見よ、大氣の芳烈さを見よ。これをどうして贊嘆

【五四】

せずに居られやう。

十數年前、清川江の流れに沿つて、鮮馬に乗つて、旅したことがある。

自古逢秋悲寂寥、我言秋日勝春朝、晴空一鶴排雲上、直引詩情到碧霄（劉禹錫）

これは實に、實情實景だと思つた。

亦た昨今の月のうつくしきは、どうであらう。

私は朝鮮の秋、朝鮮の月を觀るごとに、これを捨て、内地に歸らうとは思はないのである。

鮮化

自分の朝鮮化したことを、思ひうかべることが多い。

但しその可いか、悪いかは別問題である。

秋ともなれば、彼の草舎に、唐ガラシのまつ赤に熟して、屋根におほいかぶさつてゐるのは、それが朝鮮の情趣で、それが我々になつかしいのである。

若し世の中が開けて、それがだん／＼なくなるとすれば、我々は相當に寂しいのである。

昔の朝鮮が、我々の朝鮮が、なくなつて行く理合である。

それは婦女の情かも知れぬ。併し我々は、我々の十有餘年の記録も、なか／＼大切と思ふ。いはゞそれは我々自身だからである。

◆振つた餘技

吉田 莊 一

間島の日高内四郎氏といふと、當代の快丈夫だが、この人には妙な餘技があつて、どんな病人でも、四五日按摩すると、ケロリと病を忘れさせる。そこで、知人皆いふ『天下の爲ちや、笛を吹け！』

編輯後記

一 記 者

○三矢警務局長の去られるのはまことにお名残り惜しい次第である。

○局長は、公正の士であつて、在任中功績も亦非常に多いのである。而かも朝鮮はマダ局長の手腕と人物に待つ所が多いのに……。

○記者は、簡人的に、知を辱し、刀劍會の諸氏と共に、これから指導を仰がうといふ時、突如御東歸の報に接す。がっかりせざるを得ないのである。

○謹んで、御健康と御清榮とを祈つて已まぬ。

○この六月號の誌上に、酒井婦人病院長が『榮養と性別』と題し自分の宅では榮食を主義とし、徳光博士の御家庭では、肉食を好んで居られる、而かも兩夫人は目下妊娠中だが、多分榮食者には、男の兒が生まれ、肉食者には、女の兒がめくまれるであらうと記述してゐるが、兩夫人はいづれも九月中旬御分娩、而かも結果は院長豫言の通りであつたとは、酒井先生大に感張れる譯である。

○本號縮切後、瀬戸院長、野崎さん、藤村さん、その他四五の方の稿が着いてゐる。いづれも次號の巻初に入れる手筈にしてゐる。

辻將棋所開かる

- 一、當所にお出での方は、辻六段自ら御教授申しあげます。
- 一、當所の月謝は、一ヶ月金一圓五十錢です。
- 一、六七名或は十二三名の同好相會して小會を作らるゝならば、辻六段一ヶ月二三回參上、皆様に御教授致します、この場合一ヶ月謝禮金十圓です。
- 一、一箇人で參上教授を望まるゝ方も、前同斷。
- 一、實力技倆ある方は、相當段位を御輪旋申しあげます。

六段辻繁之助 將棋教授所

京城若草町百六十三番地

雜筆と寄稿

- 一、原稿は毎月十日締切ります。
- 一、しかし成るべく五日頃までに頂いた方が好都合です。
- 一、出来るなら一頁以内にお書き下さい。
- 一、御名前を出すことの出来ぬ原稿は、お載せいたし兼ねます。
- 一、お願ひした時は、どうか努めて御執筆下さい。お願せずとも、お心づきのことはどうかお書き下さい。
- 一、雜筆は事實上寄稿家及び讀者の共有物であります。

細工の御用は 本町 徳力へ 電本三九三九

金銀白金 地金ノ御用、京城明治町 徳力本店出張所 電本二〇八八 電本一五七二

大正十五年九月廿八日印刷 大正十五年十月一日發行 一部定價金四十五錢

京城府和泉町一六四 發行兼 松本 武正 編輯人 石川 利夫 印刷所 京城 日報社 京城府和泉町一六四 發行所 京城雜筆社 電話光化門三〇六

金剛 煎餅 金剛
金剛 羊羹 金剛
金剛 饅頭 山

金剛山産松實花應用品菓

金剛飴

龜屋商店

京二城本町目

電話 二七二番
本局 四七五番

金剛柏子 松の實炒り
金剛柏子菓 朝の實菓子
金剛おこし
金剛しるこ

將棋雜誌

新棋戰

一部金二十七錢

半年一圓四十錢

一年二圓七十錢

▼主幹は八段大崎熊雄、主なる執筆者は七段溝呂木光治、六段宮松關三郎、六段飯塚勘一郎、五段金子金五郎等新進の猛將を網羅す。

▼古今名局の解剖、説明。定跡の研究手ほどき。現代大家の實戰棋譜、觀戰錄。趣味ある詰將棋等、滿紙活氣横溢して居ります。

▼本誌を熟讀せらるれば、自から棋道の妙境に入り知らずく、有段の棋風を具ふるに至る。蓋し同好必讀の専門誌。

東京市日本橋區蠣殼町一ノ四

發行所 新棋戰社

面目を一新せる三越の各階

秋風の身に泌む頃◇

……御用意は三越へ……

秋風の身に泌む頃となりました。秋から冬への御支度を遊ばす時節で御座います。いろいろの品呉服、雑貨、日用品等豊富に取揃ひました、どうぞお寒さの御用意は三越へ願ひ上げます。

下足お預り廢止

一層御出入りが御便利になりましたので、従来に倍して店内は賑つて居ります。

三越

電話販賣係の新設敏速叮嚀に活動いたします

(本局一七三〇番)

下足お預り廢止に於ては層お買ひ易く御便利にたしませ